

令和6年度 文部科学省指定事業
「新時代に対応した高等学校改革推進事業(普通科改革支援事業)」
報告書



広がる学び、多彩な未来

兵庫県立御影高等学校
文理探究科



巻頭言

兵庫県立御影高等学校 校長 沖 良宣

文系志望者のみの「総合人文コース」から文系・理系どちらの生徒も学びを深めることのできる学科への改編を主体的に検討していた本校は、令和4年3月に策定された本県の「県立高等学校教育改革第三次実施計画」に合わせて、文理融合の学びを展開する「学際領域に関する普通科新学科」を目指すことになり、令和4年度普通科改革支援事業に採択していただいた。本県では「学際領域に関する普通科新学科」の名称はすべて「文理探究科」で統一されることが決まり、本校の文理探究科は、本年度1期生を迎え船出した。

本事業最終年として①文理融合の学びの展開 ②先行実施の拡大、並びに検証とブラッシュアップ ③コンソーシアムを活用した学びの広がり ④コーディネーターとの連携強化、といったことを主眼にあげて取り組んだ。詳細は本文を読んでいただけたら幸甚である。

昨年度と同様に、神戸市から市内の放置竹林の活用について高校生の視点からの提案を求められ、コースの1年生が8つの班に分かれて探究し神戸市の幹部職員の前で発表する機会をいただいた。学科の1期生は、文系・理系どちらの志望者も概ね半数ずつとなっている。そのため、どの班も文系・理系志望者が混在し、文系・理系にかかわらず活発に議論し、生徒それぞれが新たな視点に気づき、より深い探究活動に繋がった。昨年度発表した竹チップについては、実際神戸市の新たな公園の舗装道路に使われたが、今年度もこれに勝るとも劣らない発表であった。特に竹紙を使用した広報誌はコストの面で実用化に繋がらなかったが、とても面白い発想で、市民を啓発するのに多少コストがかかっても実用化して欲しいと個人的に思った。

また、探究活動を支えるものとしてクリエイションを令和4年度から先行実施しているが、ブラッシュアップを図った。今年度のクリエイションは選択 STEAM 講座として、「建築」「都市計画」「地震と防災」「AI」「経営」「生物多様性」の6講座を開設し、生徒が自分の興味関心に応じて講座を選択し受講した。原則、講師は企業等外部の方をお願いしているが、講座の終了後、講師・コーディネーター・担当者・引率者等がオンライン上で、生徒の様子を踏まえながら各講座の目的の達成度、内容の妥当性等を振り返っている。生徒の感想には「学校の門に使われている御影石から、戦後の状況だったり断層のことが分かって、意外なつながりを感じた」「以前までは存在を知っているけど使う機会がないものだ、と考えていましたが、実際に使ってみると自分のアイデアを膨らませてくれる存在であり、気軽に活用したいと思うようになった」など肯定的な意見が大半であった。クリエイションは「越境した学び、学校学校しない学び」として本校の文理探究科の特徴の一つとして大切にしていきたいと考えている。

最後に、運営指導委員会、カリキュラム開発会議、コンソーシアム会議で御支援・御指導を賜りました委員の皆様をはじめ、お世話になりました関係者の皆様に深く感謝申し上げますとともに、これからも引き続き御支援・御指導を賜りますようお願い申し上げます。

目次

・ 巻頭言	1
・ 目次	2
I ビジュアル資料	3
概要図 ①実施計画概要	
②実施報告概要	
本事業等に関する概要スライド	
II 研究開発の概要（事業実施計画書(抄)・事業結果説明書(抄)）	7
①事業の実施計画	
②事業の実施日程	
③実施の概要	
1 カリキュラムの検討内容	
2 管理機関による事業の実施体制や管理方法	
3 高等学校における事業の実施体制や管理方法について	
4 運営指導委員会の体制および取組	
5 コンソーシアムの体制および取組	
6 コーディネーターの配置および活動状況	
7 新学科の設置及び設置に向けた検討の関係者への説明の実施	
8 管理機関における事業全体の成果検証、評価	
9 管理機関による支援体制（予算・人員配置等）	
10 成果普及のための取組	
11 国の指定終了後の取組継続のための仕組みづくりに関する取組（特に予算・人員配置について）	
III 研究開発の内容	53
①3つの会議（運営指導委員会、カリキュラム開発会議、コンソーシアム会議）の協議内容	
②コーディネーター業務について	
③ブログメディア「note」を活用した生徒による文理探究科紹介記事の作成と広報	
④目標の達成状況、成果、評価	

【兵庫県立御影高等学校】学際領域学科

文理の枠を超えた学びを通し、広い価値を創造する“Society5.0の時代に求められる生徒”を育てる学際領域学科の創設

社会が抱えている課題		学科の特色
- SDGsの実現やSociety5.0の到来。 - 文系・理系の知識・思考だけでは対処できない課題が多いが、文理を超えた学びが展開されていない。 - 課題を一面的に捉える傾向がある。	文理探究基礎	探究を軸とし、人文科学・社会科学の学びに加え、自然科学分野も取り込んだ学びを展開。課題に協力的に取り組む学びを実施する。
	文理探究実践	大学や研究機関、NPO等とコンソーシアムを創設。学びの共創による学際独自科目を展開。体系的に学びを深め、多様な認識を育てる。

学際独自の学び

1年（探究活動の基礎固め）	2年（スパイラルに探究活動を実践）	3年（探究活動のまとめ）
各教科の学び		
文理探究基礎 SDGsミニコミ誌づくり テーマプレゼンテーション SDGs探究プロジェクト入門	文理探究実践 SDGs探究プロジェクト実践 大学生とチームを組んだ、プロジェクト実践型の探究活動	文理探究発展 論文作成 教科横断型オムニバス授業 2年生の探究活動のメンター
クリエイションI デザイン思考講座 「課題の最適解決を図る思考法」 選択STEAM教育講座 「文理・教科横断型の講座」 「データの分析・表現の仕方」	クリエイションII クリエイションII 外国人留学生とのワークショップ グローバル/ローカルリーダー論講座 ファシリテーション講座	クリエイションIII クリエイションIII 海外の方とのワークショップ プレゼンテーション 企業の方を招聘した講演会



コーディネーターの業務

学際的な学びを新たに行うための高等教育機関や研究機関等との連携依頼や連絡調整、地域課題に係る探究活動充実のための行政機関や企業等との連絡調整、学科内容の周知・広報の検討、校内組織体制の整備等に加え、年数回開催予定のコンソーシアム会議・カリキュラム開発会議等、連携機関等との会議運営に携わり、学びの共創・事業全体の活性化に寄与。

3ヶ年実施計画

【令和4年度】学科設置準備	【令和5年度】学科設置準備	【令和6年度】学科設置初年度
新学科カリキュラム開発 関係機関と連携体制構築 連携協力のもと、学科の特色ある学びの先行実施	入学者選抜の検討 関係機関と連携体制構築 連携強化 広報活動 校内体制の整備 発表会	関係機関の連携協力による教育活動実施 新カリキュラム実施に向けた校内体制の整備

年3回の事業指導委員会による成果の検証・助言のフィードバック 他校・他地域に向けた成果発信

育てたい力

主体性
価値を見出し生み出す感性
価値を見出す力・好奇心・発想力

協働性
リーダー性・フォローアップ

課題解決能力
リーダー性・フォロワーシップ

読解力・データリテラシー
数学的思考力・科学的思考力
現状分析力・実行力

言語表現スキル
発信力・対話力・創造性・構成力

多様な認識
文・理の枠組を超えた高次の認識
多面的な認識・メタ認知能力

育てたい生徒像

未来の自分を見据え、自ら問いを立て、主体的に最後まで粘り強く取り組むことができる生徒

価値観の多様性を認め、誰とも力を合わせて協働し、社会のリーダーとして活躍できる生徒

現状について正確に把握・分析し、見つけた課題を正しく知識や情報をもとに解決できる生徒

力強い一歩を、情熱と知的好奇心をもって踏み出し、失敗を恐れずに挑戦・発信できる生徒

これから社会で活躍できる生徒

育てたい生徒像

未来の自分を見据え、自ら問いを立て、主体的に最後まで粘り強く取り組むことができる生徒

価値観の多様性を認め、誰とも力を合わせて協働し、社会のリーダーとして活躍できる生徒

現状について正確に把握・分析し、見つけた課題を正しく知識や情報をもとに解決できる生徒

力強い一歩を、情熱と知的好奇心をもって踏み出し、失敗を恐れずに挑戦・発信できる生徒

スクールミッション 達成

【兵庫県立御影高等学校】学際領域学科（令和6年度設置）

学科設置の目的・特色ある教育の概要

予測不能な未来において活躍できるリーダーを育てる

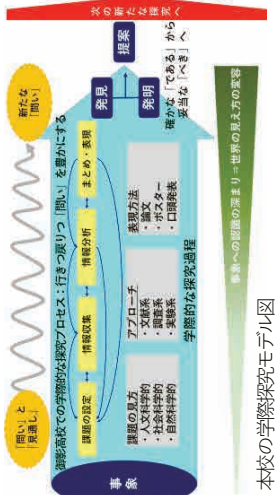
学際的に取り組む探究活動

探究のプロセスを体系的に学び、自らの興味関心に応じた探究活動や、地域に関する探究活動に学際的に取り組む授業を設定し、生徒個々が主体的に探究を実践

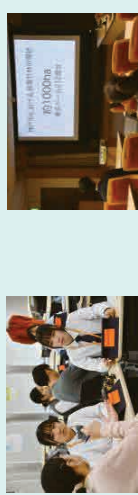
Cross I 3つのコアトレーニング
地域のエエとこプレゼンテーション・ブチ探究

Cross II 地域探究プロジェクト
アカデミックリサーチ

Cross III 探究論文・後輩に対するメンター活動



令和6年度の取組成果・課題／広がる学び、多彩な未来



新学科対象の授業の本格実践

■ 成果

- ・ Cross I
文系志向・理系志向の生徒が混ざり合って探究したこと、文理融合的な探究プロセスが実現
- ・ Creation I
先行実施の成果があり、充実した実践が実現

■ 課題

ブチ探究のテーマ設定の在り方の検討
選択STEAM講座の折衝可能時間の短さ
連携団体内の異動も鑑みた継続的な講師派遣

■ 成果

年・学期単位で業務分担を明確化
毎月の情報交換会（コアタイム）設定
今後の在り方を検討する機会を設定

■ 課題

令和7年度以降の在り方の検討
非常勤であることによる外部折衝への制約
校内ITリソースへのアクセスの在り方



広報活動の充実・継続

■ 成果

年間22回・3100名超の方に向けて広報
近隣中学校主催の高校説明会にも参加
10校からの学校訪問や取材等にも対応

■ 課題

継続的な広報活動の実施
「学際領域学科」そのものの周知
他校等との継続的な情報交換

多様な認識

兵庫県立御影高等学校 文理探究科 グラデュエーション 専任講師

地域や国際社会のありようによりしにしっかり目を向け、社会に貢献しようという志をもち、さまざまな事象の解決や正、および、原因の追究に粘り強く挑戦し続けることができる生徒

人文・社会・自然科学の専門知識を深め、事象を多面的に認識ができるようになるとともに、自らの読解力や論理的思考力を磨き、新たな価値を見出だそうとする好奇心をもつ生徒

地域や国際社会に生きるさまざまな方と対話を重ねつつ、自ら学び、考えて行動できる主体性や、周囲の仲間と協働しながら物事に取組む中で、リーダーシップが発揮できる生徒



校外機関との連携（★はMIKAGEコンソーシアム参画団体）

コーディネーターを活用し、新たな思考や新たな価値観、知的好奇心を育むために、大学や行政、研究機関、企業や社会貢献を行う団体等と連携した教育活動を実施

学科独自の開講科目

教科の専門知識を幅広く学べるとともに、実社会で活かすことができる「読解力」や「論理的思考力」「対話力」「表現力」等を磨くための科目を設置

Creation I・II
校外でのSTEAM教育に関わる講義・ワークショップ、海外の方とのコミュニケーションプログラム、充実したレクチャーやフィールドワーク等を実施する。

クリティカルシンキングA・B
Society5.0を生き抜く生徒を育てるために「読解力」や「論理的思考力」、「対話力」、「表現力」等を磨くとともに、主体的に他者に伝えたり、他者と伝え合ったりすることで、自らの考えを発展させる体験を行う科目として設置する。

Creative Presentation A・B
英語運用能力の強化やスピーチに必要な能力の向上も図りつつ、選んだテーマに関し、情報や自分の意見を加えて発表するスピーチセッションを英語で実施。発表だけでなく、司会や助言等の役割を行う経験を積む。

充実したカリキュラムの検討・検証

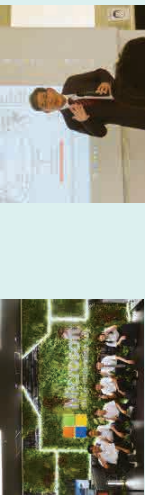
■ 成果

学びの先行実施（独自科目の学びを中心に先行実施）

- ・ Cross II・III
- ・ Creation II
- ・ クリティカルシンキングA・B
- ・ Creative Presentation A

■ 課題

カリキュラムや指導の在り方の継続的な検証
校内運営体制の強化
評価の在り方も含めた生徒の学びの検証



Ⅱ 研究開発の概要（事業実施計画書(抄)・事業結果説明書(抄)）

①事業の実施計画（所属等は令和6年3月31日現在）

1 事業の概要

（1）学際領域学科又は地域社会学科を設置する学校名・設置（予定）年度

公立・私立・ 国立・株立の別	学校名 (ふりがな)	学科の 種類	設置（予定）年度	決定
公立	兵庫県立御影高等学校 (ひょうごけんりつみかげこうとうがっこう)	学際領域 学科	令和6年度	○

（2）学校の詳細

課程別	新学科の収容定員	学年制・単位制の別	学科の名称 (決定している場合)
全日制	40人×3学年=120人	学年制	文理探究科

（3）当該学科における特色・魅力ある先進的な教育の取組について

- 普通科総合人文コースの学びを発展させて学際領域学科を設置
平成19年に設置した総合人文コースを改編して学際領域学科（仮称：文理探究学科）を設置する。総合人文コースの人文科学・社会科学の学びを発展させ、自然科学の学びも取り込んだ「文理をクロスする学び」として学際的テーマでの探究活動を中心軸とした学びを展開する。
- 学際的な探究活動を体系的に実施【4（1）参照】
 - 〔1年〕『CrossⅠ』……探究活動の基礎固め
身近な地域に関するミニコミ（mini communication）誌・動画づくり、学問リサーチ、プチ探究、地域探究プロジェクト入門
 - 〔2年〕『CrossⅡ』……スパイラルに探究活動を実践（探究のサイクルを繰り返しながら深めていく主体的で課題解決的な学び）
地域探究プロジェクト実践、アカデミックリサーチ
 - 〔3年〕『CrossⅢ』……探究活動のまとめ
論文作成、2年生の探究活動のメンター制（後輩に的確な助言ができる協働的な学び）
- 学際的な探究活動を支えるための科目「Creation」
 - 『CreationⅠ』（1年1単位）
STEAM教育講座、デザイン思考講座、データリテラシー向上講座
 - 『CreationⅡ』（2年1単位）
国際貢献活動にかかわるプロジェクト挑戦（TRYプロジェクト）、ファシリテーション講座、1on1傾聴講座、リーダー論講座
- Win-Winの関係で探究活動を支援する連携機関「MIKAGEコンソーシアム」
総合人文コースの探究活動において、神戸大学文学部や神戸市東灘区との連携においては、双方にメリットのあるWin-Winの連携関係を構築することで、今までの協働活動により良好な連携関係からさらなる発展を目指す。【4（2）参照】
新学科設置の際にも、学際領域学部である神戸大学国際人間科学部をはじめ様々な機関と双方にメリットのある連携として、生徒を中心に据えた学びの共創の形態となるように「MIKAGEコンソーシアム」を構築する。
- 学科生全員履修の先進的な学びを取り入れた学校設定科目設置【4（1）参照】
 - 『クリティカルシンキングA』『クリティカルシンキングB』（2年3年 各2単位）
 - 『Creative Presentation』（2年2単位）
- 国際的な取組や企業の取組等を学ぶ機会を積極的に提供
学際的課題を国内外の広い視野で考えるため、国際NPOによる途上国支援やSDGsに積極的に取

り組む企業の取組を学ぶ機会を積極的に提供する。

○ 独自の特色ある学校行事の実施

ことばの力シンポジウム（各界で活躍している卒業生の講演）、フィールドワーク（県外高校生との探究活動交流会）、御影セッション（学年を超えた学び合い）等

2 事業の目的等

（１）学際領域学科又は地域社会学科を設置する高等学校を取り巻く状況の分析、学際領域学科又は地域社会学科を設置する必要性

○ 本校の総合人文コースの成果と課題

本校の総合人文コースは、神戸大学文学部や神戸市東灘区役所とのWin-Win の関係での連携【4(2)参照】による、地域の課題をテーマとする探究活動を特色として行ってきた。地域の課題に関心を持つことや、グループで協働して探究しその結果を発表する活動に積極的に取り組むという点では、コースは十分成果を上げている。

しかし、教育課程が文系のみの対応であり、中学3年生段階で希望進路を絞る必要があるように捉えられるためか、定員（40人）の100%を推薦で募集し、出願者数が定員に満たない事態が発生（令和3年度入学生）したことに加え、地域での活動に重点を置く教育活動を展開しながら、教育課程上の制約で、自然科学の視点からのアプローチがしにくい現コースの対応では、限界が見えつつあった。一方、広い視野に立てば、Society5.0 の時代の到来に伴い、AI が進展する予測不能な今後の社会に対し、SDGs の実現に向けた地球温暖化や自然災害、食料不足問題、人口問題、貧困、感染症など、地球規模の課題を解決するためには、文系・理系を超えた幅広い視点、ものの考え方ができる人材、溢れる情報を分析・整理できる力を備えた人材の育成が必要であると考えられる。そこで、文理を超えた視点で考えることや、地域の課題から地球規模の課題に視点を広げるといった点は、現コースの大きな課題であると考えられた。

また、この課題は令和3年度にコースの2年生を対象として実施した、三菱UFJ リサーチ&コンサルティングによる「高校魅力化評価システム」のアンケート結果でも明確な形で示された。

〔質問項目〕	〔当てはまると答えた生徒の割合〕
・グループで協力しながら学習や調べものを行う	90.2%
・活動、学習のまとめを発表する	91.2%
・地域の課題の解決方法について考える	100.0%
・将来の <u>国や地球の担い手</u> として、 <u>積極的に政策決定に関わりたい</u>	44.1%
・ <u>国際社会の課題解決に貢献したい</u>	67.6%
・ <u>客観的な証拠に基づき考え、判断する科学的視点から課題解決にあたる</u> ことができる	50.0%

○ 総合人文コースを学際領域学科に改編する必要性

こうした本校の総合人文コースにおける課題を解決し、これからの社会で求められる人材育成を目指すためには、学際領域学科に改編し、様々な機関と連携した文理融合の学びを展開することが必要である。また、コースの学びを生かして、地域の課題を考えること（ローカルな視点）が地球規模の課題を考えること（グローバルな視点）に繋がっていると理解できるような学びも展開したい。

○ 主体的な学びを継続させるための大学進学を目指す普通科の先進的モデルを目指す

本校は神戸市の都市部である東灘区にあり、生徒のほぼ100%が大学入試を目指す普通科高校である。全国の多くの普通科高校がそうであるように、大学入試を意識すれば、受験科目に対応した学びに力を入れがちとなる。こうした中、生徒・保護者の学びに対する意識改革として、本校職員による講義-聴講形式だけにとどまらない幅広い学びを行い、内発的な動機・意欲を高めることにより、学際領域学科を設置し主体的な学びを継続させるための大学進学を目指す、全国にある都市部の公立普通科高校における先進的な学びを展開していきたい。

（２）学際領域学科又は地域社会学科における取組の目的・目標（学際領域学科又は地域社会学科における教育を通じて育成を目指す資質・能力を含む）

○ スクールミッションおよびスクール・ポリシーで示した育成を目指す４つの力

令和３年度に本校で作成したスクールミッションおよびスクール・ポリシーにおいて、以下の４つの力を、グラデュエーション・ポリシー（本校生徒に対して育成を目指す資質・能力）としている。

『主体性』（自ら課題を見つける力・主体的に取り組む力・継続的に取り組む力）

未来の自分を見据え、自ら問いを立て、主体的に最後まで粘り強く取り組むことができる生徒

『協働性』（多様な価値観を受容する力・協働的に取り組む力・リーダーシップ）

価値観の多様性を認め、誰とでも力を合わせて協働し、社会のリーダーとして活躍できる生徒

『課題解決能力』（正確に事象を把握し分析する力・課題の解決策を見出す力）

現状について正確に把握・分析し、見つけた課題を正しい理解や情報をもとに解決できる生徒

『言語表現スキル』（熱意・好奇心・挑戦しようとする力・発信力）

力強い一歩を、情熱と知的好奇心をもって踏み出し、失敗を恐れずに挑戦・発信できる生徒

○ 学際領域学科に必要な力は４つの力に加えて『多様な認識・高次の認識ができる力』

上記で示した４つの力は、「非認知能力」と言われるものであるが、学際領域学科を設置するにあたっては、これらの４つの力に加えて、「認知能力」（数値化できる知的な能力）も重要であると考え。そこで、学際領域学科において育成したい力としては、上記４つの力に加え、文理融合の学びを通して『多様な認識・高次の認識ができる力』を加え、これら５つの力の育成を目指す。

そのためには、探究活動の現状を教科の授業担当者とも共有する場面を設けるなど、探究活動と教科の授業との関わりを意識することに加え、教科の授業に限らず、探究活動や課外活動を含めた教育活動のさまざまな場面において、生徒達がグループでディスカッションしたり、初対面の方に対して自らの研究を伝えたりする活動を増やすなどの工夫をしていく。そうすることで、社会の持続可能性に関わる学際的で複雑な課題に対して、各々の知識に加え、「多様な認識」や自らの知識をもとに、「主体性」「協働性」「課題解決能力」、そして、「言語表現スキル」を生かして、その時にふさわしい適切な解を探し求めることができるような生徒を育てたい。

○ 総合人文コースを改編して設置する学際領域学科の目標

こうした中、総合人文コースを改編して設置する学際領域学科の目標を、次のように定める。

大学や行政・企業など様々な機関とのコラボレーションによる探究を中心とした文理融合の学びを通して、より広い価値を創造し、多様な認識や高次の認識ができる力を持って、学際的課題の解決に向けて、将来社会で活躍できるリーダーシップをもったクリエイティブな人材を育成する。

なお、文理融合の学びを生かすために、教育課程は生徒の主体的な学びを継続させるための多面的な編成を行うとともに、コーディネーターを中心に創設する「MIKAGE コンソーシアム」の協力のもと、生徒に将来のロールモデルとなるような社会で活躍する方々を招聘した授業を行い、生徒により具体的な将来像を思い描かせ、学び続けた後の「自分」を意識させることにより、主体的に学び続ける生徒を育てていきたいと考えている。

3 実施体制

(1) 管理機関における実施体制や事業の管理方法

【事業実施に向けた経緯】

本県では、「ひょうご教育創造プラン（兵庫県教育基本計画）」に基づき、県立高等学校に関する具体的な取組の考え方と方向性を示す「県立高等学校教育改革実施計画」を策定し、計画的に教育改革を進めてきた。

具体的には、「第一次実施計画」策定（平成 11 年度）以降、「学びたいことが学べる学校づくり」を一貫した基本理念とし、特に、普通科学年制においては、コースの設置に加え、複数の学校設定科目を設定し、生徒の興味・関心を重視した入試を行う本県独自の特色類型を設置してきた。この結果、専門学科の併置校を除く全ての普通科学年制高等学校にコースまたは特色類型のいずれかを設置するに至っている。

（コース 15 校、特色類型 55 校）

普通科新学科については、令和 4 年 3 月に策定した「県立高等学校教育改革第三次実施計画」において、設置の方向性を明確に打ち出すとともに、普通科コースの改編を軸とした全県規模の配置を計画的に推進することとしている。

県立御影高等学校と県立柏原高等学校は、普通科コースの内、いち早く普通科新学科への改編を意識したカリキュラム等の研究を組織的に行っており、高校教育課とも数次にわたって調整を進めてきた経緯があることから、2 校を申請することとなった。

令和 4 年度より入試方法の概要を含めた検討を行った上で公表し、1 年間の周知期間を経て、令和 6 年度に普通科新学科を設置する。

【事業の実施体制】

①「普通科新学科推進委員会（仮称）」の設置

- ・普通科新学科の設置校及び設置を目指す高等学校（15 校程度）を構成員とする「普通科新学科推進委員会（仮称）」を、高校教育課主導で設置
- ・定期的に研修会等を開き、各校の改編に向けた進捗状況を確認するとともに、探究活動を軸としたカリキュラムの展開等について共有
- ・本事業指定校には、モデル校として中心的な役割を付与

②本事業指定校が開催する運営指導委員会等への参画

- ・本事業指定校の運営指導委員会等に、高校教育課長が委員として参画

③本事業指定校に対する県独自の支援

- ・探究活動に特化した特別教室の整備（ICT 環境等の充実）
- ・担当指導主事による継続的な指導助言

④普通科新学科に関する周知

- ・普通科新学科の特長等に関する組織的な広報の展開（HP 等の充実）

【事業の管理方法】

①本事業指定期間中

- ・運営指導委員会における進捗状況の把握及び指導助言
- ・「普通科新学科推進委員会（仮称）」における報告の義務化

②本事業指定終了後

- ・普通科新学科設置後の成果報告を義務化
- ・本事業終了後の人的配置の検討

(2) 管理機関における事業全体の成果検証、評価のための体制、考え方

【事業評価の体制】

① 運営指導委員会での検証

- ・大学教授等の有識者による、学術的な視点からの継続的な評価

- ・外部委員等による、客観的な視点からの継続的な評価
 - ・高校教育課長をはじめ、担当指導主事による継続的な評価及び指導
- ② コンソーシアムでの検証
- ・コンソーシアム構成員による、多角的な視野からの評価
 - ・高校教育課長をはじめ、担当指導主事による継続的な関与及び助言
 - ・校内の教職員及び生徒による、計画的な自己評価
- ③ 「普通科新学科推進委員会（仮称）」での検証
- ・普通科新学科設置校及び設置を目指す高等学校を構成員とする委員会での相互評価
 - ・指導主事による各校の成果に関する相対的な評価
 - ・探究の指導についての研修会の実施
- ④ 兵庫県教育基本計画に基づく検証
- ・「ひょうご教育創造プラン（兵庫県教育基本計画）」に基づく年度末評価の実施

【事業評価の考え方・観点】

- ① スクール・ポリシーの適切な設定
- ・生徒に身につけさせる資質・能力の明確化
 - ・資質・能力を育成するために必要な教育課程に関する方針の明確化
 - ・入学時に期待される生徒像の明確化
- ② 育成すべき資質・能力に関する評価方法の適切な設定
- ・生徒の目標に対する到達度（ポートフォリオ、ルーブリック等）
 - ・生徒の興味・関心・意欲等に関する教職員の理解度
 - ・生徒や教職員、協働者に関するコーディネーターの理解度
- ③ 3年間を通じた体系的なカリキュラムの設定
- ・教育目標に則した教科横断的で体系的なカリキュラムの設定
 - ・学校設定教科を軸とした、探究活動中心のカリキュラムの設定
- ④ ICT等を活用した授業設定
- ・BYODをはじめとする情報端末機器を有効に活用した授業の展開
 - ・急激な社会変化等に影響を受けにくい学習環境の構築
- ⑤ コーディネーターの有効な活用方法の検証
- ・コーディネーターの得意分野を生かした学校組織での活用
 - ・コーディネーターによる研究機関や地域社会との接続点の増加
 - ・コーディネーターを軸とする学校内外の協働体制の構築
 - ・コーディネーターの関与によるワークライフバランスの組織的な担保

【具体的な評価指標（例）】

高校の魅力・特色を高校選択の理由にした生徒の割合

【第3期ひょうご教育創造プラン指標】

区 分	R 2 年度	R 3 年度	R 4 年度	R 5 年度	最終目標
目標	83.0%	84.0%	85.0%	86.0%	87.0%
実績（見込）	82.5%	79.3%	78.6%	77.4%	

(3) 学際領域学科又は地域社会学科を設置する高等学校における事業の管理方法

①校内組織の改編

- ・コーディネーターを校務分掌に位置づけ、組織としての役割を明確化
- ・校内の教育活動全体に関するコーディネーターの関与を充実
- ・職員会議等において、事業内容に関する情報を共有化

②普通科新学科設置検討委員会の設置

- ・普通科新学科設置に向けた準備委員会を校内に立ち上げ、コーディネーターを含む委員により、組織的に改編を推進

③運営指導委員会の開催

- ・運営指導委員会を年間3回以上開催し、専門的な知見を有する大学関係者や企業関係者や自治体関係者、地域NPO等の委員から助言を受けながら、校内の教育活動に対して進行管理、評価、指導を実施
- ・委員会の構成員である県教育委員会事務局から、県全体の施策等を踏まえた指導助言の実施

④コンソーシアム運営委員会の開催

- ・コンソーシアム連絡会を定期的に行き開催し、カリキュラムについて、各専門分野の立場から必要な助言を与え、協働体制を構築
- ・探究活動に関する情報やデータの提供や、フィールドワークやインターンシップ等の体験的な学びやICTを活用した海外との交流の機会を提供
- ・カリキュラムの実施にあたって、必要に応じて、人的、物的な支援を展開
- ・実行されたカリキュラムの成果に関する定期的な報告を受け、必要な助言を付与
- ・普通科専門学科としての特色ある教育課程の推進のため、各種分野において優れた知識・技能を有する社会人等を学校設定教科・科目、総合的な探究の時間等の講師として活用する特別非常勤講師を配置
- ・本県知事部局の国際交流課・国際経済課等との協力のもと、指定校と国内の大学や企業、海外の教育機関との連携強化や、本県SSH指定校等で組織する「兵庫『咲いテク』事業推進委員会」との連携を推進する事業の支援・拡大及び成果の普及を展開

※①～④を関連付けることにより期待される相乗効果

- ・探究活動は、専門的かつ広範囲的な内容を伴うことから、従来の高等学校の教育環境のみでは効果的な実施が困難な状況であるが、多方面の専門家や組織が、事業実施校の教育目標や実施内容に関する情報等を共有することにより、人的支援及び物的支援等を受けやすくなり、内容の深い学びを機能的に実現する可能性が高まる。
- ・生徒が個々に発案して進める探究活動を、校内外の様々な場面で公開していくことにより、生徒の課題意識が社会全体の課題とリンクしやすくなり、より大きな支援等を得た教育活動となり得る可能性が高まる。

（４）管理機関及び申請校における研究開発の実績（申請校が新設校の場合、管理機関における実績のみを記載）

〔管理機関における研究開発の実績〕

学校名	指定年度	指定機関	研究主題
神戸長田 尼崎小田 宝塚北 三田祥雲館 明石北 加古川東 小野 姫路西 姫路東 龍野 豊岡	平成16～令和7年度 令和4～令和8年度 平成17～令和7年度 令和元～令和5年度 平成21～令和8年度 平成22～令和6年度 平成18～令和8年度 令和元～令和5年度 令和2～令和6年度 令和2～令和6年度 平成25～令和9年度 平成18～令和8年度	文部科学省	スーパーサイエンスハイスクール 将来の国際的な科学技術関係人材を育成するために、先進的な理数系教育を実施する高等学校等を指定し、理数系教育に関する教育課程等に関する研究開発（実践的な研究を含む。）を行う。
姫路西 庫 伊丹 国際	平成26～平成30年度 平成27～令和元年度 平成27～令和元年度 平成27～令和元年度		スーパーグローバルハイスクール グローバルな社会課題を発見、解決できる人材やグローバルなビジネスで活躍できる人材育成するため、質の高いカリキュラムの開発・実践を行う。
兵庫生 野 柏原 用 村岡	令和2～4年度 令和元～3年度 令和元～3年度 令和2～4年度 令和2～4年度		地域との協働による高等学校教育改革推進事業 市町村・高等教育機関・産業界等との協働によるコンソーシアムを構築し、地域課題の解決等の探究的な学びを実現する取組を行う。
御影 柏原 篠山鳳鳴 姫路飾西	令和4～6年度 令和4～6年度 令和5～7年度 令和5～7年度	文部科学省	新時代に対応した高等学校教育改革推進事業 学際領域学科又は地域社会学科等の設置に向けてのカリキュラム開発や実施体制の開発等、普通科改革の実現に資する先進的な取組を行う。

〔申請校（兵庫県立御影高等学校）における研究開発の実績〕

- ひょうごスーパーハイスクール指定（平成30・令和元年度）
本校の研究テーマ：持続可能な国際社会をつくるリーダー育成
- 三菱みらい育成財団助成事業指定（令和3～5年度）
カテゴリー1「心のエンジンを駆動させるプログラム」で指定
本校のプログラム名
伸ばせ！『みかげ力』外部連携を活かした生涯学び続ける生徒を育てる探究活動
- 近年の課題研究などの外部発表等での受賞
関西学院大学リサーチフェア 2021 実行委員会特別賞
甲南大学リサーチフェスタ 2021 クリエイティブテーマ賞
神戸市東灘区 青少年を地域でたたえる賞
課題研究食品ロス研究チーム
（廃棄する野菜を使ったスープレシピを考案。神戸市作成のレシピ集に掲載）
甲南大学リサーチフェスタ 2022 クリエイティブテーマ賞
関西学院大学リサーチフェスタ 2023 奨励賞 「カラスのゴミ被害を抑制する～身近にできる対策方法で～」
甲南大学リサーチフェスタ 2023 クリエイティブテーマ賞「血液型診断は本当なのか」・アトラクティブプレゼンテーション賞「日韓関係改善のため意識すべきことは何か」・ロジカルデザイン賞受賞「早口言葉の達人になるには」

(5) 運営指導委員会の体制

所属	氏名	主な実績
関西国際大学国際コミュニケーション学部 准教授	前田 哲男	専門は英語教授法。兵庫県教育委員会勤務を経て、県立生野高校・三木高校・小野高校の校長を歴任。令和3年4月から現職。令和4年4月から同大学高大連携室長。
神戸大学文学部 准教授	菊地 真	専門は地理学。現在は災害と文化財保存を研究。本校と神戸大学文学部の高大連携（神戸大学生が本校生徒の課題研究を指導）の担当者も経験。
甲南大学フロンティアサイエンス学部 教授	甲元 一也	専門は生命科学。現在は産学連携によるバイオテクノロジーを研究。SSH校等での特別講義も実施。
NPO 法人Colorbath ディレクター	椎木 睦美	JICA 青年海外協力隊員としてアフリカ（マウイ）に赴任。現在は「途上国と日本の共成長」をテーマに国際的なWeb 交流事業等を実施。令和2年度に世界経済フォーラム（ダボス会議）Global Shapers の日本代表に選出。
(株) マルヤナギ小倉屋 社長	柳本 勇次	神戸市東灘区にある佃煮等を製造する食品メーカー。食品ロス問題や有機物を含んだ排水を利用した最先端の発電にも取り組んでいる。
神戸市東灘区まちづくり課長	永野 喜久	本校と神戸市東灘区が連携協定を結び、まちづくり課の若手職員が本校の地域課題研究を助言。
兵庫県教育委員会高校教育課長	新谷 浩一	設置者代表

(6) 運営指導委員会が取り組む内容

校長経験のある大学教授、文系と理系の専門性のある大学教授、国際NPO、企業、地元行政機関など、学際領域学科設置に向け専門的な指導・助言が可能な方に委員を委嘱する。

年間3回程度運営指導委員会を開催し、各委員の専門性を活かして、令和4・5年度は、新学科設置に向けたカリキュラム開発、校内の体制整備、コンソーシアムの構築や連携、中学校等への周知・広報等の進捗状況、中学校等への広報活動等について助言を行う。令和6年度は、学科の設置年度となるため、入学生の状況等を把握し、カリキュラムの実施や関係機関との連携の深化等について、具体的な助言を行う。

4 学際領域学科又は地域社会学科における取組

(1) 学際領域学科又は地域社会学科におけるカリキュラムや教育方法等の特色・魅力ある先進的な教育の内容（学校設定教科・科目の詳細は別添1「学校設定教科・科目の設定に関する説明資料」に記載。）

○ 「総合的な探究の時間」による探究活動（学科生全員履修、3年間で4単位）

◇ 『Cross I・II・III』（1年1単位、2年生2単位、3年生1単位）

・ 1年1学期～2学期 「探究プロセスの基礎固め」

探究活動のプロセス（課題設定・情報収集・整理分析・まとめ表現）をスパイラルに繰り返し、プロセスの体得を目指した活動を実施。単元ごとに重点項目を設定し、探究のプロセスの各場面における取組み方に焦点化した活動（3つのコアトレーニング）を展開する。

身近な地域に関するミニコミ誌・動画づくり……（重点項目）テーマ設定とまとめ方

学問リサーチ……（重点項目）情報収集とその表現

国際的視野に立ったプッチ探究……（重点項目）テーマ設定、情報分析、発表の仕方

・ 1年3学期～2年1学期 「探究プロセスの展開①」

地域探究プロジェクト実践：神戸大学と協働して課題解決策を見つける学際的探究活動

・ 2年2学期～2年3学期 「探究プロセスの展開②」

アカデミックリサーチ：関係機関と連携して文理融合の学際的テーマについて探究

・ 3年1学期～3学期 「探究成果の実感」

論文作成：1・2年の探究活動の内容を論文としてまとめる。

2年生の探究活動のメンター：2年生の探究活動にアドバイザーとして参加

○ 学際的な探究活動を支えるための科目（学科生全員履修）

◇ 『Creation I』（1年1単位、長期休業中等に実施）

・ STEAM教育講座……外部の機関と連携して校外の実習等も交えた教科横断型の講座

・ デザイン思考講座……未知の課題に対して最適な解決を図るための思考法を学ぶ。

・ データリテラシー向上講座……データを正しく読み取り分析・活用するための講座

◇ 『Creation II』（2年1単位、長期休業中等に実施）

・ 国際貢献活動にかかわるプロジェクト挑戦（TRYプロジェクト）……国際NPOの職員として従事されている方の視点に立ち、実際に、現地の方と英語でコミュニケーションしたり、映像や情報を通じて感じたりした課題を解決する方法を探究する課題解決型ワークショップ。

・ ファシリテーション講座……グループ活動のファシリテートの手法を学ぶ。

・ 1on1傾聴講座……立場の異なる人と1対1で話をする際、話を引き出していく手法を学ぶ。

・ リーダー論講座……地球規模の課題や国際的な活動、地域活動の取組や課題について学ぶ。

◇ 『クリティカルシンキングA』（2年2単位）『クリティカルシンキングB』（3年2単位）

・ さまざまな文章を読み、それらをもとに、読解力や表現力、思考力等、自らの探究活動に必要な力となる力を養うことを目標とする。

◇ 『Creative Presentation』（2年2単位）

・ 多様な英文を読み、その中から自ら課題を見つけて調べたことに、意見を加えてプレゼンテーションをする。それぞれの役割に立ち、即興で英文を作り、反応することが必要となるスピーチセッションが行えることを目標に実施する。

(2) コンソーシアム等の関係機関等との連携・協力体制の構築の考え方・方法

本校の総合人文コースは、設置当初より高大連携講座や探究活動に取り組んできた。そうした中で、本校独自の「Win-Win」の連携関係を構築しているのが強みである。

〔双方にとってメリットのある Win-Win の連携〕

- 神戸大学文学部との連携（コース設置当初から 18 年間）
教員を希望する学生が本校の探究活動を支援（大学の教職講座にも位置づけ）
- 神戸市東灘区との連携協定（平成 31 年 3 月）
東灘区若手職員が本校生の地域探究活動を助言（区役所若手職員の研鑽の場）

総合人文コースを学際領域学科に改編するにあたり、学生が身近な環境から地球環境に至るまで文理融合型で学んでいる神戸大学国際人間科学部環境共生学科や、自然環境について学際的に学ぶことのできる県立人と自然の博物館（兵庫県立自然・環境科学研究所）等と、新たに Win-Win の関係での連携関係の構築を目指したい。

また、国際的な学びのために国際 NPO の Colorbath や（株）JTB と、地域課題の学びのために NPO コミュニティ・サポートセンター神戸や（株）ウエルアップと、コンソーシアム（「MIKAGE コンソーシアム」）を構築する。

コンソーシアム以外にも、リサーチフェアやリサーチフェスタを開催する関西学院大学や甲南大学、自然環境の研究機関としての神戸市立森林植物園等とも連携の輪を広げていく。さらに、生徒がよい意味で刺激を受けるため、県外の高校（岡山学芸館高校）との連携による合同研究発表会の開催等も実施する予定である。

（３）コンソーシアムの構成員

所属	氏名	主な実績
神戸大学文学部	学部長 長坂 一郎	18 年間本校と高大連携講座を実施
神戸大学国際人間科学部環境共生学科	教授 伊藤 真之	本校との学際領域における高大連携講座を実施予定（令和 4 年度～）
県立人と自然の博物館（兵庫県立大学 自然・環境科学研究所）	次長 石田 弘明	本校の環境科学部と連携して六甲山のキノコ展を開催
神戸市東灘区役所	区長 中田 裕子	本校の地域探究活動を助言
国際 NPO Colorbath	代表 吉川 雄介	本校と海外との Web 交流を実施
株式会社 JTB 神戸支店 教育旅行センター	センター長 上野 雄一郎	修学旅行・校外学習の企画・運営を担当 コンソーシアム講座等も実施予定
NPO コミュニティ・サポートセンター神戸	代表 中村 順子	本校で地域交流講座を実施
株式会社ウエルアップ	社長 尾花 弘教	住環境の提案をしている企業。SDGs に向けた地域貢献の取組について本校で特別講義を実施
兵庫県教育委員会高校教育課	課長 新谷 浩一	

（４）配置するコーディネーターの属性や役割

所属	氏名
兵庫県立人と自然の博物館 特任研究員	竹中 敏浩
合同会社ユブネ共同代表	東 善仁
立命館大学大学院 経営学研究科 博士課程後期課程	林 留里

当該者の主な実績

竹中氏：専門：地学。県立高校教頭、校長を歴任。SSH校での管理職経験も有す。定年退職後、県立人と自然の博物館にて勤務へ。現在は生涯学習講座等実施に向けたコーディネーター業務に従事。関西学院大学・武庫川女子大薬学部非常勤講師等も兼任。

東氏：神戸・奈良・島根を拠点とし、地域プロジェクトの企画運営を担う。最近の実績としては、兵庫県立大学通信の編集や奈良県宇陀市の地域プロジェクト「NCL 奥大和」のコーディネート、神戸市西区のイベントの企画運営を担当。

林氏：専門：経営デザイン、学校経営学。他府県の高등학교の探究活動に継続的に協力。

コーディネーターが取り組む内容（勤務形態を含む）

新たな学際領域学科の設置に向けては、これまでの総合人文コースにおける地域の課題について探究活動を行う取組を充実させつつ、それに加えて、学際的な学びを充実させるための新たな連携機関を開拓してコンソーシアムを構築するとともに、校内のカリキュラム開発や体制整備、学科内容の周知・広報の検討等も行っていく必要がある。

そこで、上記3人にコーディネーターを依頼し、それぞれの強みを活かしてコーディネーターの業務を分担して頂く予定である。

竹中氏：理系及び学際的な学びを新たに行うための高等教育機関や研究機関等との連携依頼や連絡調整、校内の組織体制整備

東氏：地域課題についての探究活動充実のための行政機関や企業等との連絡調整、学科内容の周知・広報の検討

林氏：学際的な探究活動に関わる授業の充実のための調整や、各種会議に関わる運営や連絡調整、カリキュラム開発に向けた各種事業の調整

上記3人は、校務分掌上で「特色教育推進部」に所属してもらう。また、令和5年度の勤務形態は、それぞれ1日7時間で年間48日程度の勤務を予定。令和7年度以降からは、常勤として雇用することも検討する。

なお、カリキュラム開発並びに生徒の変容をみる評価方法については、コーディネーターとは別に、専門性を有する以下の方にカリキュラム開発に係る助言をお願いし、年間数回のカリキュラム開発会議を開催して助言を受ける。

若松大輔氏 弘前大学 教育学研究科 助教

鎌田祥輝氏 摂南大学 全学教育機構 教職支援センター 助教

（５）学際領域学科又は地域社会学科の設置及び設置に向けた検討に関する生徒、保護者、地域等への説明の実施

令和６年度に学際領域学科の設置されることに合わせて、令和５年度より積極的な広報活動を実施している。令和６年度は、以下のような周知広報活動を計画している。

○ 学科の教育内容をまとめた広報用リーフレットの作成

新たに設置する学科の教育課程や特色ある行事等をまとめた広報用リーフレットを作成し、学区内の中学校(中学生)に配布する。

○ 中学３年生及び保護者、中学教員対象のオープンハイスクールの開催（年間８回）

第１回 ５月 学校全体の説明会。学校生活の様子については在校生が説明

第２回 ６月 学校全体の説明会。学区内の遠方に住む中学生や保護者、中学教員に向け、実施。

第３回 ７月 学科のみの説明会。教育課程等の説明だけでなく本校生がファシリテーターとなって参加者のワークショップを実施

第４回 ８月 学校全体の説明会。体験授業を実施。

第５回 ９月 授業公開日に合わせて説明会を実施。

第６回 １０月 学科のみの説明会。学科の特色を生徒から発信。

第７回 １１月 学校全体の説明会。

第８回 ３月 課題研究発表会の様子の見学（中学１・２年生対象）

○ 本校ホームページや県教育委員会ホームページでの広報活動

本校のホームページには、広報用リーフレットや学校紹介動画を常時アップする。また、ホームページの中にある学校ブログでは、日々の学校行事の様子（写真とコメント）等をアップしている。県教育委員会のホームページでも、各県立高校の特色がアップされている。

○ 学区内の中学校を訪問し、中学３年生担当教員に学科の学びについて説明する

○ 本校の学校行事での広報活動

文化祭(６月)の見学（中学生や保護者）

○ 中学校や学習塾等が主催する説明会への参加

中学校や学習塾等が中学生や保護者対象の説明会を開催する際に、出席して学校の特色を説明してほしいとの依頼がある場合は、説明会に参加して学科の内容等を説明する。

5 実施計画

〔令和4年度〕 新学科設置準備

○ 新学科のカリキュラム開発

- ・ カリキュラム開発会議を開催し、以下の内容について検討を行う。

〈検討内容〉

- ① 探究科目及び新たに設置する学校設定科目の具体的教育内容、教材開発、年間指導計画、校内指導体制、評価方法
- ② 学際的なテーマについての既存の教科の教科横断型の学びの手法

○ コンソーシアムおよび関係機関との連携体制の構築

- ・ 新たな機関への連携の依頼と連携内容の協議
- ・ MIKAGE コンソーシアム会議の開催

○ 関係機関の連携協力による学科設置に向けての特色ある学びの先行実施

- ・ 長期休業中を利用して、先行実施可能な取組を関係機関の連携協力により先行実施○ 入学者選抜（入試科目等）の検討
- ・ 県教育委員会と協議しながら入試科目等を検討する。

○ 県外の高校と合同での課題研究発表会の開催

- ・ 岡山学芸館高校と合同での課題研究発表会を開催し、生徒同士の議論の場を作る。

〔令和5年度〕 新学科設置準備（前年度）

○ 定期的なカリキュラム開発会議の開催

- ・ 探究科目や学校設定科目、新学科の取組等、特色ある学びの先行実施
- ・ 特色ある学びの先行実施の方法や内容の検証、検討

○ MIKAGEコンソーシアム会議の定例化

- ・ 新学科設置年度に向け、コンソーシアムによる連携体制の確認、強化を図る。
- ・ 関係機関の連携協力による授業を先行実施

○ 新たなカリキュラム実施（初年度：1年生）に向けての校内体制の整備

- ・ コーディネーターも含めた新学科開設準備委員会を中心に校内体制を強化する。

○ 中学校等への新学科の内容の広報活動の実施

○ 新たな学校設定科目の県教育委員会への届出

○ 入学者選抜（入試科目等）の検討、実施

- ・ 県教育委員会と協議しながら入学者選抜方法を検討し、実施する。

○ 県外の高校と合同での課題研究発表会の開催

〔令和6年度〕 新学科設置初年度

○ 各実施事業等の成果検証と改善の検討

○ 関係機関の連携協力による新たなカリキュラム（初年度：1年生）の実施

○ 新たなカリキュラム実施（2年生・3年生）に向けての校内体制の準備

(2) 令和6年度の計画の内容

月	事業の内容	
	カリキュラムや教育方法等の開発	関係機関等との連携・協力体制の構築
通 年	『Cross I』『Creation I』の実践と検証 『Cross II』『Cross III』『Creation II』『クリティカルシンキング A』『クリティカルシンキング B』『Creative Presentation』の先行実施	関係機関等との連携・協力体制の構築
4 月	☆地域探究プロジェクト（学際探究）神戸大学生 とのタイアップ開始（～7月） ☆TRY プロジェクト	コーディネーターによる関係機関等との連絡調整
5 月	☆リーダー論講座 地域・世界で活躍するとは	関係機関の協力による授業実施 神戸大学 関係機関の協力による先行実施事業 Colorbath コーディネーターと校内部署の打合せ 新たな関係機関への連携協力依頼
6 月	☆神戸大学主催 地域探究プロジェクト発表会 ☆探究コアトレーニング I 身近な地域に関するプレゼンテーション発表会 ■第1回カリキュラム開発会議 地域探究プロジェクト（学際探究）の成果検証	関係機関の協力による授業実施 Colorbath ▲第1回コンソーシアム会議 顔合わせ・事業展開の確認、12月行事の依頼
7 月	☆1 on 1 傾聴講座、ファシリテーション講座 ☆ことばのカシンポジウム ☆岡山学芸館高校 交流発表会① ☆御影探究サークル（学年を越えた交流発表会） ☆STEAM 講座 [6 講座程度開講] テーマ：兵庫・神戸・御影	関係機関の協力による先行実施事業 関係機関の協力による授業実施 東灘区役所 ●第1回運営指導委員会 顔合わせ・事業展開の確認、助言
8 月	☆STEAM 講座 [6 講座程度開講] テーマ：兵庫・神戸・御影 1 学期の学びの成果に関する校内検討 （校内組織：特色づくり委員会、教育課程委員会） ■第2回カリキュラム開発会議 1 学期実施事業報告、討議、助言、2 学期実施事業の予定報告、助言 ☆デザイン思考講座	関係機関の協力による先行実施事業 ライフデザイン研究所 FLAP 他 関係機関の協力による授業実施 ウエルアップ、神戸大学、甲南大学 他
9 月	☆アカデミックリサーチ開始（～3月） ☆探究に関する授業の外部公開 ☆フィールドワークに向けた検討開始 ☆探究プロセスの実際に関する講義	関係機関の協力による先行実施事業 関係機関の協力による先行実施事業 JTB

1 0 月	☆探究成果の校内発表 ☆社会における学際的な諸課題の実際 ■第3回カリキュラム開発会議 本格・先行実施事業の成果検証と令和6年度のカリキュラム・教育方法の具体に関する協議	●第2回運営指導委員会 1 学期実施事業報告、助言 2 学期以降の事業予定報告、助言
1 1 月	☆探究コアトレーニングⅢ ◀..... 国際的視野に立ったプチ探究 カリキュラム・教育方法に関する校内検討 (校内組織：特色づくり委員会、教育課程委員会) ☆探究成果の外部発表(～2月)	関係機関の協力による先行実施事業 Colorbath ▲第2回コンソーシアム会議 グローカルコンシャスデイの方針の確認、先行実施事業の報告
1 2 月	☆グローバルコンシャスデイ(コンソーシアム講座)◀..... コンソーシアム団体を中心に15講座程度実施 ☆データリテラシー講座 ☆探究成果の外部発表	関係機関の協力による先行実施事業 ▲第3回コンソーシアム会議 グローカルコンシャスデイの検証 次年度への展望
1 月	☆カリキュラム開発委員による地域探究プロジェクト入門に関わる助言	来年度の授業についてコーディネーターとの調整・依頼開始
2 月	■第4回カリキュラム開発会議 先行実施事業を含めた今年度の総括、成果検証	今年度のコンソーシアムの取組の総括
3 月	☆課題研究発表会(外部公開) ☆岡山学芸館高校 交流発表会②(フィールドワーク) ☆東灘区役所 意見交換会◀..... ☆御影セッション(学年を越えた探究発表会)	●第3回運営指導委員会 今年度の総括、次年度の課題討議 関係機関の協力による事業実施 東灘区役所

（３）事業の進捗状況の定期的な確認や改善の仕組み（事業のアウトプットやアウトカムの考え方、目標指標の設定は別添２「目標設定シート」に記載。）

○ 本事業での目標指標の設定の考え方【具体の指標は別添２】

別添２は、様式が生徒の変容に関する評価となっているため、下記の①（生徒の変容の視点）に関する成果目標を設定した。２（１）で記述した「高校魅力化評価システム」のアンケートの中で、評価が低く、本校の課題であると認識できる３項目を評価指標と設定し、本校の新学科への改編年度が令和６年度を予定していることを鑑み、特色ある学びの先行実施を通じて、３年間の事業の実施によっていかに成果を上げることができるかを検証する。

残りの②～⑤の視点については、学校評価アンケートや志願者数のデータ、連携のあり方（Win-Win の関係が構築されているか）、外部の発表会への参加状況、進路実現状況等、本校独自で評価項目や評価方法を設定し、検証を行うべく、運営指導委員会や MIKAGE コンソーシアム会議に加え、カリキュラム開発会議でも報告し、それぞれの場で助言・指導いただいた内容を、職員会議や授業担当者間の打合せ等で報告・共有することで、生徒の学びにフィードバックしたい。

○ 事業の成果をどう評価するかの視点

事業の成果をどう評価するかということについて、次の５つの視点から評価する。

① 生徒の変容の視点

２（２）で記述した５つの力、特に、５つめの力と関連して、生徒の視野の広がりや認識の深まりが進んだかを評価する必要がある。

② 教員の変容（資質向上）の視点

４（１）で記述した学際的で先進的なカリキュラムを展開するためには、教員の変容（資質向上）が不可欠であり、それがどう進んだかを評価する必要がある。

③ 中学生からの視点

新たな学際領域学科が設置者及び本校の自己満足にならず、中学生にとって魅力ある学びを展開する学科と認識されているかどうかを評価する必要がある。

④ 外部の機関との連携関係構築の視点

大学や研究機関、NPO や企業などの様々な外部機関との連携（MIKAGE コンソーシアム）がうまく構築され、生徒に学際的学びを提供できているかを評価する必要がある。

⑤ 新学科の生徒の学びのアウトプットや出口（卒業時）の視点

探究を中心に学際的な学びの成果を積極的に外部の発表会等でアウトプットしているかや、卒業時に学際的学びを生かした進路実現ができているかを評価する必要がある。

○ 事業の進捗状況の定期的な確認と改善に向けての助言の仕組み

年間３回の開催を予定している運営指導委員会や MIKAGE コンソーシアム会議で事業の進捗状況を報告し、委員からの助言・指導をもとに、随時改善策を検討する。設置者の県教育委員会は、上述の会議はもちろんのこと、課題研究発表会等の場で生徒の学びの様子や教員の指導の現状を確認し、学校訪問指導等の場でより具体的で的確な助言を行う。

6 成果の普及のための仕組み

本校の取組は、大学進学を目指す都市部の普通科高校に文理融合の学際領域系学科を設置するモデルになると考える。そこで、以下のような様々な場面で、その実践や成果を広く公表していきたい。

○ 課題研究発表会の合同実施および公開

令和3年度から岡山学芸館高校と課題研究発表会を合同で実施し、生徒同士の議論もさせる取り組みを始める。この取組を引き続き継続・拡大していくとともに、学際領域のテーマについての課題研究発表会について、県内外の高校の教員に広く公開する。

○ 学際的な探究活動を支える科目「Creation」や学際的な探究活動に関わる授業公開

「CreationⅠ」「CreationⅡ」で実施するSTEAM教育講座や、国際貢献活動にかかわるプロジェクト挑戦（TRY プロジェクト）の様子、教科横断型のオムニバス授業等、先進的な授業に加え、学際的な探究活動を実践している授業等を研究授業として公開する。

○ 連携機関等と連携した探究活動の取組を積極的にホームページで公開

県内外からの視察依頼に対応したり、コンソーシアムを構成している機関等との探究活動の取組の様子を、積極的に学校のホームページで公表したりする。加えて、県教育委員会と連携して県教育委員会のホームページでも、他校のモデルとなる取組を紹介する。

7 国の指定終了後の取組継続のための仕組み

○ MIKAGE コンソーシアムの継続的な連携が続く仕組みづくり

学際領域学科の特色ある学びを支えるのは、コンソーシアムを構築する機関等との継続的な連携が続く仕組みづくりである。4（2）で記載したように、国の指定期間内で、それぞれの機関と双方にとってWin-Winの関係になる連携のスタイルを確立し、学校内の学びから学校外での学びへと発展できる「共創した学び」となるよう更なる仕組みを構築する。

○ コーディネーター機能の維持

指定期間後のコーディネーター機能の維持については、コンソーシアム内の大学または企業からの継続的な人員配置が行えるようWin-Winの関係の構築に取り組む。また、コンソーシアムからの人員配置が行えない場合に備え、予算の確保、教員のコーディネーター機能の移行についても検討し、コーディネーターの望ましいあり方について指定期間中に方向性を決定する。

②事業の実施日程

事業項目	実 施 日 程（令和6年4月1日～令和7年3月31日）											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
コーディネーターの活動												
コーディネート業務	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
カリキュラム開発												
校内でのカリキュラム検討	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
カリキュラム開発会議			●					●		●		●
教育実践（文理探究科1年生対象）												
Cross I・Creation I	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
ビルドアップレクチャー		●		●			●					
選択 STEAM 講座				●	●							
先行実施事業												
Try プロジェクト	●											
ビルドアップレクチャー				●								
シンポジウム				●								
Cross II・Cross III	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
クリティカルシンキング A・B	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Creative Presentation A	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
グローバルコンシャスデイ									●			
探究活動成果発表会												
校内発表会							●					●
校外での探究活動発表			●					●	●		●	●
他校との交流発表会				●								●
関係機関との連携協力体制の構築・維持												
運営指導委員会		●					●					●
コンソーシアム会議			●					●	●			
新学科設置に関する説明会の実施												
学校・学科説明会			●	●	●	●		●				●
成果の周知												
本研究開発のウェブ発信	随時											
視察対応			●	●	●		●	●			●	

③実施の概要

1 カリキュラムの検討内容

本校は、現在開設している総合人文コースを、令和6年度より普通科新学科・学際領域学科として改編することを見越して、カリキュラム等を検討してきた。令和6年度からは、先行実施を踏まえつつ計画してきた通り、1年生を対象に実践し、一方で、先行実施事業についても引き続き進めながら、随時検証しつつ展開している。

1-0 カリキュラム開発にかかわる会議の体制および取組

新学科のカリキュラムについては、校内組織である「特色づくり委員会」と、令和4年度に発足させた「カリキュラム開発会議」を中心に検討し、原案を作成した。

校内組織「特色づくり委員会」は、本校教頭2名、主幹教諭4名、特色教育推進部4名、教務情報システム部長、各学年担当者1名の計14名で構成される委員会とした。令和3年度には15回、令和4年度には22回、令和5年度も23回の会議を開催し、新学科に向けた検討や、新学習指導要領を則った探究のカリキュラムに関する協議を実施した。また、令和6年度も1月までに14回開催し、本事業に関する協議に加え、新学科における探究に関するカリキュラムの検証等を実施した。

また、上記「特色づくり委員会」のメンバーに、校長、および、校外専門家として、カリキュラム開発委員2名を招聘した会議が「カリキュラム開発会議」である。令和4年度に発足させたこの会議では、「学際的な取組とは何か」という点から議論し、「学際的な探究プロセスとは何か」を図示したもの〔図1・2〕を提案するに至った。また、今年度も、「特色づくり委員会」で議論した結果を再度協議し、共有しながら、新学科のカリキュラム、および、本校の探究的な学びについて議論を深めた。昨年度までに引き続き、充実した議論ができています。

図1：御影高生の学際探究モデル：個人探究の深まり

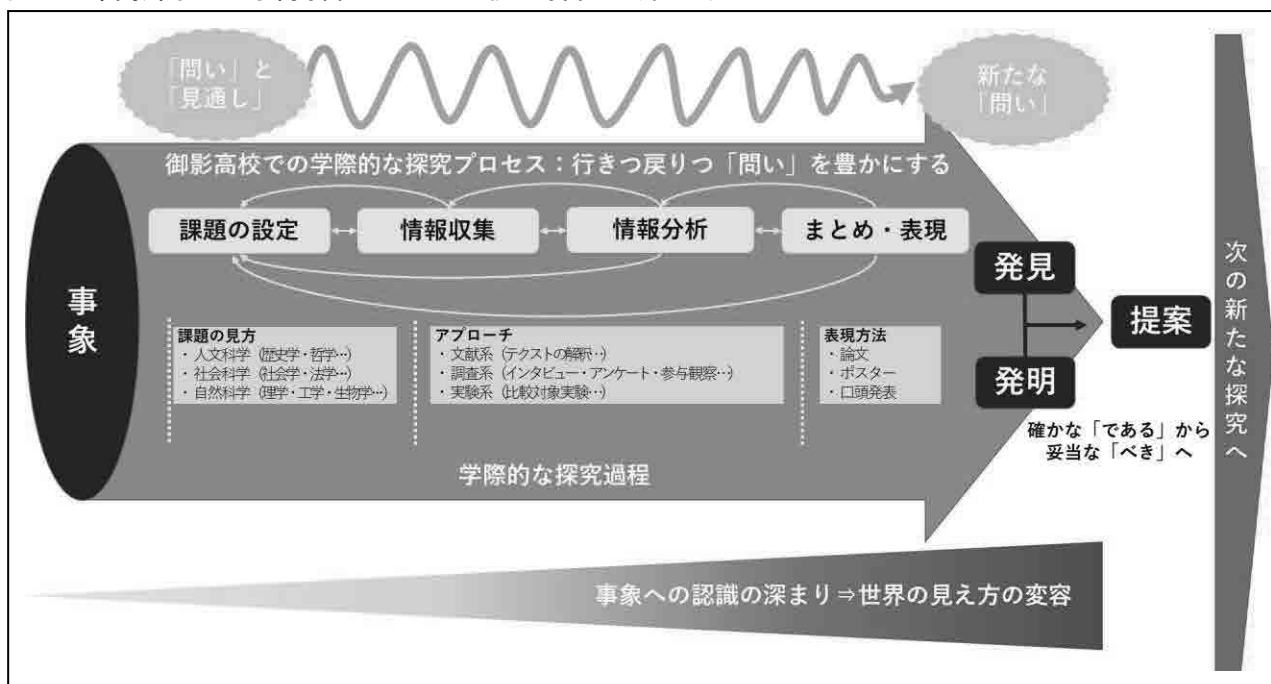
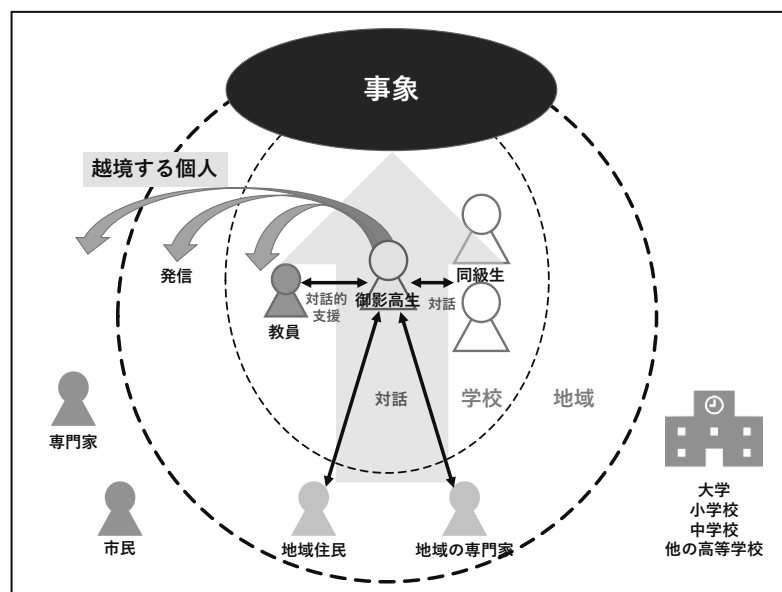


図 2：多層的な探究コミュニティのモデル



■カリキュラム開発委員

若松 大輔 氏	弘前大学 大学院 教育学研究科 助教
鎌田 祥輝 氏	摂南大学 全学教育機構 教職支援センター 助教

■カリキュラム開発会議の概要

	実施日	実施内容
第 1 回	6 月 13 日	・今年度の方針について (CrossⅢ・Creative Presentation について)
第 2 回	11 月 28 日	・今年度の取組の報告を受けての感想、助言 ・探究活動の評価の在り方について
第 3 回	1 月 16 日	・Cross I について (学際的な探究プロセスの図をもとに) ・探究活動の評価の在り方について
第 4 回	3 月 4 日	・御影セッションを踏まえて、次年度に向けた展望

1-1 新学科のキャッチコピー、理念

広がる学び、多彩な未来

予測不能な今後の社会において、多彩な力を発揮し、新たな価値を創造しながら活躍できる人を育成することを目標とする。その目標を実現させるため、校外機関とも連携をとりつつ、生徒の学びのフィールドを校外に広げ、多様な認識や高次の認識をもととし、学際的に取組む探究活動を展開することで、生徒の知的好奇心を高めるとともに、主体性や協働性、課題解決能力、言語表現スキルの伸長をはかる。

1-2 目指す生徒像、教育目標、グラデュエーションポリシー

- ① 地域や国際社会のありようをしっかり目を向け、社会に貢献しようという志をもち、さまざまな事象の解決や是正、および、原因の追究に粘り強く挑戦し続けることができる生徒を育成する。
- ② 人文・社会・自然科学の専門知識を深め、事象を多面的に認識ができるようになるとともに、自らの読解力や論理的思考力を磨き、新たな価値を見出だそうとする好奇心をもつ生徒を育成する。

- ③ 地域や国際社会に生きるさまざまな方と対話を重ねつつ、自ら学び、考えて行動できる主体性や、周囲の仲間と協働しながら物事に取り組む中で、リーダーシップが発揮できる生徒を育成する。

1-3 カリキュラムポリシー

- ① 探究のプロセスを体系的に学び、実践を行う授業を設定する。
- ② 自らの興味関心に応じた探究活動や地域に関する探究活動に学際的に取り組む授業、および、人文・社会・自然科学の専門知識を幅広く学ぶ教科・科目を受講できる教育課程を設定する。
- ③ 実社会で活かすことができる「読解力」や「論理的思考力」、「対話力」、「表現力」等を磨くために、学科独自の科目を設置する。
- ④ 学びのフィールドを校外にも広げ、社会の実状を知る機会を設け、新たな思考や新たな価値観、知的好奇心を育むために、大学や行政、研究機関、企業や社会貢献を行う団体等と連携した教育活動を実践する。
- ⑤ 生徒が主体的に進路選択できるよう、学びの振り返りを行う機会を設けたり、生徒の興味関心や、進路希望に応じた選択科目を設置したりし、きめ細やかな支援を行う。

1-4 求める生徒像、アドミッションポリシー

- ① 社会の諸事象に対して、興味関心を持っている生徒
- ② 仲間と協力し合い、答えのない課題に取り組むことに前向きな生徒
- ③ 「学際的な学び」に対し、好奇心をもって取り組もうとする生徒

1-5 実施教育課程

上記ポリシーの達成を実現させると同時に、探究的な学びを軸としながら、幅広い教科・科目を選択しながら受講することを可能とするため、このような教育課程で進めることとしている。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33
現代の国語	言語文化	歴史総合	公共	数学Ⅰ	数学Ⅱ	数学A	化学基礎	生物基礎	体育	保健	音楽Ⅰ 美術Ⅰ 書道Ⅰ	英語C.Ⅰ	Creative Presentation 基礎 (論理表現Ⅰ)	情報Ⅰ	CrossⅠ	クリエイションⅠ	H	R														
古典探究	文学国語 物理 生物	地理総合	日本史探究 世界史探究 化学	数学Ⅱ・数学C 数学Ⅱ・数学Ⅲ	数学B	物理基礎	体育	保健	英語C.Ⅱ	家庭基礎	クリティカルシンキングA	Creative Presentation A	CrossⅡ	クリエイションⅡ	H	R																
文学国語 数学C	古典探究	世界史探究 日本史探究 地理探究	歴史選択・公民選択・数学探究A 数学Ⅲ 数学Ⅲ・数学探究A	数学探究B 化学	化学総合・物理総合 化学総合・生物総合 物理 生物	体育	英語C.Ⅲ	情報 錬成	クリティカルシンキングB	Creative Presentation B	CrossⅢ	H	R																			

*3年生の開講科目は、一部変更される可能性があります。

1-6 学科独自科目について

令和4年3月に県教委により策定された「県立高等学校教育改革第三次実施計画」第3章(4)において、

- ◇ 文理融合型の課題探究を軸とした教育課程または、地域の教育資源を活用して地域課題の解決に取り組む学びを軸とした教育課程を編成する。
- ◇ 課題探究に特化した科目を、「総合的な探究の時間」を含め7単位以上設定する。

と示されていることをもとに、令和4年度に幅広く議論したものをベースにしつつ、令和5年度はさらに議論を深めた。その結果、文理探究科における、総合的な探究の時間での取組や、学科独自の教科・科目について、カリキュラム開発会議の議論を踏まえ、以下のように決定した。令和6年度はそれぞれの科目について実践を開始している。(2年生以上を対象とした科目については、内容を先取りしながら実施している。)

■Cross I ～Ⅲ

先に示した「学際的な探究プロセス」〔図1・2〕をもとに探究活動を進める科目である。1年生から3年生まで全学年で開講し、体系的に探究に取り組みつつ、その手法を学ぶ科目とする。また、主だった探究課題は以下の通りとする。

1年生の課題 (1) 自らの住むまちの活性化に向けた特色ある取組を考える。 (2) 2つのテーマ探究を通じて、探究の基礎を固める。	2年生の課題 (1) 地域探究プロジェクトに取り組む。 (2) 各セミナーにおいて設定された課題に取り組む。	3年生の課題 (1) これまでの探究的な学びを論文化する。 (2) 2年生のメンターとして探究指導を実践する。
---	--	---

※実施した内容、および、先行的に取り組んでいる内容については、以下の先行実施事業の項で一部紹介する。

■Creation I ・ II

先に示した「学際的な探究プロセス」〔図1・2〕をもとに進められる探究活動を支える科目として開講する。Creation I は1年生時に、Creation II は2年生時に受講する。まとまった時間を要することや、講師の確保に努めることを鑑み、それぞれの科目は、一部、夏季休業中や春季休業中、週時程外で実施する。探究活動に関わる事項やそれ以外の事項も含めて、生徒が考える際のアイディアの「種」になるようなことがらを学んだり、考えを深めるための「枠組み」となるような学びを深めたりする授業となるよう、ほとんどの授業を外部と連携し、学びのフィールドを校外に広げる。また、校外での学びを通じ、生徒が実社会の現状を知る機会ともする。主たる課題は以下の通りとする。

1年生の課題 (1) 選択 STEAM 講座を通じて実社会の様相を知り、自分が社会にどのように貢献できるかを考える。 (2) データサイエンスに関わる講義を受け、探究の在り方について考える。	2年生の課題 (1) 国際的な視野に立った社会貢献実践プロジェクトに取り組む。 (2) グループディスカッションのファシリテーションや、傾聴研修を経て、コミュニケーションの在り方について考える。
---	---

※実施した内容、および、先行的に取り組んでいる内容については、以下の先行実施事業の項で一部紹介する。

■学校設定教科「Cross-Creation」

上記の総合的な探究の時間に加え、文理探究科独自の教科として、「Cross-Creation」という教科を学校設定教科として設置する。この「Cross-Creation」では、クリティカルシンキング A・クリティカルシンキング B、および、Creative PresentationA・Creative PresentationB の4つの科目を設定し、4つの科目に加え、他教科の学びを相互に関連させながら展開する。より広い価値を創造し、多様な認識や高次の認識ができる力を持って、学際的課題の解決に向け、将来社会で活躍できるリーダーシップをもったクリエイティブな人材を育成するために、自らの知見をより深めるワークショップ、他科目等で得られた知識を活かす活動や、多様な文章の読み取りの実践、また、発表やディスカッションの機会等を通じて、自らの探究活動や、ひいては、実社会での活躍につながる読解力や論理的思考力、対話力、表現力等を磨くとともに、主体的・協働的に、粘り強く課題に取り組む力を養う。

（１）クリティカルシンキング A・クリティカルシンキング B

クリティカルシンキング A は、2 年生を対象に、探究に特化した科目として開講する。自らの探究活動に必要となる「自らの知識や経験をもとに、事実等を読解・解釈し、分析する力」や、「原因・結果、意見・根拠等の関係を明らかにし、事実等を他者に分かりやすく伝える力」、「自らの置かれた状況等を客観的に捉える力」を養うことを目標としている。文理探究科に改編される総合人文コースの 2 年生を対象に、今年度より先行実施した。県教委より、探究に特化した科目として実施するため、外部人材を活用した授業を 10 時間以上実施するよう指示があった。そのため、今年度より、外部人材を活用した授業も先行的に実施している。

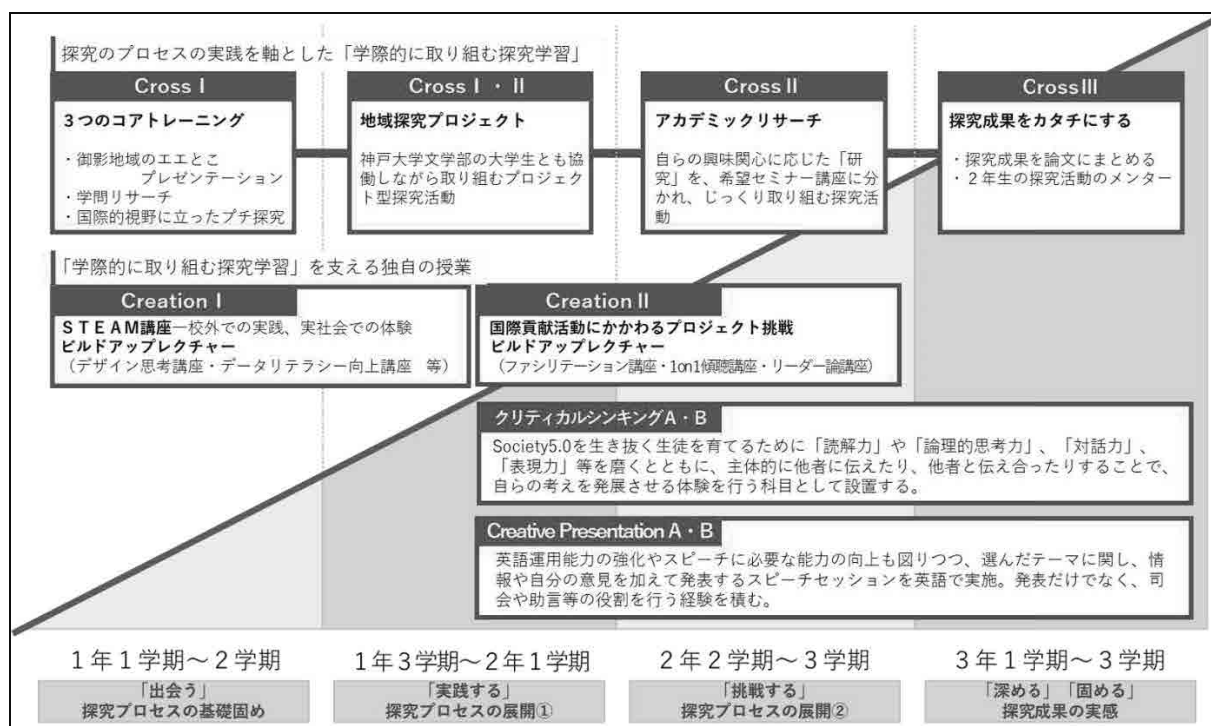
一方、クリティカルシンキング B は、3 年生を対象に開講する。この科目は、成立した時代やジャンルを問わず、様々な文章を読むこと等を通じて、現代社会の諸問題に関する多様な知識を深めながら、予測不能な今後の社会で活かせる実践的な読解力を育むとともに、数値やグラフ、論理の妥当性を検討する等の実践を踏まえ、「論文の著者等の主張を的確に捉え、その論理や妥当性を検討する力」や、「複数の視点で論じられている文章や多様な立場で発せられた意見等を、多面的・総合的に考える力」、「受け取り手の立場を鑑みながら、自らの考えを分かりやすく表現する力」を深化させることを目標としている。

（２）Creative PresentationA・Creative PresentationB

Creative PresentationA は、2 年生を対象に、探究に特化した科目として開講する。従来「探究英語」という科目名を仮称として用いていたが、検討を進める過程で Creative PresentationA と名称変更することとなった。多様な英文を読み、その中から自ら課題を見つけて調べたことに、意見を加えてプレゼンテーションをする。それぞれの役割に立ち、即興で英文を作り、反応することが必要となるスピーチセッションが行えることを目標に実施する。本科目については、総合人文コースの 2 年生を対象に、令和 6 年度より先行実施した。

また、学際的に探究を深めてきた内容を英語で発表することを目指すことで、論理的に話を進めるために必要となる表現方法を学ぶ科目として、3 年生を対象に Creative PresentationB を開講する予定である。本科目では、スピーチセッションでの発表を目指すことで、場面に応じた的確な表現で、学術的な内容について豊かにやり取りができることを期待する。令和 7 年度より先行実施する予定である。

図3：文理探究科の独自科目



1-7 教育実践

1-7-1 文理探究科1年生を対象とした実践内容

■Cross I・Creation I

文理探究科の軸となる学際的に取り組む探究活動を実践する科目として開講する「Cross I」、その探究を支える科目として開講する「Creation I」を以下の通り実施した。

	Cross I	Creation I
1学期	御影地域のエエとこプレゼンテーション	ビルドアップレクチャー
夏季休業	学問リサーチ課題	選択 STEAM 講座
2学期	プチ探究	ビルドアップレクチャー
3学期	地域探究プロジェクト	校外探究活動交流会

以下で、「Cross I」の学びについて、実践内容の一部を紹介する。

「御影地域のエエとこプレゼンテーション」は、入学したての1年生が班別に取り組む課題で、班で発表するモノや場所を決め、取材対象や発表方法についても考えさせるものである。この学びは、探究活動の基礎を築くことを意図しており、各自のタブレット端末を使いながら、使用法を覚えたり、校外調査にかかる手続きや、その手法、そして、実際に校外に出てフィールドワークを行う手法を知ったりする等、さまざまな事柄を活動に組みながら体得するプログラムとなっている。あわせて、校外より、ミニコミ誌を実際に作成されているイラストレーターの方を招聘し、講義をしていただく等、取材や制作方法にまつわる指導についても丁寧に実施した。クラス内では全班的発表を求めたが、代表班については、シンポジウムの中で、全学年の総合人文コース生の前で発表する等、1年生から口頭発表する機会を設けることにもつながった。

また、「プチ探究」については、こちらからテーマを用意し、探究活動のプロセスを体感するプログラムとしている。テーマについては、2学期の前半期と後半期にそれぞれ取組めるよう2つ用

意し、実践した。第1は、神戸市市長室広報戦略部とタイアップし、「神戸市北区の放置竹林の竹を活用するプロジェクトを考える」をテーマとした実践である。基礎講義として、京都芸術大学の吉田大作准教授をお招きし、探究活動の進め方についてレクチャーを受けた後、実際の竹林の様子を見学したり、竹を活用するプロジェクトに従事されている方からの講話を受けたりしつつ、班別で竹の利活用方法についてさまざまな可能性を模索する活動を行った。最終的には、神戸市役所にて、黒田慶子副市長の前で発表するイベントも用意し、自分たちの力が社会に貢献できるということが実感できる機会ともなった。その後、第2テーマとして、NPO 法人 Colorbath とのタイアップ授業、「Colorbath のブランド『The AU』の高校生を対象とした新たな商品とは？」というテーマでの探究活動を展開した。この探究活動については、価格設定やパッケージ、宣伝のことばの検討を必須とするという条件をつけ、必要な情報を検索するだけでなく、アイデアをまとめて班員と共有したり、発表資料につなげるための記録を残したりする等、これまで以上に自分のタブレット端末を活用する姿が見られるようになった。また、多くの生徒が、自宅や学校で試作したり、実験をしたいと申し出たりする等、昨年度の生徒よりも前向きに取組み、これまでの本校生の様子と比較しても、明らかに探究活動への取組状況が変わっていた。生徒が主体的に取組んだ活動の成果から想像される通り、発表成果についても大変よく、NPO 法人 Colorbath の担当者からは、今後実際の販売や活動につなげていきたいとの話を得られている。生徒のレポートや感想からも、満足度の大変高い活動が展開できたと考えている。加えて、上記2つのテーマでの探究活動においては、ある班は実験や試作から提言を行い、ある班は社会的な事実を収集し発表する等、課題の解決・是正に向け、生徒がさまざまな手法でのアプローチを試みたことから、学際的に取り組む活動の先行実施としても良好な成果が得られたとも考えている。

一方、外部機関と調整しながら、引き続き今年度のような良質の課題が得られるかということや、生徒の学びの段階とタイアップ先の求める内容との調整という点は、次年度以降の課題として挙げられる。

■ビルドアップレクチャー

STEAM 教育講座以外のレクチャーについて、以下のような講座を実施した。

	講座名	実施日	講師
1	人生における夢・目標とはなにか？ グローバルリーダーって？	5月23日	椎木睦美氏 NPO 法人 Colorbath
2	世界の現状と今後の生き方～エチオピアをもとに～	7月11日	齊藤弘紀氏 GLCA 代表
3	生成 AI をテーマとしたワークショップ	10月18日	本校教員 橋本淳史、大西伸弥 山口憲生

■選択 STEAM 教育講座

・実施に当たって

学際的な探究活動を支える科目として開講する Creation I において「選択 STEAM 講座」を実施した。これについては、プレ講座（クリエイション講座）を令和4年度から先行実施してきた。各講座は、神戸市内の企業、専門家、および本校教諭・コーディネーターと協働して設計し、地域連携の中での学びを実践する。また、科学・技術・工学・芸術・数学の5つの英単語の頭文字を組み合

わせた造語「STEAM教育」を軸として展開する。しかも、科学（Science）、技術（Technology）、工学（Engineering）、芸術・リベラルアーツ（Arts）、数学（Mathematics）の複数分野を意識した講座とすることで、知る（探究）とつくる（創造）のサイクルを生み出す、分野横断的な学びを目指すものである。

今年度は、本格実施となることを踏まえ、7月に事前指導を行うとともに、7月・8月の夏季休業中に各講座2日間・14時間程度の確保を鑑み、周囲の人たちと協働的に解決することのできる、これからの社会のリーダーとして活躍できるような生徒を育てることに注力する講座を展開した。講座では、STEAMにそったテーマを6コース設け、文理融合の学習内容を地域事業者と協働設計し、視察、体験、ワークショップを軸に据え踏み込んだ地域探究学習の機会を設けた。また、講師ごとの多様なキャリア形成プロセスを紹介することで、生徒の進路選択、キャリア観が広がる機会としても実施した。

・講座の実施プロセス

1 連携先候補の選定

昨年度までの先行実施における講座内容を参考にしつつ、文理探究科1年生の興味関心領域をリサーチし、実施コースのカテゴリーを決定した。その後、担当教員と協議の上、コーディネーターが神戸市内の企業を選定し、一覧表を作成した。一覧表をもとに、担当教員とコーディネーター間で、交渉の優先順位を決定した。選定におけるカテゴリーを「建築」「AI」「都市計画」「経営」「地震と防災」「生物多様性」の6つとした。

※選定にあたっては、STEAMの各カテゴリーのバランスに加え、ナショナルブランドからベンチャー、個人事業主、老舗企業のバランスも考慮し、講師陣の多様性やキャリアモデルも提示できるよう選定した。

※令和4年度、5年度に先行実施の講師依頼をした方の中で継続依頼する方を選定し、積み重ねによるカリキュラムの質の向上をめざしつつ、新規協働先を開拓し交渉した。

※同一講師で2日間の講座と、2日間とも異なる講師での講座を設け、前者では「連続した学びの深まり」を意識。後者では「各講師の視点やアプローチの違い」に着目して比較学習できる相乗効果を意識した。

2 コーディネーターによる連携交渉

適宜、担当教員と一緒に連携先に訪問したり、コーディネーター単独で交渉したりした。講座によっては、複数人在籍するコーディネーターそれぞれの人脈を活かして交渉を分担した。

3 連携先との講座プランシートの共有

実施日等を含め、連携先の承諾が得られたら、依頼書を作成し、連絡した。その際、全体の事業設計における本講座の位置づけを説明するとともに、プランシートを講師に渡し、大まかな基本設計を依頼した。その後は、講座プランシートをもとに、内容の目的を共有し、タイムスケジュールや準備物等実施に際する注意点等を把握し、担当教員と共有した。

4 講座プランについて、連携先と担当教員との調整

オンラインで時間が調整できる範囲で教員、講師、コーディネーターの三者で事前打ち合わせを実施した。内容の微調整や、教員からのリクエストの反映、講座の目的について三者の共通認識の

醸成を図った。

5 受講生徒の募集

講座内容が決定次第、コーディネーターが作成した告知チラシを約1ヶ月前に配付した。なお、参加希望者を文理探究科クラスから募集し、空席のある講座については1～3年生全クラスから受講生徒を募ることとした。

6 講座の実施・引率

7月23日から8月10日にかけて実施した。特色教育推進部の教員を中心に1名以上が引率した。加えて、東・竹中・林のコーディネーターのうちいずれか1名以上が引率した。

7 受講生徒へのアンケート・検証

アンケートについては、担当教員が実施した。また、各講師との個別の振り返りミーティングを教員、講師、コーディネーターの三者で行い、来年度実施への参考意見やカリキュラムデザインの見直しのアドバイスを頂いた。実施は主にオンラインミーティングを活用した。

A	建築	受講生徒5名
●学びのポイント ①ランドマーク施設における設計のプロセスやアイデアを学ぶ。 ②住宅の設計コンセプトや拡張性を学ぶ。多角的な視点で建築に触れ、また体感的に経験することで「ものづくり」の面白さや、社会課題に向き合いクリエイティブな視点で創造することに関心を持つ。建築というカテゴリーにおいても様々なキャリア軸を持った建築関係者がいることを知る機会をつくる。 DAY1（7月23日）：（講師：建築家） 神戸ポートタワーのリニューアル設計や株式会社フェリシモの新社屋の監修、同社によるチョコレートミュージアムの設計等を手掛ける高橋氏の解説で各所を訪問し、設計意図やプロセスを学んだ後、フェリシモ本社にて、ポートタワー外周の活用にまつわるアイデアワークショップを実施。生徒が企画した案をフェリシモへ提案し講評を頂いた。 DAY2（7月30日）：（講師：建築家） 東灘区にある神戸新生パブテスト教会（鉄の教会）を見学し、設計者の木村氏より存続の危機になった教会がどのような過程と工夫により建築されたかを軸にして起案から竣工までの一連の工程や考え方を学んだ。続いて、灘区の建築家阿曾氏の自邸に移動し、事務所と自宅が同居しつつ、「内と外」というコンセプトで建てられた自邸を内覧。ワークショップとして生徒が外観からイメージする間取りの仮説を立て実際の設計図と比較検証。複雑な建築のアイデアを体感的に学んだ。 ●生徒の感想（抜粋） ・どの建物にもしっかりと意味がある上で設計、デザインされておりとても興味深かったです。 ・設計事務所では実際に間取り図を書いてみたのですが、思っていたよりも難しく大変でした。この建物もただデザインした訳ではなくしっかりと意味をもっており驚きました。建築家の仕事についても教えて頂きただ設計するだけではないということを知りました。		

B	AI	受講生徒 6 名
●学びのポイント ①神戸に誕生した世界で 6 拠点目の AI-lab の活動見学。生成 AI を活用した探究学習のリテラシーを学ぶ。民間企業のイノベーション支援機関であるマイクロソフトのラボのビジョンとコラボの実績を学ぶ。 ②AI 技術の最前線に触れたあと、生成 AI を活用した探究学習の実習をワークショップ形式で実施。今後の探究学習に役立つリテラシーの向上を図る。 DAY 1（7 月 24 日）：（講師：Microsoft AI Co-innovation-lab、神戸市イノベーション専門官、産総研人工知能技術コンソーシアム講師他） マイクロソフトの見学では施設責任者から施設のビジョンとこれまでの企業支援の成果について座学を受け、地元企業とコラボした技術の展示の見学を行った。その後学校に戻り、生成 AI を活用した学び方の実演や事例紹介とリテラシーについて学んだ。 DAY 2（7 月 25 日）：（講師：産総研人工知能技術コンソーシアム講師他） 御影高校のリサーチルームにて、講師の方をお招きして生成系 AI を利用して課題解決をするワークショップに参加。Microsoft AI Co-Innovation Lab から御影高校までの道中で発見できた社会課題を題材にして、どのように解決するのかを自分たちで考え、さらには生成系 AI の意見も参考にしながら、レポートにまとめて、それを発表するという活動を実施。 ●生徒の感想（抜粋） ・以前までは存在を知っているけれど使う機会がないものだ、と考えていましたが実際に使ってみると自分のアイデアを膨らましてくれる存在であり、気軽に活用していきたいと思うようになりました。 ・AI を使っていく過程で AI の意見が間違っていることがあって AI を鵜呑みにせずまずは疑うといった AI の正しい使い方を学びました。		
C	都市計画	受講生徒 15 名
●学びのポイント ①産業誘致視点での都市計画を学ぶ。 ②観光活性視点での都市計画を学ぶ。近年新しい施設が次々と建設され、再開発が進む神戸市が持つまちづくりのビジョンと施策を学ぶ。 山と海、そして産業、医療、商業、エンターテインメントが凝縮された国際都市としてさらに発展するための視点を養い、生徒自身が神戸市民としての誇りを持つ機会とする。 DAY 1（7 月 31 日）：（講師：神戸市、（公財）神戸医療産業都市推進機構、エアウォーター株式会社） キメックセンタービルを訪問し、震災後の復興プランの一環として始まった構想が現在に至ってどのように発展してきたかを学んだ。参画企業のひとつであるエアウォーター株式会社の国際くらしの医療館を見学し、滅菌ルームや手術室開発の技術を見学ツアーとモデルルームを使って学習。また、クリエイティブラボにて、どのような産業コンセプトの都市を計画できるかについてワークショップを行った。		

DAY 2（8月6日）：（講師：神戸市観光局、株式会社神戸ウォーターフロント開発機構） 再開発が進む神戸市の港湾エリアを見学。神戸市がどのような観光課題を抱え、その解決策のひとつとしてどのような都市計画と観光ビジョンをもって開発しているのかを学んだ。実際に港湾エリアの施設であるアート水族館「atoa」やアリーナ、遊休地活用を見学した後、大型倉庫が取り壊されてリニューアルするベイエリアに、賑わいをつくるためのアイデアをワークショップで企画し発表した。 ●生徒の感想（抜粋） ・今まで知らなかった「都市計画」という仕事を知ることが出来ました。私は都市計画に関する職業にもともと興味を持っており、この講座までずっと楽しみにしていました。 ・都市計画について、その歴史や文化、今後の開発計画などを学んだ上で、民間企業や行政はどのような制約の中で行っているかを知ることができて良い経験になったと思います。		
D	経営	受講生徒 10 名
●学びのポイント ①スタートアップ企業のインテリジェンス経営を学ぶ。 ②地元地域に根ざした企業・個人事業主の事業観を学ぶ。経営スタイルを企業訪問とワークショップを通じて学ぶ。「経営」と言っても多様なコンセプトがあり、ビジョンやミッションも異なる、現代の企業に必要なビジネスマインドに触れること、個人の志を起点とする地域ビジネスモデルに触れることを意図した。 DAY 1（7月23日）：（講師：株式会社オシンテック） 東灘区御影を拠点にフルリモート勤務で経営するスタートアップ企業から、新しい会社像を学ぶとともに、ビジネスやキャリアにおけるゲームチェンジの考え方や、情報に基づくインテリジェンス経営のフレームを学び、「ルールウォッチャー」という情報検索サービスを活用し、世界中のリアルタイムな SDGs 情報をもとに生徒の関心ごとと世界情勢を関連づける学習を実施した。 DAY 2（8月2日）：（講師：萩原珈琲株式会社、塩屋チョコレート、heso、シオヤコレクション、海角、旧グッゲンハイム邸） 午前中は神戸市灘区の老舗珈琲焙煎メーカーの港島焙煎工場を視察。日本で初めて炭火焼き焙煎の手法を確立した技術を知るとともに、地域密着型経営と大学で生物学を学んだ社長からの「違いを活かす」生物学的経営を形式で学んだ。その上で、「週休 3 日を実現する経営」をテーマにワークショップを実施した。 午後からは、垂水区塩屋町に点在する個人経営のsmallビジネス、コミュニティビジネスの現場を巡回し、起業に至った経緯や地域における存在意義などを学び、個人事業主としてのキャリアモデルを学んだ。 ●生徒の感想（抜粋） ・会社一つとっても、いろいろな形や考えがあることを身をもって感じました。いい大学に入って、いい企業で仕事に就き、定年まで働く。そんな考えが常識となっていたところに新たに別の生き方があると思いました。 ・フィールドワークでは、一つ一つの店舗が小規模なため、他店舗との結びつきが強いという利点があると思いました。		

E	地震と防災	受講生徒 10 名
●学びのポイント ①震災後生まれの神戸市民である生徒が阪神淡路大震災を学ぶ。 ②身近なインフラの構造から防災を学ぶ。高校生にとって神戸の震災は昔の出来事であるが、地震国日本で暮らす上で防災意識を持つことは必須である。とくに震災を経験した都市の教訓やこれまでの取組について、インフラ整備を通じて学ぶ機会とした。 DAY 1（7 月 29 日）：（講師：県立人と自然の博物館） 淡路島から六甲山系を望み、淡路島の野島断層を見学した後、明石海峡大橋の見学。野島断層保存館では、阪神淡路大震災のときに活動した断層が保存されているため生徒が生まれる以前の震災をリアルに学ぶことができた。次に明石海峡大橋を内部から見学できる、「橋の科学館」へ移動し、神輝興産の鳥澤氏より橋の構造や点検方法などについて解説を受けた。 DAY 2（7 月 30 日）：（講師 株式会社ウエルアップ） ワークショップでは、まず建物の劣化について学んだ。講師が、初日に見学した明石海峡大橋の劣化箇所を挙げて解説。安全に充分注意し、高所作業車に乗って御影高校の食堂のある建物を検査。第 2 体育館の天井で多くのサビやコンクリート表面のひび割れを発見し生徒が自分ごととしてインフラ検査を学んだ。 ●生徒の感想（抜粋） ・地層の博物館で館内の人の話を聞き、地震の恐ろしさを改めて感じた。地震が起きたら、すぐ動けない人は 20%もあると聞いた。地震が起きた瞬間に自分を守る行動をすることが、助かる可能性を上げると知り、「自分のことは自分で守る」また、「家族のことも自分が守る」ことにすることを心がけたい。 ・学校の門に使われている御影石から、戦後の状況や断層のことが分かって、意外なつながりを感じた。阪神・淡路大震災と明石海峡大橋の話がメインだったが、どちらも建物や展示物をみたり先生の話を聞いたりして、理解を深めることができた。		
F	生物多様性	受講生徒 8 名
●学びのポイント 2 泊 3 日で佐津・柴山へ。日本海にてウニの人工受精をおこない、発生過程を観察。海と山のつながりについて深く考察することを目的とする。 DAY 1（8 月 8 日）：（講師：本校教諭） ウニの採集及び人工授精を行った。その後、ウニの発生の観察を行った。 DAY 2（8 月 9 日）：（講師：本校教諭） ウニの発生の観察を引き続き行った。また、魚をはじめとする水生生物の採集を行い、その特徴や生態を観察した。さらに、瀬戸内海と日本海側における漁業の発展の違いや、地形の特徴などについて考察した。 DAY 3（8 月 10 日）：（講師：本校教諭）		

ウニの発生の観察を引き続き行った。

●生徒の感想（抜粋）

- ・ウニの発生では私たちの手で命を生み出した事に感動すると共に変化が個体によって違ったり思うように実験が進まなかったりと命を相手にする実験の難しさも感じる事ができました。
- ・自分の「命」に対する認識が改められたと思います。無から命は発生しませんし私たちが魚や、肉を食べるときは必ず何かの命が失われていきます。それは魚屋に行っても、水族館に行っても得難い感覚です。

後日、各講座を受講した生徒により、文理探究科の情報発信メディアである「note」にレポート記事を掲載し、ふり返り学習の一環とするとともに、学外への探究学習の実績広報として活用した。

1-7-2 先行実施事業

■ビルドアップレクチャー

CreationⅡで実践する予定のレクチャーについて、以下のような講座について先行実施した。今後も内容を検討し、次年度以降実施する予定。

	講座名	実施日	講師
1	lonl 傾聴研修	7月9日	岩木啓子氏 ライフデザイン研究所 FLAP 代表
2	グループディスカッションのファシリテーション講座	7月11日	岩木啓子氏 ライフデザイン研究所 FLAP 代表

■CrossⅡ・CrossⅢ

総合人文コース独自の探究「Global Study」（総合的な探究の時間）の授業を活用して、CrossⅡ・CrossⅢの学びについての先行実施を行っている。なお、CrossⅡ・CrossⅢの学びについては、先述した通りであるが、今年度は、昨年度よりも幅広く文理探究科で実践予定の授業内容を実施し、良好な成果が見られた。

CrossⅡの内容を踏まえた学習活動も、総合人文コース2年生を対象とした「Global StudyⅡ」において、神戸大学と連携した授業や、外部人材を活用した授業等も実施し、取り組んでいるところがある。

CrossⅢの内容については、3年生の総合人文コースの生徒を対象に今年度初めて先行実施した。探究活動の論文化を進めさせた際は、生徒が使用している端末（iPad）の仕様の問題で、想定外のトラブルが発生する等、想定通りに進まない場面もあったが、工夫を重ねて良好な成果が得られたと考えている。トラブルへの対処法については、ノウハウが積み重ねつつ、新たな年度の指導に活かしていきたい。また、メンター活動を通じて、2年生へのアドバイスや伴走を常時実施することが可能となり、2年生の充実した探究活動につながった。

■クリティカルシンキングA・B

クリティカルシンキングAについては、総合人文コース2年生を対象に先行実施している科目である。年間3回の読書レポート・学びの共有を課すことに加え、「読む」を発展させ、多様な課題

を与えたり、「考える」「伝える」というプロセスを授業内で実践したりする等、幅広く多様な実践を行い、探究活動の充実につなげられるよう、生徒の資質・能力の向上に努めた。また、本授業においては、県教委からの指示により、本格実施以降は外部人材を活用した授業を 10 時間以上実施が求められるため、その点についても意識し、以下の講義を実践した。

外部人材を活用した授業の概要は以下の通りである。

1	学術論文の読み方（5 時間）	弘前大学大学院 教育学研究科 助教 若松 大輔 氏
2	クリティカルに読むということ （2 時間）	弘前大学大学院 教育学研究科 助教 若松 大輔 氏
3	論じるということ（3 時間）	弘前大学大学院 教育学研究科 助教 若松 大輔 氏 摂南大学 全学教育機構 教職支援センター 助教 鎌田 祥輝 氏

外部人材を活用した授業を実践することについては、謝礼・旅費にかかる費用面の工面に加え、授業について綿密な打合せが欠かせないこと、講師の都合や学びの進度、探究活動の進捗状況等に合わせるため、授業の実施日・時間の調整等、多くの課題があると考えている。

また、今年度より、クリティカルシンキング B についても先行的に開講し、年間を通じて、成立した時代やジャンルを問わず、様々な文章を読むことを通じて実践的な読解力を育み、現代社会の諸問題について、多面的・総合的に捉える思考力を磨くとともに、事実等について、自らの経験や知識や文章等から得られた情報をもとに、推測したり、根拠づけたりしながら、他者に的確に分かりやすく表現する力を育てることを目標とした授業を展開した。

■Creative PresentationA

本科目は、今まで学んだトピックの中からテーマを選び、内容を深めたものに、情報や自分の意見を加えて発表する。スピーチセッションを行い、発表者、司会、紹介、評価など様々な役割を経験し、言語運用能力、思考力、表現力が養われることを目標とする。本授業においては、県教委からの指示により、本格実施以降は外部人材を活用した授業を 10 時間以上実施が求められるため、その点についても意識し、以下の講義を実践した。

外部人材を活用した授業の概要は以下の通りである。

1	スピーチ実践（14 時間）	甲南大学 グローバル教養学環 学環長 教授 野村 和宏 氏
---	---------------	----------------------------------

野村氏による助言を踏まえ、本授業で実践した「スピーチセッション」を設計した。年度当初は、オールイングリッシュで、かつ、司会やタイムキーパー等、すべての役割を生徒が担うという点について、心配な点もあったが、11 月中旬には、ネパールやマラウイからゲストを招き、スピーチセッションを開催した際も、円滑なコミュニケーションが成立する等、セッションの開催回数を経ていくにつれて、生徒の自主性も高まり、スムーズに実施ができるようになった。それは同時に、生徒の自信の創出にもつながっている。

外部人材を活用した授業を実践することについては、謝礼・旅費にかかる費用面の工面に加え、授業について綿密な打合せが欠かせないこと、講師の都合や学びの進度、探究活動の進捗状況等に合わせるため、授業の実施日・時間の調整等、多くの課題があると考えている。

■シンポジウム（７月１２日）

本校では、「ことばの力シンポジウム」という行事を、総合人文コース独自の行事の中で最も大きなものとして位置づけ、７月に実施してきた。このシンポジウムでは、社会で活躍している卒業生をお招きし、基調講演をいただいた後、生徒がパネリストを務めつつ、会場も巻き込みながらパネルディスカッションをする。今年度から新学科の１年生を交えた形で、探究活動の成果発表も含めて実施した。今後は学科生を対象とした行事として実施していきたい。

■グローバルコンシャスデイ（１２月２０日）

生徒に対しては下記の目的を掲げながら、学校としては普通科改革支援事業の成果を新学科だけでなく全校に広げることを背景として、昨年度に引き続き１２月にグローバルコンシャスデイを実施した。

○実施月日：令和６年１２月２０日（金）

○目的：

各団体や個人のリソースを活かしてくださった講義やワークショップを通じて、最先端の学問の状況や、世界の現状、そして、社会の現状を知り、今取り組んでいる学び（探究的な学びや各教科の学び）が、世界や社会でどのように活かせるかを考える機会とするとともに、「言語表現スキル」のさらなる向上を目指す機会とする。

○対象：第２学年全生徒（総合人文コース１クラスを含む８クラス）

○推進方法

- ・６月：第１回コンソーシアム会議にて昨年同様実施を提案し、協力を依頼。
- ・９月～１１月：コンソーシアムメンバーを中心に講師を依頼し内容を調整。
- ・１１月：第２回コンソーシアム会議にて、昨年の講座一覧を提示し内容を協議。
- ・１２月３日：生徒に教育支援アプリ Classi を通じて講座を案内し選択を集約。

○当日日程 １２月２０日（金）８：４５～１２：３５ 実施

- ・８：４５～ ９：００ 生徒教室移動、講師準備
- ・９：００～１１：００ 講義及びワークショップ（各講座で時間配分を行い、適宜休憩）
- ・１１：１５～１２：００ 生徒は自教室でふりかえりシート作成
- ・１２：００～１２：３５ ふりかえりの共有、テーブル発表

○講座一覧

	タイトル	講 師	所 属
１	空間の履歴をひもとく：景観や地図から分かること	菊地真 准教授	神戸大学人文学研究科
２	A I と私たちの未来について考える	伊藤真之 教授	神戸大学人間発達環境学研究科
３	生物多様性について考えてみよう	石田弘明 副館長／教授	兵庫県立人と自然の博物館／兵庫県立大学
４	区に親しんでもらうオリジナルイベントを企画してみよう！	谷口佳二 係長	神戸市東灘区総務部地域協働課
５	国際協力とソーシャルビジネス～様々な働き方にふれる～	吉川雄介 代表 渋谷吉孝 マネージャー	国際 NP0 法人 Colorbath

6	ひろがれ、セカイ！ ～世界と自分を繋げるために大切なこと～	椎木睦美 ディレクター	国際 NPO 法人 Colorbath
7	観光事業のチカラで地域課題を解決	藤田慎吾 教育営業課長	株式会社 JTB 神戸支店
8	「社会の課題」に一步近づく～NPO 支援の現場から見てきたもの～	飛田敦子 事務局長	認定 NPO 法人コミュニティ・サポートセンター神戸
9	みんなのインフラはみんなで守る～技術と人～	尾花弘教 社長	株式会社ウエルアップ
10	食品メーカーから見た日本の農業の課題	柳本勇治 社長	株式会社マルヤナギ小倉屋
11	なぜ、学校で歴史を学ぶのか？：歴史学と教育学が交差する歴史教育とは	堅田智子 助教	関西学院大学教育学部
12	映像の力で街を元気に	松下麻理 部長	一般財団法人神戸観光局神戸フィルムオフィス
13	水素エネルギー社会の実現に向けて	千草玄 副主務	岩谷産業株式会社カーボンニュートラル設備部

○成果

<生徒レポートより抜粋>

- ・自分の断片的な知識が歴史と結びつくのがすごく刺激的な体験だった。こういった自分の中で今一まとまっていなかった風景の記憶はたくさんあるし、それぞれに歴史の裏打ちがあるはずなので、それらを地理学を学ぶなかで解決していけるのはすごく楽しいことだろうなと思った。
- ・照葉樹林の分布が縄文時代と比べて 0.06%以下に減少しているという事には驚いた。日本ではどの時代にどれほどの自然林がどのような理由で無くなり、市街地となったのか二次林になったのか、はたまた…ということについて知ってみたいと思った。
- ・AI は精神科医になれるのか。完全になることは無理だが、補助的なものとしては役に立つのではないかな。AI が発達したとしても、人間と同じように、共感することは難しいと思った。
- ・私たちは探究を始めるとき、フォーカスする社会問題を決め、そこから「どうやって解決していくのか」と先のことばかり考えてしまい、すぐ結論にたどり着こうとする傾向があると思う。しかし悩んでいることには原因があり、背景がある。
- ・これからの時代、どんなインフラが生まれるのか。戦後から現代ではインターネットという通信インフラが生まれた。この完成したと思われる現代からまだ新しいインフラが生まれるとしたら何なのか。
- ・北海道で長年有機栽培をしている方のお話を聞いて、流通コストが高かったり、栽培技術が難しかったりする中でも失敗と挑戦をくり返しながらか日本の農業を支えているのがかっこいいなと思いました。
- ・教科書の悪い点は、「問い」がすでに書かれてある点、ということが印象に残っている。なぜなら、教科書に「問い」が書かれていることは普通であり、自分から「問い」を立てて考えるという行為は想像もしていなかったからだ。
- ・神戸フィルムオフィスでは、映像作品の撮影を誘致し、様々な俳優が街に来て、神戸が震災から復興していく過程を撮影することで、少しでも神戸の活気を取り戻せるのではないかと考え

たそうです。“復興”というと、どうしてもボランティアでの食料提供など直接的な支援に目が行きがちですが、このように間接的に人の心を癒して人々の笑顔を作ることが大切だと思います。

<講師感想（抜粋）>

- ・今年も積極的な受講生が多く講義はとても楽しかったです。グループに分かれてからの議論は短時間でしたが興味深い意見が多く出され、発表も上手でした。
- ・生徒さんとも楽しくやりとりをさせていただき、感想も含めてこちらも勉強になりました。彼らのスポンジのような吸収力は素晴らしいですね。
- ・学生らしい若者らしい関心の持ち方と改めて感じております。私の話を聞かれた生徒さんの中から、今回提起した問題に取り組んでくれる人が出てくれればうれしいです。

<まとめと今後の課題>

- ・生徒は昨年度よりさらに様々な社会課題を認識し、問いを発見したりするでき、講座の設定と運営は概ね目標とする成果を上げることができた。
- ・結果として講座の人数に偏りがあり、生徒の希望と講座編成に課題は残した。
- ・13 講座のうち 9 講座をコンソーシアムメンバーの方々をお願いしたが、本校生徒の成長を感じていただくことができ、多くの方から次年度も講座を引き受けたいとお申し出をいただいた。何より感謝にたえない出来事であった。

■Try プロジェクト

現代は、グローバル化によって国と国との境界がますます曖昧になりつつある。この変化に伴い、異なる文化背景を持つ人々とのコミュニケーションは、日常生活において避けて通れない要素となっている。このような背景の下、本プロジェクトは、ネパール、マラウイ、日本の 3 カ国の人々がオンラインで交流し、互いの文化、歴史、社会問題について学び合うことで、国際的な視野を持ち、生徒の多様性を尊重する態度を育むことが期待される。また、そのようなグローバル社会における相互理解と協力の精神を養うことを念頭におきつつ、本校生にとって、自国だけでなく国際的な社会問題にも目を向け、国際貢献について考える機会を提供する。そして、自らがどのように国際的な課題にコミットできるかを言語化するプロセスを通じ、国境を越えた問題に対する共感と理解を深めることで、将来的にグローバルな課題解決に貢献できる人材の育成を目指す。このようなプロセスを通じて、高校生たちは自らの行動が世界に与える影響について学び、国際社会で活躍するための基盤を築くことを可能となると考えている。

本プロジェクトは、文理探究科 2 年生を対象とした CreationⅡにおいて実践予定であるが、令和 6 年度より総合人文コース 2 年生を対象に先行実施した。

第 1 日	【導入】 アイスブレイクを含めて、このプログラムの中で何を身につけて欲しいのか、このプログラムでどんなことをするのかについて生徒に説明する。動画の作成方針等の打ち合わせも実施。 【異文化交流①】 マラウイ・ネパール 価値観 WS を実施。さまざまな要素(家族・お金・友人…etc)に優先順位をつけ、順位づけの理由を話してもらい。日本で育った自分たちの考えが全てではないことを知ってもらい。
第 2 日	【異文化交流②】 ネパール

	ネパールの方々へコーヒープロジェクトについて作成した動画を用いて説明。意見交換を行う。
第3日	【異文化交流③】 マラウイ 前半：マラウイの方々へコーヒープロジェクトについて作成した動画を用いて説明。意見交換を行う。 後半：人生について・目標について。彼らが国際的貢献に対して何をしようとしているのか。をヒアリングする。 【異文化交流④】 ネパール 人生について・目標について。彼らが国際的貢献に対して何をしようとしているのか。をヒアリングする。 【グループディスカッション】 グループで、異文化交流・国際貢献の在り方に関して意見をまとめるワーク。
第4日	【グループ発表】 作成した模造紙の発表を行う。 【グループ発表】 作成した模造紙の発表を行う。 【1分間スピーチ】 自身が国際的な課題に対してどのように貢献できるのかを1分間日本語でスピーチ。 【振り返り】 入学時の自分と今の自分とを比較し、今、自分はどの立ち位置にいるのかも含めてプログラムの振り返りを行う。

成果

- ・プログラムの充実度 3.75（4段階評価・生徒アンケートより）
- ・感想

今まで見ていた世界がすごく狭かったということに気づきました。この四日間で視野を広げられたおかげで、やりたいこともやらなければならないことも両方見つかったと思います。また海外の方と話すという本当に貴重な経験をさせていただいたことには言葉で言い表せられないくらいの感謝の気持ちでいっぱいです。そのおかげで現状がはっきりとわかりました。いろいろな気づきを得られたのもこのおかげです。それはやっぱりまだまだ世界は繋がっていないんだということです。十分にできていると思っていたのに全然だなんてショックだったけど確実な目標もできたので意味のある時間でした。

ネパールやマラウイの方とのオンラインでの対話を通じて、日本をたくさん愛してくれている人や、自分たちのことを積極的に知ってくれようとしている人がたくさんいることに気づいた。英語を使って話したのでわからなかったことや、上手く伝えられないこともあったけれど、相手が何を伝えようとしているのか理解出来たり、自分がいったことを理解してもらったりするとすごく嬉しかったので、コミュニケーションの楽しさを知ることが出来た。オンラインだと音が割れていたり、ラグがあったりしたので対面して話すことが出来たらもっと楽しかったのかなと思った。また、今回のプロジェクトを通じて、自分の英語の足りていないところや、プレゼンテーションの伝え方の未熟さにも気づくことができたので、今後その部分を磨いていけたらなと思った。

一番の発見は、私の英語でもコミュニケーションが取れるということです。学校ではどうしても点数を取るためだけに仕方なく英語の勉強をしている感じになってしまいます。しかし、このトライプロジェクトを通して自分の英語力はちゃんとついていることが分かりうれしかったです。また、今後の勉強のやる気にもつながりました。

初日にネパールの人に「日本について教えて」と聞かれることがありました。しかし私は何も思いつかず、答えることができませんでした。その時に、私は海外の人に伝えたいような日本の魅力を全然知らないことに気がつきました。それってすごく悲しいことだと思いました。もちろん海外について知ることはこのグローバル化が進む社会に生きていく上で必要なことだと思いますがそれだけでなく日本についてももっと知りたいと思いました。

1-8 探究活動成果発表会

■探究Ⅱ中間発表（10月24日）

本校には、探究活動を軸とした学びに特化した「総合人文コース」（2～3年・1クラス）以外にも、普通科に7クラス（一般クラス）の生徒が所属している。一般クラス2年生を対象とした「探究Ⅱ」（総合的な探究の時間）の学びについては、総合人文コースでの実践を中心に培ってきたノウハウを活かしつつ、週1時間で探究活動を実践している。今年度は、その中間発表に、同じ2年生の総合人文コースの生徒も参加することとした。総合人文コースの中には、一般クラスの生徒がどのような探究活動に取り組んでいるのか知りたかったという生徒もあり、両者が探究活動を介して交流するのは意義のあることだと考えている。しかし、総合人文コースの生徒が積極的に質問をする場面が少なかったり、「探究Ⅱ」の学びがまだまだ不十分な点があったりする等、今後の課題も挙げられている。

■御影セッション（3月4日）

本校では、昨年度に引き続き、学年・所属クラス・類型の垣根を越えて、探究の成果を発表するイベントを実施した。今年度は、本校内での実施をと計画していたが、計画について生徒に伝えたところ、生徒から「どうしても昨年度と同様に校外会場で実施したい」との声が多数あり、検討・調整した結果、他の行事等の日程を移動させ、神戸国際展示場3号館で実施することとした。本イベントについては、コーディネーター研修のSlack上や、普通科改革支援事業の指定校宛にも案内を発出した。

■課題研究発表会（3月8日）

3月には総合人文コースの探究成果に関する校内発表会を実施し、地域の中학생等にも公開。

■校外での課題研究発表

総合人文コースの課題探究の成果を以下の発表会に参加して、発表した。

神戸大学主催 地域探究プロジェクト発表会	6月25日
関西学院大学総合政策学部主催リサーチフェア2024	11月16日
甲南大学リサーチフェスタ2024	12月15日
兵庫県教委主催 兵庫県高等学校探究活動研究会	2月8日
兵庫県立人と自然の博物館主催 共生のひろば	2月11日
神戸市東灘区役所×御影高校 意見交換会	3月19日

■他校（岡山学芸館高等学校・兵庫県立篠山鳳鳴高等学校）との交流発表会

教員は枠組みだけを調整し、その他は生徒が主体となって、計画・進行する交流会を実施。

第1回	本校会場	7月29日
第2回	岡山学芸館高校会場	3月18日

岡山学芸館高校会場への研修については、発表会の計画・運営に加え、研修ルートについても、コンソーシアム参画団体の株式会社 JTB とタイアップし、生徒が計画立案するとともに、業者との打合せを行い、実行・運営する。今年度は、岡山、倉敷、赤穂・牛窓の3つのコースに分かれ、現地でのフィールドワークを実施した後に、会場校に入ることとした。

1-9 課題・次年度への展望

・新学科対象の授業について

今年度より本格実施した新学科対象の授業について、これまでの先行実施によるノウハウの積み上げに加え、生徒の前向きな姿勢に支えられたことも重なり、おおむね良好な経過をたどっている。しかし、今年度の入学者を対象に実施した講座は良好な成果であったものの、今後もそのような成果が得られるとは限らない。たとえば、Cross I で生徒に課すプチ探究のテーマ設定や Creation I の選択 STEAM 講座が生徒の興味関心に沿うものであるとともに、生徒にとって未知の世界に関する知識が広がるものでなくてはならない。そのために、今後も年度ごとに内容を十分に検討し、実施していく必要がある。

・各種講座の講師とのタイアップの継続

今回本事業において「MIKAGE コンソーシアム」を組織し、多くの方々からご講義を受けられる体制をとった。そして、生徒が主体的に取り組むさまざまな活動を実施することができた。しかし、今後も同じ方が連携団体から派遣していただくとは限らない上、団体内で異動されることもある。そうした際も、各団体とつながりが続くよう、団体と団体でつながっていけるような仕組みを講じる必要がある。

・カリキュラムや指導の在り方の検証

本事業を軸に3年間かけて新学科の学びを検討してきた。そして、3年目には1期生を迎え、検討した学びを展開することにつながった。しかし、これらはただ実施するだけではなく、必ず検証し、リビルドされる必要があると考えている。その際は生徒の思いを汲みつつ、社会の変容にも目を向け、「特色づくり委員会」を中心に議論し、よりよい学びの実践を続けていきたい。

2 管理機関による事業の実施体制や管理方法

本県では、令和4年3月に策定した「県立高等学校教育改革第三次実施計画」において、普通科新学科設置の方向性を明確に打ち出し、普通科コースの改編を軸とした全県規模の配置を計画的に推進している。

県立御影高等学校と県立柏原高等学校は、普通科コースの中で、いち早く普通科新学科への改編を意識したカリキュラム等の研究を組織的に行っており、高校教育課とも数回にわたって調整を進めてきた経緯があることから、両校をそれぞれ学際領域に関する学科、地域社会に関する学科設置の実践モデル校として位置づけ、新学科を設置した。

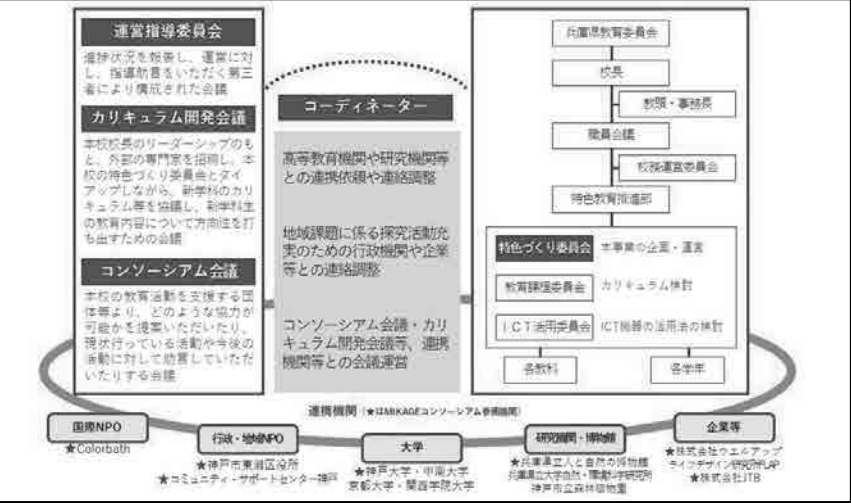
県立御影高等学校には、運営指導委員会等に高校教育課担当指導主事を派遣し、大学・企業・関係機関等の専門家と意見交換を図りながら、事業の成果と評価をもとに指導・助言を行った。

活動日程	活動内容
4月26日	学校管理職・担当教員・コーディネーターと管理機関担当者による打合せ・課題の共有
5月16日	運営指導委員会を組織
5月27日	第1回運営指導委員会 ・令和5年度の実績と成果の分析、令和6年度の事業方針の説明、今後の事業内容に対する指導助言
6月28日	第1回コンソーシアム会議 ・昨年度に各団体・機関が実施していただいた事業の成果と課題 ・新学科での取組（グローバルコンシャスデイ）に向けての協議
10月28日	第2回運営指導委員会 ・令和6年度の実績と進捗状況の報告、今後の事業内容についての指導助言
11月22日	第2回コンソーシアム会議 ・普通科改革支援事業の進捗状況 ・グローバルコンシャスデイについて
12月10日	探究スタートアップ研修会（普通科新学科設置を目指す学校の教員向け研修会）を主催 ・探究活動が時代に必要とされている社会的背景に関して理解を深める。 ・教員自身が探究の基礎をなす活動を体感することにより、探究活動における指導のあり方を考察する契機とする。
2月8日	令和6年度兵庫県立高等学校探究活動研究会（講演会、ポスターセッション、ワークショップ）を主催 ・生徒の探究成果発表の場を提供するとともに、教員、生徒の探究を深めるための学びの機会を提供
3月10日	第3回運営指導委員会 ・今年度の取組について、成果・評価・課題を総括・指導助言 ・来年度の実績について、概要を説明し、協力体制について打合せ

3 高等学校における事業の実施体制や管理方法について

本校は校長のリーダーシップのもと、コーディネーターを活用しながら、以下のような組織を構築し、本事業について運営・管理している。特色教育推進部が中心となって本事業の運営を取り扱うが、その方向性を諮問するための委員会として、週1回「特色づくり委員会」を開催することで、各学年や各部署との調整が大変円滑に進んでいる。次年度もこの体制を維持するとともに、より多くの教員がコミット感をもって本事業運営に参加できるような仕掛けや、新学科における取組みの一層の充実についても検討したい。

図4：本校の運営組織



4 運営指導委員会の体制および取組

■運営指導委員会の体制

氏名	所属
(委員長) 甲元 一也	甲南大学フロンティアサイエンス学部 教授
(副委員長) 菊地 真	神戸大学文学部 准教授
前田 哲男	関西国際大学国際コミュニケーション学部 准教授
椎木 睦美	NPO 法人 Colorbath ディレクター
柳本 勇次	株式会社マルヤナギ小倉屋 社長
洲崎 昌則	神戸市東灘区地域協働課長
倉橋 良太	兵庫県教育委員会高校教育課長

■運営指導委員会の取組

	実施日	実施内容
第1回	5月27日	- 普通科改革支援事業の令和5年度までの進捗状況 - 文理探究科の現在と今年度の事業実施計画 - 現在の取組みと今後の計画・ビジョンについての指導・助言
第2回	10月28日	- 普通科改革支援事業の進捗状況 - 現在の取組と今後の計画・ビジョンについての指導・助言
第3回	3月10日	- 学校としての推進についての指導・助言 - 来年度のカリキュラム、探究活動の進め方への指導・助言 - 今後の計画・ビジョンについての指導・助言

5 コンソーシアムの体制および取組

本事業の実施最終年度となる今年度は、令和5年度に再編成し、組織したコンソーシアムを実質的に動かし続けることに加え、本事業の取組みを文理探究科及び総合人文コースに所属している生徒だけでなく、一般クラスに所属している生徒へも還元することも鑑み、「グローバルコンシャスデイ」という複数の多様な外部団体による授業日を昨年度に引き続き設定した。コンソーシアム会議では、その「グローバルコンシャスデイ」の成功に向けて、協力いただける内容についての協議を中心に実施することができた。

■コンソーシアムの体制

所属	氏名
神戸大学文学部	学部長 白鳥 義彦
神戸大学国際人間科学部環境共生学科	教授 伊藤 真之
県立人と自然の博物館（兵庫県立大学自然・環境科学研究所）	副館長 石田 弘明
神戸市東灘区役所	区長 工藤 健一
国際 NPO Colorbath	代表 吉川 雄介
株式会社 JTB 神戸支店 教育旅行センター	センター長 上野 雄一郎
NPO コミュニティ・サポートセンター神戸	代表 中村 順子
株式会社ウエルアップ	社長 尾花 弘教
兵庫県教育委員会高校教育課	課長 倉橋 良太

■コンソーシアム会議の取組

	実施日	実施内容
第1回	6月28日	・普通科改革支援事業のロードマップ ・グローバルコンシャスデイに向けての協議 ・新学科に関する要望・意見
第2回	11月22日	・普通科改革支援事業の進捗状況 ・グローバルコンシャスデイについて
第3回	12月15日	・グローバルコンシャスデイ運営に関する振り返り ・次年度の実施に向けた要望・意見 ※コンソーシアム参画団体以外の講義担当者も出席

6 コーディネーターの配置および活動状況

本校では、本事業を円滑に進めていくにあたり、以下の3名のコーディネーターを非常勤（週7時間程度）で配置し、特色教育推進部の職員として活動している。

6-0 コーディネーター

竹中 敏浩 氏	兵庫県立人と自然の博物館特任研究員。専門は地質学。県立三木東高校・北摂三田高校長を歴任、定年退職後、同博物館専門員を経て現職。博物館でも高校との博学連携や大学・研究機関等とのコーディネートを担当。武庫川女子大学と関西学院大学の非常勤講師も兼任。
東 善仁 氏	合同会社ユブネ共同代表。神戸・奈良・島根を拠点とし、地域プロジェクトの企画運営を担う。神戸市西区の市民主導イベントの企画運営、長田区の市民ライタ

	一伴走、垂水区塩屋の空き家活用モデル事業、奈良県宇陀市の移住・起業支援事業等を担当。
林 留里 氏	立命館大学経営学研究科博士後期課程 1 年に在学中。経営学部在学中に国際 NPO 法人 Colorbath とのつながりから大阪府下の公立高校の探究活動に参加。オーストリアで開催された国際学会 24th CINet Conference にて探究的な学びに関する発表を行った。「学び」と「経営」の融合について研究を進めている。

6-1 コーディネーターの業務分担

竹中 敏浩 氏	・ 3つの会議（運営指導委員会、カリキュラム開発会議、コンソーシアム会議）のコーディネート、ファシリテーション ・ ビルドアップレクチャー、グローバルコンシャスデイの企画、運営 ・ 本事業や特色教育推進部会、特色づくり委員会での積極的なコミットメント
東 善仁 氏	・ Creation I（選択 STEAM 講座）のコーディネート ・ 広報ツール note の整備、生徒への指導 ・ 本事業に関わるメンバーの連絡ツールの整備、運用
林 留里 氏	・ カリキュラム開発会議・コンソーシアム会議・運営指導委員会議事録作成 ・ 生徒探究活動の伴走および記録作成 ・ 高大連携授業の調整、新学科広報のための中学校訪問の調整

6-2 コーディネーターの勤務記録

	竹中コーディネーター	東コーディネーター	林コーディネーター
	主な取組事項（時数）	主な取組事項（時数）	主な取組事項（時数）
4 月	県教育委員会普通科支援事業担当課訪問、事業計画打合せ（28 時間）	年間業務計画打合せ、勤務計画と協働起業のピックアップ、note 広報の計画（14.5 時間）	「Cross I」授業の伴走（27 時間）
5 月	第 1 回運営指導委員会準備・会議運営、探究活動における ICT 機器の活用協議（28 時間）	STEAM 講座講師の調整・依頼書作成、内容検討、note 広報の計画 各社挨拶（11.5 時間）	「Cross I」授業の伴走、授業記録作成、中学訪問調整、高大連携授業調整（15.5 時間）
6 月	第 1 回コンソーシアム会議調整・運営、選択 STEAM 講座準備（27 時間）	STEAM 講座各講座調整・打合せ・コンソーシアム会議調整、note 記事添削、生徒指導（27.5 時間）	高大連携授業調整、コンソーシアム会議議事録作成、「Cross I」授業の伴走（25.5 時間）
7 月	選択 STEAM 講座連絡調整、グローバルコンシャスデイ調整（29 時間）	STEAM 講座生徒チラシ作成・講座調整、note 記事添削、生徒指導（28 時間）	高大連携授業調整・高大連携マニュアル作成、全国 CN 研修参加（21.5 時間）
8 月	選択 STEAM 講座運営・引率（25 時間）	STEAM 講座調整・準備・運営、講座参加生徒引率、全国 CN 研修参加、note 記事添削、生徒指導（36 時間）	クリエイション講座制と引率、高大連携授業調整・依頼書作成（7 時間）
9 月	選択 STEAM 講座まとめ、第	STEAM 講座講師事後処理調	高大連携授業調整、「Cross

	2 回運営指導委員会調整・案内（29 時間）	整、実施報告書作成、note 記事添削、生徒指導（27 時間）	I」授業の伴走、全国 CN 研修参加（37 時間）
10 月	第 2 回運営指導委員会、コンソーシアム会議調整・運営、（34 時間）	STEAM 講座講師事後処理調整、実施報告書作成、全国 CN 研修参加（34 時間）	「Cross I」授業の伴走、探究活動中間発表会指導、会議議事録作成（26 時間）
11 月	グローバルコンシヤスデイ調整・準備、コンソーシアム会議運営（20 時間）	STEAM 講座講師事後処理調整、note 記事添削、生徒指導（29.5 時間）	「Cross I」授業の伴走、ビルドアップレクチャー調整、全国 CN 研修参加（18 時間）
12 月	グローバルコンシヤスデイ調整・準備・運営・まとめ（33 時間）	報告書作成打合せ、グローバルコンシヤスデイ運営、note 記事添削、生徒指導（26 時間）	「Cross I」授業の伴走、報告書作成打合せ（16 時間）
1 月	報告書原稿執筆、第 3 回運営指導委員会調整・準備（25 時間）	note 記事添削、生徒指導、報告書まとめ、引き継ぎ資料作成（30 時間）	報告書資料作成、「Cross I」授業の伴走、カリキュラム開発会議議事録作成（43.5 時間）
2 月	情報機器等を利用した探究活動検討（23 時間）	note 記事添削、生徒指導、報告書まとめ、引き継ぎ資料作成、全国 CN 研修&フォーラム参加（28 時間）	全国 CN 研修参加、TRY プロジェクト企画立案（41.5 時間）
3 月	報告書まとめ、第 3 回運営指導委員会、ICT 機器利用の探究活動検討（21 時間）	note 記事添削、生徒指導、報告書まとめ、引き継ぎ資料作成（30 時間）	御影セッション運営、TRY プロジェクト調整・準備、探究活動発表会の指導伴走（43.5 時間）

6-3 課題・次年度への展望

令和 4 年に採択を受けた本校の普通科改革支援事業は、4 年度には 2 名のコーディネーターで、令和 5・6 年度は 3 名のコーディネーターで役割を分担しながら、学際領域としての文理探究科及び学校全体の探究的な学習活動の充実に尽力し、高校と大学・企業をはじめとする地域社会と連携し、さらに深めることの一翼を担ってきた。3 名のコーディネーターは全国コーディネーター研修の中では、学校経験者型、外部人材型、伴走型と呼ばれる人材で、その特徴に基づいて役割分担しながら努力を重ねてきた。3 名ともに時間給に基づく非常勤職員で年間 322 時間という制限があり、週に 6～7 時間の勤務となる。3 名で役割分担するとは言え、学校とコーディネーター間や 3 名の間の連絡・調整を全て学校職員が担うことは、大きな負担となる。そのため、グループウェアを用いて連絡を取り合った。また今年は月 1 回程度、コアタイムと称して 3 名の勤務時間が重なる機会を作り、対面での情報共有の機会を設けて、校内の推進役である特色教育推進部とコーディネーター間、コーディネーター同士の間の連携・調整を行い、探究的な学習活動の趣旨や進め方を共有しあい、成果をあげることができるよう努力した。

その結果、本校の運営指導委員会とコンソーシアム会議において、これからの高校教育の中で社会と結びついた探究活動を行っていくうえで、コーディネーターの存在は不可欠と認識いただくに

至った。本校の事業をつぶさに見ていただいた委員の方々にコーディネーターの存在を認めていただくことは、今後の探究的な学習活動や組織の在り方に一石を投じるものと信じる。

なお、昨年の報告書内では、年間時数の限られる（昨年まで年 280 時間、本年 322 時間）非常勤のコーディネーター業務について 3 つの課題を列挙していた。このうち情報共有と協働については上記のような工夫により改善した。しかし、渉外や探究活動の伴走が勤務時間や場所によって大きく制限される点、非常勤職員であるため校内のネットワーク権限は得られず、インターネットワーク資源も利用できず、渉外や校内のデータ共有に支障をきたす点については努力と工夫だけでは解決しない。この点、今後の勤務条件の改善等に期待するところであり、コーディネーターが校内の教員を支える専門職として成立する最低条件でもあると考える。

7 新学科の設置及び設置に向けた検討の関係者への説明の実施

昨年度に引き続き、学区内の中学校 71 校に訪問し、文理探究科に関して説明したことに加え、以下のように、学校説明会等にて、文理探究科の取組みや本校全体の取組、および、普通科新学科に関する取組そのものについて、広報活動を実施している。

■本校主催の学校説明会（9 日間・22 回）

1	第 1 回オープンハイスクール	学校・学科概要説明	2 回	申込者数 700
2	校外学校説明会（北区文化センター）		2 回	60
3	校外学校説明会（西区文化センター）		2 回	70
4	第 1 回文理探究科説明会		2 回	363
5	第 2 回オープンハイスクール		4 回	1382
6	授業公開日		1 回	37
7	第 2 回文理探究科説明会		6 回	167
8	第 3 回オープンハイスクール		2 回	240
9	課題研究発表会		1 回	120

■中学校主催の進路説明会（9 校）

神戸市立上野中学校、神戸市立神戸生田中学校、神戸市立御影中学校、神戸市立魚崎中学校、神戸市立烏帽子中学校、神戸市立住吉中学校、神戸市立葺合中学校、神戸市立向洋中学校、神戸市立桜の宮中学校

8 管理機関における事業全体の成果検証、評価

令和 4 年 3 月に策定した「県立高等学校教育改革第三次実施計画」において、普通科新学科設置については、「普通科コースからの改編、または発展的統合を行う学校への配置を基本とし、1 学年 1 学級とする」と定めたことより、県立御影高等学校は、普通科総合人文コースにおいて、探究活動に特化したカリキュラム開発を先行して進めてきたことから、令和 6 年度に新学科（文理探究科）を設置することとし、そのための支援をしてきた。

県立御影高等学校においては、令和 4 年度に新学科設置に向けた校内体制整備等を進めたことで、本年度はカリキュラムや探究プログラム、学校設定科目の工夫等の研究を進めることができたと評価している。引き続き、運営指導委員会等に参加し、適宜指導・助言を行うことで、県立御影高等学校の文理探究科の学びが、県全体の普通科新学科の学びを牽引していくような研究を進めることができるよう支援していく。

9 管理機関による支援体制（予算・人員配置等）

県立御影高等学校には、令和6年度の新学科設置に向けた支援として、探究活動を効果的に取組むことを目的とした「探究ルーム」の整備に400万円の支援を行った（令和4年度）。また、本事業の国費に加え本県からも独自に40万円の予算措置を行い、より充実した取組となるよう支援した（令和5年度）。

なお、令和6年度については魅力ある教育活動のための教員を加配している。

10 成果普及のための取組

下記の通り、学校訪問の依頼に対応するとともに、今年度からは生徒が主体となってWeb上で発信する仕組みを創設し、随時、本校ウェブサイトやnoteにて本事業に関わる活動の報告を積極的に広報した。訪問のあった関係者とはそれぞれ情報交換を行い、各校の先進的な取組も拝聴し、本校の取組を検討する上での参考とすることができている。

■視察来校対応

実施日	所属	来校者	主なご質問・視察事項
6月7日	大阪府立春日丘高等学校	6名	・普通科改革の取組について
7月19日	神奈川県教育委員会	2名	・学際領域学科の取組内容や課題について
8月2日	岩手県立大槌高等学校	1名	・体験型学習について ・実際の講座の進め方について
10月21日	兵庫県立阪神昆陽高等学校	4名	・探究活動での「課題設定」について ・協働的探究学習による授業づくりについて
11月11日	兵庫県立尼崎高等学校	6名	・今年度の取組計画について ・総合的な探究の時間の取組について
11月14日	宮城県泉館山高等学校	2名	・文理探究科の教育について ・外部連携を活かした探究活動について ・独自行事について
11月18日	大阪府立泉陽高等学校	5名	・改編プロセス、校内組織について ・カリキュラム、外部連携について ・探究の授業デザインについて
11月20日	福岡県教育委員会 福岡県立鞍手高等学校	3名	・学科の取組について ・総合人文コース改組の背景や経緯について
11月27日	富山県立富山南高等学校	2名	・新学科のカリキュラム、設置スケジュール ・特色ある行事や事業等
2月3日	青森県立弘前高等学校	1名	・文理探究科の取組について
2月10日	静岡県立浜名高等学校	4名	・文理探究科の取組について ・総合人文コースの取組について
2月26日	大阪府立牧野高等学校	4名	・本校の探究的な学びについて

※その他、福島県教育庁より文理探究科の取組等に関する電話での聞き取りの対応、河合塾の進学情報誌「Guideline 2024年10・11月号」の取材、リクルート進学総研からの取材等にも対応。

11 国の指定終了後の取組継続のための仕組みづくりに関する取組（特に予算・人員配置について）

○ MIKAGE コンソーシアムの継続的な連携が続く仕組みづくり

学際領域学科の特色ある学びを支えるのは、コンソーシアムを構築する機関等と継続的に連携が続く仕組みづくりである。国の指定期間内で、それぞれの機関と双方にとって Win-Win の関係になる連携のスタイルを確立し、学校内の学びから学校外での学びへと発展できる「共創した学び」がかなう更なる仕組みを構築することが大切である。昨年度から、コンソーシアムと連携した取組（グローバルコンシャスデイ）を実施したことで、関係機関はコンソーシアムメンバーとしての意識、今後も連携することの意識を高めることができた。

一方、充実した「学校内の学びから学校外での学びへと発展できる『共創した学び』」となる探究活動を展開するうえで、経費の問題は大きな課題である。事業終了後を視野に経費の削減等について、関係する機関と連携を検討していく。

○ コーディネーター機能の維持

指定期間後のコーディネーター機能の維持については、コンソーシアム内の大学または企業からの継続的な人員配置が行えるよう Win-Win の関係の構築に取り組む。

一方、学際領域学科がスタートするにあたり、教員加配をいただいている。現段階では教員へのコーディネーター機能の移行を検討していかなければならない状況であるが、普通科改革支援事業に3年間取り組んできた中で、コーディネーターは教員以外の方が務め、学校に新しい風を吹き込むことがベターであると考えている。

Ⅲ 研究開発の内容

① 3つの会議（運営指導委員会、カリキュラム開発会議、コンソーシアム会議）の協議内容

第1回 運営指導委員会

日 時：令和6年5月27日(月) 14:00-16:00
場 所：兵庫県立御影高等学校 リサーチルーム
出席者：甲元委員、菊地委員、前田委員、椎木委員、洲崎委員、森崎主事 沖校長、石井教頭、四郎園教頭、橋本教諭、大西教諭、山口教諭、屋敷臨時講師、 竹中コーディネーター、東コーディネーター、林コーディネーター
内 容：校長挨拶、管理機関挨拶、委員長・副委員長の選出、資料説明（本事業説明）、協議
協議題：①普通科改革支援事業のロードマップ ②文理探究科の現在と今年度の事業実施計画 ③現在の取り組みと今後の計画・ビジョンについての指導・助言

■普通科改革の現状と文理探究科の現状

甲元委員

「探究活動について、外部会場での発表は非常に良いと思う。探究活動後のアンケートは、実施したのか。」

橋本教諭

「生徒へ向けたアンケートは実施したが、教員に向けたアンケートは実施していない。生徒アンケートでは、探究に対する『楽しかった』という意見が多かった。この『楽しさ』は、クラスメイトと協働する喜びや授業で習わないことの学習などを挙げている生徒が多かった。」

甲元委員

「御影高校側で、探究活動や探究活動に関わる外部活動に対して、目標やねらいを設定しているかと思う。こういった場合は、実施後のねらい通りの影響になっているかどうかの検証が、非常に重要になる。今回は、発表会をすることで生徒に一定の達成感が出たと思われる。文科省の言うとおりに実施し、評価することは、大変難しいことであるが、適切に評価していくことが今後の支援事業などに継続する。また、文理探究科への入学者は、探究に対して関心がある子を採用すると、学内の方針と生徒のやりたいことがつながるため、Win-Winな関係になる。その生徒たちに対して、自己の能力や探究活動のブラッシュアップに繋げるような内容にすると入学希望につながるかと思う。」

竹中 CN

「『評価』に関わる部分をもう少し詳細に知りたい。」

甲元委員

「現在、教員が行なっているのは、コンテンツに関する評価しかない。しかし、他のところは達成度に関する評価などもある。生徒に目標を立てさせ、達成感を生ませる仕組みが重要になるかと思う。」

橋本教諭

「初回の総合的な探究の時間に、探究の目標を生徒自身に考えさせる時間を作っている。これは、探究の目標を評価に繋げると言うよりも、生徒の達成感を与えるために利用したいと考えて設置している。本校の総合的な探究の時間は、多忙になりがちであったとしても、総合的な探究の時間で得られる知識の深まりを重視し、探究のサイクルを2周できるような設計で実施しており、ねらい

通りに生徒の達成感へとつながっている印象はある。しかし、生徒の達成度を評価する方式は、目から鱗である。」

甲元委員

「箇条書きでの記述に制限することで、教員も容易に理解できるような形式で評価できると思う。」

■Try プロジェクトに関わる報告

椎木委員

「橋本先生ならび特色の先生とプロジェクトゴールを設定し上で、実施した。プロジェクト初めに生徒に『みんなにとっての Try だからね』と念を押して、みんなで授業を作り上げることに同意してもらいながら実施ができたのは非常に良かった。英会話によるコミュニケーションに教員は不安もあったが、あえて手を離し、生徒にまかせることで、次に活かそうと言うモチベーションに繋がったと思う。」

竹中 CN

「Try プロジェクトに参加していただいたネパールやマラウイの方々は、Colorbath と関わりのある方なのか。」

椎木委員

「今回の Try プロジェクトは、現地のパートナーやスタッフに参加を依頼した。彼らにとっても日本の高校生と話すのは初めての試みだったが、現地のパートナーやスタッフは、愛のあるコミュニケーションをしてくれるおかげで、高校生にも合わせながら、うまくコミュニケーションをとることができていた。また、彼らも感動したようで、日本の高校生からも学びが得られたと言っていた。」

竹中 CN

「今回、Try プロジェクトに参加していた総合人文コースの 2 年生の生徒たちは、自己肯定感を良い按配で持っている生徒だと感じた。通常は、思春期に自己肯定感が低下することで、不安定な時期になるが、この生徒たちは、自己肯定感があることで不安定さを感じず、それがグループワークなどにもつながっているのかと思う。今後は、こちらがその辺りをうまく活用しながら育てていくのが良いかと思う。」

■ご質問・ご意見

甲元委員

「非常に生徒がアクティブに活動されている。良い一面であるが、一方で、課外の部活に参加している割合の高さや塾などとの負担感が気になる。」

橋本教諭

「毎年、その話が議論の対象にある。本校では、約 94%の生徒が部活に入っていると報告を受けている。1 年生は、部活も入り立てであるため、重役などもない。1 年生生徒には、先日の中間試験後に、何か悩んだ際には、横の生徒に話を聞いてもらうことも重要だが、教員に頼るようにも伝えた。」

甲元委員

「甲南大学で設立したプロジェクトでも同様の問題が指摘され、対策としてメンタルサポート班を設立した。メンタルサポート班は、保健の先生などに入ってもらい、定期的なヒアリングと生徒の抱える課題の吸い上げなどを実施している。御影高校も類似した対策をすると良いと思う。」

橋本教諭

「そういった点では、1 年生の学年主任が生徒にとって母のような存在であると感じている。教員へ相談に行くように伝えた際に、学年主任にも相談するようにと伝えると 40 名の生徒は、首を縦

に振っていた。少なからず負担感を感じている生徒はいるはずなので、その辺りは配慮していきたいと思う。」

竹中 CN

「利害関係にあたらぬ教員が良いということですね。」

甲元委員

「そうです。教科担当など、自身の評価に関わる教員ではなく、第三者的視点を持った教員である方が好ましい。意外にも様々な経験をする上で、周囲の生徒と切磋琢磨することで、周囲の生徒とギスギスするような場面も予測される。配慮のための対策を講じた方が良いと思われる。」

前田委員

「御影高校は、今までのさまざまな活動が非常に良い成果になっていると感じる。また、様々な活動を実施していく中で重要になるのは、学校や教員側の懐の深さ、自由度である。計画の大筋を立てつつも、遊びを聞かせることで、生徒のより良い活動につながる。御影高校は、生徒に対しての許容度が高く、自由度を持たせた運営ができているように感じる。今後、御影高校が兵庫県内の文理探究科に対してパイオニア校的な立場になる。つまり、今、御影高校で実施されていることの実施を試みる高校の出現が予測される。その際に、御影高校は、独自性や特色を問われるようになる。独自性や特色は、具体的なモノやコトといった物質的に有形である必要はなく、評価手法など物質的には無形であっても良いと思われる。現在の御影高校で行なっている運営方法や評価手法などを『御影メソッド』としてまとめることができると非常に良いと思われる。」

竹中 CN

「現在の御影高校であれば、どのあたりが特色や独自性につながるか、前田委員の考えをお聞かせいただきたい。」

前田委員

「現在の御影高校は、たぶん先生方が普段からしっかり関わっておられるからこそだと思うが、いい意味で『生徒にお任せですわ。』と言える空気感がある。私は、そこが良いと考えており、ぜひ、御影の特色にしてほしい。」

洲崎委員

「今回、初めて資料を見たこともあり、感想程度のコメントになる。社会的には AI が発達し、役所の仕事やさまざまな仕事の内容が変化しつつある。知識は、調べれば出てくることになりつつあるため、知識を習得させるよりも、知識を深める、もしくは考える力を若い頃に醸成することは、非常に良いと思う。現代では、PC 1 台あれば知識もいくらでも調べられる。そのため、頭を使うことを教えられると言うことが良い。神戸市とのタイアップも今後の参考にしたい。引き続き、協力できるところは力添えをしたい。」

菊地委員

「地域探究については、現在 Cross II に入っているのか。」

橋本教諭

「そうです。」

菊地委員

「御影高校と神戸大学は、総合人文コースの頃から継続的な関係としてのつながり持っている。御影高校が考えている Cross の全体としてのねらいがあると思われるのだが、神戸大学の学生が御影高校の到達目標やねらいを理解できているかと言うと少し微妙な現状である。高校と大学の連携は、時間が限られていることから難しい部分も多いが、大学生の負担にならないようにしつつ、高校生や大学生の理解を促進したいところではある。先ほど、負担問題に関する議論が行われていたが、

大学生に関しても同様に考えている。つまり、高校生の支援にきた大学生が、高校生支援を負担に感じてはいけなと考えている。どうしても、部分的な視点になりがちな場面もあるが、地域探究では非常に良い取り組みをされていると感じている。今後は、地域探究などの成果物として作成されたスライドやポスターを史料として集積していき、教員側だけでも円滑に共有できるような体制は作るべきだと思う。教員が、被りの多いテーマの探究プロセスの相談に乗りやすくなると感じる。また、課題に対するアプローチ方法などで、生徒への情報共有などにできるかと思う。大学生側の話をすれば、参加学生は1年生や2年生が中心的存在であるため、1学期の授業のなかでトライアンドエラーを実施できれば良いかと思う。ネットで情報の取得はできるが、それだけでわからないところを手引きできたら良いと考えている。大学生並みのことを高校生に求める訳ではないが、アカデミックリサーチの手順に基づいた成果を作成する、情報があきらかでないと自身の都合による探究、研究と呼ばれかねないので、その辺りもうまく手引きできたら良いと思う。」

■現在の取組と今後の計画・ビジョンについての指導・助言

前田委員

「以前もお話しした可能性があるが、小規模校に勤めていた際に、朝来市でコーディネーター1名を配置した。今、社会状況の変化もあり、いろいろなことが変化してきていることから、私は、コーディネーターの正式配置を実現させるべきだと思う。現在の教育コーディネーターは、職務としても不安定であるから、複数校の掛け持ちなどで職務として安定化させ、コーディネーターとして配置するべきである。」

菊地委員

「この事業は、今年が最終年度であるため、今年度のコーディネーター業務におけるメリットやデメリットを明確に記しておくべきだ。このような形式の授業や学習活動をするには、コーディネーターの配置が不可欠であることを証明することが重要である。この効果検証を持って、県教委に今後のコーディネーターの在り方について検討していただく必要がある。非正規公務員が問題視されている中で、非常勤公務員が一番大事な仕事を支えていると言う現状の弱い部分をどれだけ変化させることができるか、教育全体としての議論としてもほしいが難しいので、県教委など狭い範囲で独自に進めていけるかを考える必要がある。」

甲元委員

「以前よりコーディネーターが重要視されているにも関わらず、コーディネーターが正式に設置されない現状には理由があると考えられる。例を挙げるとすれば、コーディネーターが担う業務は、学校教員で賄えるのではないかという認識に基づいた指摘も存在していると考えられる。コーディネーターを正式に設置するには、県教委側の考えるコーディネーター未配置である理由を払拭する必要があるだろう。」

竹中 CN

「30年程前より、学校教育への地域との連携やコーディネーションが重要だと言われるようになった。当時、教員であったが、『地域』との広がりを意識するように言われていた。教員がコーディネーション業務をしていた理由は、教員が『地域』とのコーディネーションをすることで、『地域』への理解の促進につながると思うという理由だった。」

甲元委員

「それは、時代的な考えだったのだと思う。現代は、その考えでは通用しない。やはり、県教委には、現場の生の声を届ける必要がある。効果検証用にアンケートを実施する際は、個別に実施するような自由記述的なアンケートなどで生の声を集約すると県教委側へも開示しやすいと思う。また、

新規の文科省事業である SSH 事業や三菱みらい育成財団などの教育助成金もさまざまあるため、今回の普通科改革支援事業以外にも何か申請するべきだと思う。」

橋本教諭

「SSH に関わる支援事業については、本校の周囲に SSH 校が多数設置されている現状を考慮すると、大変悩ましいところではある。三菱みらい育成財団については、3 年前より採択されており、本年度も再申請を行っている。本校での取り組みについては、三菱みらい育成財団からも一定評価していただいているものと考えている。資金については、本校の実施している新たな学びの活動や学びの充実に、どの程度の資金が必要になるのか、また、資金分配への計画などを立て、県教委には必要な資金について確認してほしいところではある。現時点では、令和 7 年度から私がコーディネーター業務を請け負う予定だが、学校への滞在時間は取れても、企業連携や地域連携のコネクションが無いことから、困難な場面に多々遭遇することが予測される。」

前田委員

「以前、県教委に勤めていた経歴があるため、1 つ理解できることがある。県教委に求められることは、公平性。県内の学校に対してどのように公平性を保つのか、と言う点を非常に重要視している。その上で、重要視しているのは理屈であり、おそらく何かしらの支援を行うにも理屈を重要視しているのだと思う。コーディネーターの正式な配置を依頼する際も理屈が重要になると思うので、甲元委員が話されていたように効果検証を活用し、成果の可視化、理屈の生成を行う必要があると思う。」

甲元委員

「高校にも負担がない条件下で、学校の求めている事柄について理論立てて作文する必要がある。」

竹中 CN

「先ほどの SSH の文科省事業については、新制度であり 1 年目であるためどのような活動を期待されているものかについても不明瞭な部分も多い。そのため、採択校の制度運用開始後の動きを確認しつつ、本校の申請についても検討するべきかと考えられる。」

甲元委員

「やはり、実施した活動が、実施前の”ねらい”に沿っているのか、やったことに対するアンケートを実施し、それをもとにブラッシュアップした点をあげていくことが重要になると思う。」

椎木委員

「令和 7 年度から御影高校のパイオニア校としての動きが必要になるという議論がありましたが、今現在、全国で同様の議論が発足していることが予測できる。今後、御影高校がパイオニアとして、企業のスポンサーをつけるぐらいの大きな仕組みづくりを実施し、全国に普及させていけたら良いと思う。」

森崎主事

「兵庫県内でも御影を含めた国からの支援事業の対象となっている高校は資金があるが、指定の対象になっていない高校は、資金がない中で教員を 1 名加配し、コーディネーションを実施している。少額であるが、魅力アップ推進事業などを教育期間向けに実施しており、今はその程度の配慮をすることしかできていない。椎木委員が言うような仕組みも作ってくださいと言われたが、県教委として努力はするが確約はできないという返事しかできていない。」

洲崎委員

「企業連携も積極的にしていると思う。東灘区に所在する企業がどの程度活力ある企業がいるのかを明らかにする必要があると感じている。現在、活力ある企業は、今できることをやっておられるとは思う。連携企業に対し、新規での寄付やスポンサー体制など、その辺りどうしていくかと言う点は重

要な議題になる。しかし、前向きに相談してみる話ではあると思う。」

第2回 運営指導委員会

日 時：令和6年10月28日(金) 13:30-16:00

場 所：兵庫県立御影高等学校 リサーチルーム

出席者：甲元委員、菊地委員、前田委員、椎木委員、柳本委員、洲崎委員、森崎主事、
沖校長、石井教頭、橋本教諭、大西教諭、山口教諭
竹中コーディネーター、東コーディネーター、林コーディネーター

内 容：校長挨拶、管理機関挨拶、料説明（事業進捗報告）、生徒発表、協議

協議題：①普通科改革支援事業の進捗状況

②文理探究科の現在と今年度の事業実施計画

③現在の取組と今後の計画・ビジョンについての指導・助言

■普通科改革支援事業の進捗状況

前田委員

「資料5ページの校外の方々による授業・講話の受講時間と開講時間について、もう少し詳しく教えていただきたい。」

橋本教諭

「令和6年度は、御影高校が文理探究科の生徒に対して、26日間・106時間の講座を開講した。一方で、文理探究科1年生が受講した平均受講時間は、13日間・31時間分の講座受講という結果になっている。」

前田委員

「スライド番号8番の学科生の現状の中でお伝えいただいた学科の魅力調査についての質問をさせていただきたい。こちらでは、高度な探究活動・地域や大学との連携活動・少人数の授業内容・多様な選択科目という4項目が設けられている。特に、多様な選択科目180%という数値については、今後さらに発展していくことが予測できる。」

甲元委員

「御影高校の文理探究科の校外学習や探究学習がこういった意図で計画・実施されているのかということについて、生徒に対して、書面など視覚的に理解できるような媒体で配布することで、教員の方々のフィードバックがより活きる状態にした方が良いと思う。」

橋本教諭

「新型コロナウイルスの影響により、中学生時代に閉じこもって過ごしていた世代が、現在の高校生になっている。彼らは、高校に入学するとともに“色々やりたい”という気持ちが行動となって現れており、我々教員が考えている以上に、探究的な学びに関わるプログラムへの参加を通じて、さまざまな経験や知識、姿勢を学び取っている現状である。そのため、目的を明確に伝えるということは重要であると感じた。」

甲元委員

「御影高校の生徒に対し、どのような意図を持ち、教員の方々がプログラムを実施しているかを共有されることで、より生徒の学びが充実すると思う。」

■御影高校文理探究科が実践する竹活用探究プロジェクトの発表について

竹中 CN

「今回は、神戸市とともに実践している放置竹林の活用方法を検討する探究活動の発表をみてい

ただいた。発表を見ていただいた上で、文理融合型の探究としてどのように感じられたのかを伺いたい。」

柳本委員

「今回の発表を見学させていただき、探究活動の目的と意義から考えるとといった公共的視点というものが強く出ていると感じた。これは、悪い心象であるということではなく、むしろ良いことだと考えている。今回見学させていただいた竹の活用方法の提案に向けて、多くの生徒が製造工程の確認や実証実験や試作を実施していた。文理融合であることを考慮すると、理系的な学びの実践はこういった実験的な側面に出ているのかと思われる。一方で、文系的な学びという点では、さらに経営的な側面である経営戦略の4P理論などを利用して、文系的な学びを発展させても良いかと思う。」

前田委員

「私は、文系と理系が交わり合うグループ探究は、非常に意味があると考えている。理系的な論理的思考と文系的な発想的思考を融合的に実践していくのであれば、新しいものとして今後発展させて行けたら良いと思う。」

甲元委員

「今回の放置竹林の活用方法の発表は、1年生の10月というタイミングでの発表としてよくできていたと感じた。ただ、1点感じたことが”調べ学習”と”探究学習”の間にいるような感じがした。今後は、自分たちのオリジナリティや独特な視点を表に出していくことを考えていく必要がある。今回の発表では、竹製品を使い終わった後の部分まで想像している班が多く、持続可能な解決策というイメージーションができていたと感じた。」

竹中 CN

「今後は、さらに実験的な要素を取り入れるべきであるか。」

甲元委員

「実験的な要素を放置竹林のプロジェクトで実践することは、現在の生徒の持つ情報や知識的に取り組みが難しいと思う。それよりも、自分が所属するグループの発表案の中に、理系的な学びと文系的な学びがそれぞれどこにあったのかを生徒たち1人1人に文字で整理してもらうということでも良いと考える。」

椎木委員

「今回は、放置竹林をテーマにした探究活動を行なっておられましたが、今後は我々の団体と主にコーヒーにまつわるテーマ探究を実践することになる。その際にも留意すべきかと思うが、対象者やその製品の先にどういった付加価値を持たせるかというところを生徒に設定・発想しても良いと伝えることで、探究的な学びの回数を生徒たちが感じた時に、より良い発展系の探究につながるのではないかと思います。」

菊地委員

「本日は、御影高校生たちのすごく良い発表を聞いてよかったです。今日の発表が、放置竹林の授業展開7回目ということを考えると素晴らしいと感じた。彼らが、発想や発表準備に6回の授業の中で、今日の発表の作り込みをしたということは、非常に良かった。ここまでの発表がこの時期にこの短期間で達成できることを考えると、課題探究で生徒たちにどこまで考えさせるのかを投げっぱなしになりがちなので、どこまで生徒に考えさせるためにポイントを生徒に細かく伝える設計をしても良いと思う。ただ、私は、販売とかマーケティングについては、考えなくても良いのではないかと考えている。地域の人の寄り添いなどの色々な形の探究活動として展開可能であり、生徒たちのできた！が積み重なっていくので良いと思う。どれも非常に素晴らしい内

容だったため、生徒に教員側から課題探究のどこまでやるべきかを目的や対象について深掘りしながら話すのも良い。また、本日の発表を受け、普段の会議にはない楽しさがあったが、この場が市役所の発表に向けてどういう発展ができるのかも考えないといけない。運営指導委員が、生徒の発表に1つずつコメントするという事は難しいため、紙でも良いので後ほど共有したい。」
洲崎委員

「どの班の発表も素晴らしい発表であった。“放置竹林”“竹”に着眼し、プロジェクトとして取り扱われることは、神戸市にとっても非常に良い。」

竹中 CN

「来年度、兵庫県には15校16科の普通科新学科が新設される。それらの対応も踏まえて、現在の取組と今後の計画・ビジョンについての指導・助言については、第3回運営指導委員会でお伺いする。」

第3回 運営指導委員会

日 時：令和7年3月10日(木) 13:30～15:30

場 所：兵庫県立御影高等学校 リサーチルーム

出席者：甲元委員、菊地委員（オンライン）、前田委員（オンライン）、椎木委員、洲崎委員、柳本委員、森崎主事、沖校長、石井教頭、橋本教諭、大西教諭、山口教諭
竹中コーディネーター、林コーディネーター

内 容：校長挨拶、管理機関挨拶、資料説明（事業進捗報告）、協議

協議題：①学校としての推進についての指導・助言

②来年度のカリキュラム、探究活動の進め方への指導・助言

③今後の計画・ビジョンについての指導・助言

○協議

（1）御影高等学校普通科改革支援事業の3年間の進捗状況

椎木委員

「普通科改革支援事業はこれで終了するが、これから先を見据えた時にどのような探究活動を展開する予定なのか。普通科改革支援事業の代わりとしてDXハイスクール事業などを活用するのか。」

橋本先生

「分断された学びをできるだけ辞めたい。デジタル機器を使える子どもたちを育て、高校1年生のうちから、生成AIなどの活用に関するワークショップの実施も検討している。手を抜くツールとして活用することも可能な時代になりつつある中で、手を抜くのではなく、どう活用するのかを考えさせていきたい。」

椎木委員

「生成AIを活用して、地域との連携や地域への貢献などを考えられると良いのではないかと思います。」

竹中 CN

「違う目標が描けるということが語られるのがDXだと言われている。」

甲元委員

「“DX をどのように捉えるか”については、今伺った話だとまだ御影高校の中でもぼんやりしているように見えた。DX の中の 1 つの話としては、AI と協働することで“人間にしか理解できないこと”と“AI に全任できること”を理解し、人間ができることに注力できる。しかし、生徒に教えるには、教員が生徒よりもその教えることについて 5 倍程度詳しい状態にしておかないといけない。それは、やはり難しいと思うので、DX 化に向けた専属のアドバイザーが必要なのではないかなと思う。」

甲元委員

「組織的な体制に対する意見を述べたい。現時点で橋本教諭が主担当として、事業の中心的な役割を担っておられるが、転勤があることなどを考えると、この状態をこれからも続けていくのは問題がある。2 年に 1 度程度の頻度で特色教育推進部の全員が主担当をされるような体制が良いのではないかなと思う。また、探究活動の内容を変化させることなく、繰り返すと、発展性に欠ものとなり、せっかく立ち上げた note の企画なども陳腐化してしまう。発展性を確保し続けることが、探究学習にとって非常に重要になる。」

菊地委員

「3 年間の報告を今、丁寧に受けたが、これからどのように具体性を持って進めるかが勝負になると思う。これまでの会議でも出てきたことだが、御影高校は複数の CN を配置し支援を受けてきていると思う。4 月以降の体制について、CN の配置について来年度計画などについて見通しや計画の内容について伺いたい。探究的な学びについては、先日御影セッションで 2 年生の発表を聴いた。発表を聞いて思っていたことは、普通クラス・コースの生徒に限らず、興味を持って取り組んでいる生徒が多数いる。その一方で、問いに対してどのように結論を導くかという点について、今後もう少し考えていかなければならない。もう少し 1 年間の中でステップアップしても良いという気持ちもある。生徒さんが、様々な本や聞き取りなどからどのように学びを結論づけていくのかについて考慮していく必要がある。」

柳本委員

「CN の制度については、来年度以降はどうなるのか。」

森崎主事

「普通科改革支援事業は終了になるので、CN は廃止となる。ただし、来年度も DX ハイスクールが継続採択された場合、来年度はその予算で CN を継続雇用することができる。」

柳本委員

「DX ハイスクール事業の中で、普通科改革支援事業の CN 配置を継続する。もし、そのような補助金がなくなっても、CN を廃止し、教員加配で継続的に運用していくことは可能なのか。」

森崎主事

「再来年度以降のことは、DX ハイスクール事業が単年度の事業のため未定である。事業が継続されない場合は、教員による業務分担で CN の役割を担い、継続していくことになる予定である。」

柳本委員

「では、自走で継続していくということですね。まずは、CN の役割を継続できる体制作りというのが重要になる。」

甲元委員

「先日、名古屋市内のある高校に伺った。訪問した高校で聞いた話だが、校外団体と連携した CN が着任しているということを知った。他府県を見渡すと、全く CN の継続運用が無いというわけではないところを見ると、兵庫県も CN の継続配置を検討できると思う。その高校は、上手く展開・発展しようという考えを持ち、継続性を意識して改革に取り組んでいる。御影高校から見て、参考になる部分もあるかもしれない。」

柳本委員

「教育成果は、今ある資料では測りきれないと感じた。5 年後や 10 年後に、御影高校の特色ある学びを受けた生徒がどうなっていくのかという、より長期的な視点で、日本の教育の正しい在り方などを考えていく必要がある。CN 配置についても、先行事例を積み重ねて、御影独自の方法を築いていくことが重要であると思う。企業でも、10 年や 20 年といった歳月をかけて、取り組みが報われることが多い。教育は、さらに長期的な視点が必要なのではないか。」

前田委員

「昔、朝来市におられた地域おこし協力隊の方を CN として起用させていただいたことがある。参考になるかどうかはわからないが、御影高校の取り組みについて全体的なことを申し上げると、素晴らしいと思う。高校に勤めていた経験からも思うことだが、入学希望者の数が、外部評価になっていると思う。1 年目よりも 2 年目にさらに希望者数が増加している現状を見ると継続性のある発展につながると思う。CN を 3 名配置し、大まかな CN の役割を 3 つに明確にされたということが、外見でもわかりやすく、CN 自身も自身の役割について理解することにつながったと思う。また、そこを上手く連携しながら校内の関係各所と連携されているのが良いと思いました。いかにこれから継続性を持たせるかというところは、できるだけ情報共有しながら探究学習に対する学びというものを教員個人ずつでも継続させていかなければいけない。御影高校がこれまでやってきたことが、外部で発展していくことは、一見寂しい気持ちにもなりますが、取り組んできたことの集大成としては非常に素晴らしいことだと思う。」

洲崎委員

「行政内では、人手不足という問題にコロナ禍以降に直面している。なんとか努力しながら今まで通りに業務を遂行していきたいと考えている。この人手不足時代で、これからデジタル人材を育てていこうという点に焦点を合わせ、上手に活用することを考えていかなければいけないと考えている。DX ハイスクール事業ということで、良いデジタル人材の育成を十分に取組みられているように感じた。」

甲元委員

「現在、生成系 AI で『壁打ち』のようなことはいくらでもできる。書類や資料の不備などは、ChatGPT で修正することができる。先生方は、ChatGPT が提唱してきた細かいアドバイスをもとに生徒に投げ、生徒もそれに真摯に向き合うことができ、win-win の関係が構築されるのではないかと。ChatGPT

は、生成 AI の利用に関するコツを理解すれば、より探究的な学びの発展に寄与するかもしれない。」

（２）現在の取組と今後の計画・ビジョンについての指導・助言

甲元委員

「受講アンケートなどは、積極的に実施・回収していかなければならない。ただし、アンケートは重要だが、毎回同様のアンケートを実施しても意味がないと思う。他にも、探究的な学びの中で、ループリックの活用も重要だと思う。しかし、そこに探究活動が縛られてしまうと学校にとって良くないと思う。また、先ほど壁打ちの話が出てきたと思うが、他の高校でよく見られる壁打ちの相手は、卒業生である。卒業生として大学や専門学校に入学した後も、継続して伴走役を引き受けてくれる生徒と卒業前から継続的に連絡を取りつつ、卒業後も継続的にアクセスしやすいような仕組みの構築や在校生と卒業生の交流ができる機会や場所の提供が必要なのではないか。普通科改革支援事業が始まった頃の生徒たちが今年３年生になると思うので、今のうちから連絡をとれるようにしておくことが重要かと思う。」

柳本委員

「問題意識を強く持てば持つほど、探究力は強まっていくと思う。大学のゼミや企業でも同様のことが言えるが、１年で次々テーマを変えることよりも、本物というか真剣に取り組むことができる大きなテーマを持つことが重要であると思う。御影高校は、同窓会の中でもさまざまな取り組みをされている人が多い。そのような人たちの問題意識と伴走していくことでどんどんテーマを掘り下げられるのではないかと思う。」

椎木委員

「アンケートを取ることの重要性について話があったと思う。今年度の文理探究科１年の生徒の授業を担当させていただき、１年間で数回見てきた。その中で感じたことは、今の文理探究科１年の生徒は、自己肯定感も高く充実しているように感じる一方で、他に対する視点や興味が薄いと感じることもあった。これ自体は、悪いことではなく、今後の社会を生きていく子どもたちは、“個”として生きていくことが求められるようになっていくと思う。“個”で考える社会になっていくのであればこそ、他者を理解する視点を御影高校で生徒に提供して欲しい。そのため、アンケートやループリックに自己評価だけではなく、仲間評価のような視点を取り入れ、相互に意見を出し合うことができる体制にして欲しい。その他者理解のフィードバックを通じて、生徒たちは自己理解に努めていく、というような一連の流れが出来上がると良いのではないかと思う。また、評価軸では、生徒たちが保有する個別のスキルやテーマを評価し合うだけではなく、パーソナルな視点を取り入れた相互評価が必要ではないかと思う。グループワークで一緒になったこの子の強みは、これだ！私の強みはこれか！と言える関係が構築されるとよいと思う。」

洲崎委員

「先日の御影セッションに参加させていただき、その感想になるが、当日の会場では元気よく発表する生徒がいる一方で、小さな声で発表している生徒も見受けられた。その際に、事前の発表練習を同じような環境で実施し、声の小ささや発表の態度について、教員から指導するなどした方が良いのではないかと思う。それをすることによって、生徒の発表の自信につながるのではないかと思う。また、先ほどの御影高等学校普通科改革支援事業の３年間の進捗状況で説明いただいたアンケ

ートについて意見を述べたい。文理探究科の生徒からのアンケート結果は、目標値を達成していたとのことだったが、全校生徒に向けてのアンケート結果は、目標値を達成していないところも見受けられた。文理探究科の生徒たちは、学校の特色ある学びに日々触れている一方で、普通科の生徒には特色ある学びが届いていない実情が見受けられる。今後、今取り組んでいる御影高校の特色ある学びを普通科の生徒にも浸透させていく必要があると感じる一方で、御影高校の中で同じコンテンツ提供をずっと続けていると生徒も教員も飽きてくるため、特色ある学びに対し、新しさの追求も行っていく必要があり、バランスを考える必要がある。

前田委員

「資金面が潤沢でない中で、教員へ少しずつ広げていくことが必要になってくるかと思うが、御影高校は成功事例がたくさんある。考え方や連携先の探し方などを特色教育に関わりのない教員なども海外に交流できる学校があるのであれば、国際的に発表をし、意見交換するということは、生徒にとって励みになるし、やっている感も出るので良いかと思う。」

甲元委員

「御影高校は、体制化ができていると思う。今後は、これをどのように運用していくか、発展していくか考えていくことが必要になる。他の高校では、主担当の先生がいなくなったら即座にプロジェクトが廃止されることなどもあります。ノウハウを共有することが必要かもしれない。例えば、イベントが終わった時に、感じたことや何かをメモできるようなシートを作ったりすると良いかもしれない。次年度以降に引き継ぎがあった時に少しでもメモが残っていると、御影高校の生徒がどこで何を感じるのか、何を求めているのかを理解できるきっかけになると思う。せっかくこれだけ上手く行っているので、永く継続してもらえたら良いと思う。」

第1回 カリキュラム開発会議

日 時：令和6年6月13日（木）13：20～14：10

出席者：若松委員、鎌田委員、沖校長、石井教頭、栗林主幹教諭、樋口教諭、土居教諭、飯川教諭、橋本教諭、大西教諭、山口教諭、屋敷臨時講師

内容：校長挨拶、自己紹介、報告、協議

協議題：・今年度の方向性について

・現在の課題について

【本会の位置づけ】

新学科の教育内容について方向性を打ち出す。

《これまでクリアになった課題》

- ① 「『学際』とは何か」をどのように考えるか。
- ② 学際的な学びのカリキュラムについて、どのように組み立てていくか。
- ③ 新学科の名称をどのようにするか。
- ④ 新学科独自の教育活動について具体的にどのようなものを計画していくか。
- ⑤ 新学科独自科目の名称

《今年度引き続き検討すべき課題》

- ① 新学科独自の教育活動についての実践の検証。
→学科独自科目「Cross」「Creation」「クリティカルシンキング」「Creative Presentation」

- ② 教科を超えた学びの連関性をどのように形成していくか。－カリキュラムマネジメントの視点
- ③ MIKAGE コンソーシアムをどのように win-win の関係を保ちながら自走化させていくか。

■CrossⅢの開講に向けた先行実施科目「Global StudyⅢ」の現状

現状、CrossⅢの授業の実施を見越し、総合人文コース3年生に先行実施的な取り組みとして、2年生時に取組んできた探究活動についての論文化を課しているが、進み具合の遅い生徒が見受けられる。比較的文章を書くことに慣れている生徒の中にも筆を進められていない生徒がおり、支援の在り方として、どのようにあるべきか。

- ・やはり、序論をどのくらい書けばよいか、考察をどのくらい書けばよいか・・・と悩んでいた生徒がいる。方法・結果は書けるが、序論と考察でかなり筆が進んでいない様子である。
- ・2年生のころから探究の区切りごとに少しずつ文章化しておくとういかもしれない。
- ・エクセルなどで図を作るのに時間がかかりすぎている。iPad 操作しづらいかもしれない。
- ・来年度はグループごとに着席させて書かせたほうがいいのかかもしれない。運用変更の検討の余地あり。
- ・総合人文コースの生徒には、昨年度取組んだクリティカルシンキングAで理想形を見せすぎた？理想と現実のギャップがあり、悩む生徒がいるのか。書ける生徒ほど、自分の論の飛躍や矛盾に気が付き、その間隙を埋めるのに苦労しているのかもしれない。
- ・リライトすることを前提で執筆させていくのも1つの手である。あるいは、ポスターにある内容をそのまま書かせるような取組みがあってもよいか。（論文の型を示しすぎ！？枠があるからこそ困っているのかも知れない）
- ・一方で、書くことへのモチベーションをあげるため、書いた論文がどう使われていくか、誰のために書くかを意識させるとよいのではないか。
- ・口頭発表ではストーリーに多少飛躍があってもスライドを並べてなんとかなる印象があるが、文章にするとストーリーがおかしいと目立ってしまうので、筆が進まない可能性がある。
- ・とりあえず書いてみる。論理の破綻している部分を考察に「今後の課題である」と割り切って書くのも1つの手段である。
- ・昨年度はクリティカルシンキングAの授業で論文を書き始めたのが3学期であったが、今年度はもう少し時期を早めてもよいかもしれない。
- ・クリティカルシンキングAの授業と探究の取組みがリンクするとよいものになる可能性がある。
- ・昨年度の探究グループで集まって情報共有をする機会があったほうがいいのかかもしれない。
- ・探究を進めさせている2年生時に、定期的に少量ずつ文章化させておくのがいいかも。文章を書くことに慣れさせるのも必要。

■Creative Presentation について

現在 Creative Presentation は、外部より大学教授をお招きし、ご講演をいただいたり、スピーチセッションをしたりしている。スピーチセッションについては、すでに3回実施し、生徒が主体となり、オールイングリッシュで、セッションしている。司会・参加者・フォーマルスピーチ・評価者・タイムキーパーまですべて生徒が行っている。

- ・生徒たちはやりがいを持って取組んでおり、我々が思っている以上に熱心に取り組んでいる。
- ・流れが同じになるため、この形でずっと続けてよいのか不安である。マンネリ化対策が必要。

- ・スピーチセッションの形で学んでいけるのは、学びの責任を、教員から委譲され、生徒が引き受けているという点でとてもよい取り組みではないか。
- ・スピーチセッションのバリエーションをつくってはどうか。よいところは残し、一本の筋を通しつつ、発展させていくとよい。
- ・オーディエンスを広げていく、エバリュエーターとして広げていく取り組みがあればよいかもしれない。本スピーチセッションを学んだ生徒が、別の機会に別の場で開催されたセッション等において、オーディエンスになってコメントをしなければいけないような状況を用意するのもよい。
- ・英語を普段使うような人や、大学生などから評価されるとよりよいのではないか。

第2回 カリキュラム開発会議

日 時：令和6年11月28日（木）13:20-14:10

場 所：兵庫県立御影高等学校 リサーチルーム

出席者：鎌田委員、沖校長、石井教頭、栗林主幹教諭、金澤主幹教諭、樋口教諭、土居教諭、近藤教諭、飯川教諭、橋本教諭、大西教諭、山口教諭

内 容：校長挨拶、報告、協議

報 告：Cross、Creation、クリティカルシンキング、Creative Presentation の状況、現在の課題

協議題：・今年度の取り組みの報告を受けて

・探究の評価について

■今年度の取り組みについての報告を受けて

- ・今年度の文理探究科1年生は昨年度と比べて、放課後リサーチルームに残り、一口コンロやカセットコンロを使用して試料を熱したり、竹パウダーを使用してアンモニアの消臭効果を確認したりするなど「仮説を実証しよう」としている傾向にある。
- ・高校の授業内で様々な「体験」ができるのは魅力的である。また、探究活動を通じて得られたことを市などに「提案」できることは強みである。
- ・（Creative Presentation について）高校ではハードル高いのでは？と大学から来られた先生も思われていたが、生徒が本当によく頑張った。自らスピーチセッションを作り上げていた。単純にすごいし、反応も良い。色んな場面で伸びてほしい。とても良い授業であった。

■探究活動の評価のあり方について

- ・自己評価と教員から見た評価のすり合わせが必要になってくると思う。
- ・ループリックを共有しているけど・・・リストを見せるだけではつけてほしい力などは意識しづらい。時々ループリックの振り返りやできたことを伝えてやると良い。
- ・プロジェクトを終えてできるようになったことがあまり明確ではない。「こういう力をつけてほしい」というのを言い続けるとよい。
- ・「できたこと」を生徒に伝えてやることも必要。（「できなかったこと」に目が向く生徒が多い）
- ・自分の達成度を客観的に見つめることが必要。
- ・ポートフォリオの「後輩へのアドバイス」がよくかけている。メタ認知ができていると思う。「誰に」アドバイスをするか書く対象（伝える相手）を明確にしてやると御影生はよいことを書く。

第3回 カリキュラム開発会議

日 時：令和7年1月16日（木） 13:20～14:10

場 所：兵庫県立御影高等学校 リサーチルーム

出席者：若松委員、鎌田委員、栗林主幹教諭、金澤主幹教諭、志方主幹教諭、大和教諭、飯川教諭、土居教諭、橋本教諭、大西教諭、山口教諭、竹中コーディネーター

内 容：報告、協議

報 告：文理探究科を対象とした学びの現状

協議題：・Cross I について（学際的な探究プロセスの図をもとに）

・探究の評価について

■Cross I について（学際探究の在り方の図をもとに）

- ・以前設定した「学際的な探究プロセス」に関する図を体現する形で展開できている。
- ・基本的に探究の班はくじ引きで決めた。新しい班になったとき時、メンバーによって自分のポジションが変化する。そのため、メンバーの違いによって最終的な自己評価（振り返り）の内容が変わる印象であった。スタートこそメンバーの違いで動きが変わっても、だんだん自分の役割が見つけられている。
- ・竹の活用プロジェクト発表では副市長や市の幹部からフィードバックがあったのはありがたい。プロジェクトを実際に社会で担当している方から重要だと思われる観点（輸送費・人件費など）を指摘され、生徒が社会の実態を知ることにもつながった。
- ・探究の見せ場（外部の方へ向けた発表）があるのはいいことだと思う（副市長に向けて発表するなど）。
- ・探究活動に価値を置くだけではなく、「探究するコミュニティ」づくりも大切である。個人活動へのアプローチとグループ活動へのアプローチとでは教員の対応は異なる。
- ・同じクラスで探究活動を進めると、グループの関係性は濃くなっていく。学級経営と探究活動は密接に関係している。

■探究の評価について

- ・評価基準を内面化する（どのような活動がゴールで、評価されるのかを理解する）ことが重要である。
- ・フィードバック、コミュニケーション、パフォーマンスを通じて、徐々に評価基準が内面化されていくのではないかと。ルーブリック上の文言だけではわからないと思う。自分たちが行った具体的な活動と結びつくとわかりやすい。
- ・入学時点の非認知スキルに関する自己評価を書かせておくと、各プロジェクト終わりに書く振り返りと比較してより生徒の成長がわかるかもしれない。自己評価は各項目3段階程度でよいのではないかと。
- ・学びみらい pass は探究の成長と関連させて使えるようになればよいと思う。実施時期に関しても検討の余地はあり、1年生の最初と2年生の最後ではなく、別のタイミングで実施してもよい。生徒に非認知スキルに関してフィードバックができるようにしてやりたい。
- ・自己評価だけだと、厳しく自分を採点する可能性が大いにある。他者からの評価のすり合わせが必要である。

第4回 カリキュラム開発会議

日 時：令和7年3月4日（火） 12:00～13:00

場 所：神戸国際展示場 3号館

出席者：若松委員、鎌田委員、菊地委員、尾花委員、県内他校より教員4名

森崎主事、沖校長、石井教頭、栗林主幹教諭、金澤主幹教諭、志方主幹教諭、大和教諭、飯川教諭、近藤教諭、土居教諭、橋本教諭、大西教諭、山口教諭

竹中コーディネーター、東コーディネーター、林コーディネーター

内 容：協議【御影セッション（探究成果発表会）を受けて】

協議題：・発表会を見た感想、および、次年度取組むべき内容について

- ・生徒が元気に楽しそうに発表しており楽しそうだったが、ポスター資料の“まとめ”が考察ではなく実践してきたプロセスや調査データの要約になっていることが多くみられた。
- ・自校の探究では、データ分析が課題になっている。御影高校で実践しているさまざまなツールの利用や外部連携については、自校の探究にも活かせるのではないかと興味がある。一方で、引用文献の質についてはばらつきが見られた。
- ・自校の探究発表会は、一方通行の全体発表を実施している。本日の御影セッションを見学していると、発表者と聞き手の相方向的なコミュニケーションがとられており、それによって学びの深まりを感じた。
- ・自校でも苦労しているところにはなるが、調べ学習と探究との違いがあまりないようにも感じた。
- ・どの生徒も一生懸命に説明をしていたこと、傾聴して質問するという姿勢で挑んでおり、話し手も聞き手もよくやっていると感じた。調べ学習と探究の違い、問いの立て方に関しては私も難しさを覚えている。引用文献の情報の質の向上も重要だが、専門的な本を読んでいたとしても、情報の偏りが出ている可能性がある。そのような点を先生方が、どのようにフォローをしていくかが重要だろう。
- ・本日見学させていただき思ったことは、御影高校が種まきを終了し、芽が出たと思った。他の方がおっしゃるように、問いの立て方や質問・回答の仕方でまだまだなところはあるが、私が関わってきた4年間で御影高校が変化したと感じる。教育活動の継続にはお金がかかるので、その辺りをどう検討するかが重要になる。
- ・御影高校も着実に活動を実践してきたように思うので、このような御影高校の取り組みがこれからも積み上がっていくことを期待している。
- ・生徒は教員からの指示に従い、順応してっており、その様子から見ると発表の質問や回答などは、回数を重ねればより良くなっていくと思う。
- ・データの扱いについては、探究を何のためにやるかという目標設定というところが大きく関わり、校内での判断が変わってくる。良い探究とは、研究に近づけていくことなのか？という問いに対しては、高校独自の回答を設定することが必要だと思う。1年生が抱く良い探究のイメージはどのようなものなのか、どのようにその解釈が形成されたのか、ベストポスター投票は、なぜそれを良いと思ったのか、を聞きたいと思った。
- ・探究と調べ学習は違うと良く言われる中で、“調べ学習”という定義は、おそらく人によってバラバラだと思う。
- ・普通科においては、アンケート調査やインタビュー調査を手法とした探究が多いことが御影の特徴だと感じた。

第1回 コンソーシアム会議

日 時：令和6年6月28日（月）14:00-16:00

場 所：兵庫県立御影高等学校 リサーチルーム

出席者：菊地委員、伊藤委員、石田委員、谷口委員、吉川委員、藤田委員、飛田委員、尾花委員
森崎主事、沖校長、石井教頭、橋本教諭、大西教諭、山口教諭、屋敷臨時講師
竹中コーディネーター、東コーディネーター、林コーディネーター

内 容：校長挨拶、管理機関挨拶、自己紹介、資料説明（本事業説明）、協議

協議題：①普通科改革支援事業のロードマップ

②グローバルコンシャスデイについて

③新学科設置に向けての要望・意見

■普通科改革に関する取り組みについて

伊藤委員

「御影高校の文理探究科は、文理の壁を超えた学際的な学びを通じた探究活動が大きなミッションになっていると思う。そこにに関わり、文理探究科の生徒たちが実践する探究活動の課題設定について、どのような課題設定のプロセスを実施しているのかをご教示願いたい。探究活動の実践では、文理融合の学際的なテーマでなくとも探究活動は可能かと思われる。御影高校では、生徒が探究活動に取り組み、課題設定をする際に、あえて生徒へ学際性のある文理融合のテーマを求めているのか。ぜひ、現状をお聞かせ願いたい。」

橋本教諭

「現在の文理探究科1年生たちのカリキュラムでは、1年次に実施される『Cross I』で2つのミニ探究へ取り組むことで、探究活動らしい活動になっていく。ミニ探究は、探究活動のプロセスを生徒たちに体験し、理解してもらう段階のためのものと考えており、探究活動の型のようなものを生徒たちに学習してもらうことを目的としている。このミニ探究では、教員側が課題を2つ設定し、生徒たちはそれらの課題に対して、グループで様々な解決策について考える。今年度の1つ目は、神戸市の市長室から、放置竹林というテーマをいただいている。ミニ探究として、放置竹林の課題を与え、竹を活用した解決方法を探るプロジェクトとして、グループワークの方式で実施させる。竹の活用に対するアプローチは、文理さまざまなものが予測される。昨年度は、竹の活用方法として、化粧品への活用を提案するグループがあれば、社会制度に対する提言を行うグループなど、各グループでさまざまなアプローチ方法で解決策を導いた。また、今年度の2つ目は、コンソーシアムメンバーでもあるColorbathよりご協力いただき、『ネパールで製造されるコーヒーを日本の高校生に対して、どのように広めることができるか』という課題をこちらから設定する。こちらも昨年度実施した際は、文系的思考、理系的思考のどちらのアプローチも採用しているグループがあった。このようにミニ探究では、生徒たちが与えられた課題に対し、アプローチ方法を自ら設定しつつ探究活動のプロセスを進行させ、探究活動のプロセスを理解する活動である。ミニ探究以外に実施する地域探究というプログラムでは、いよいよ生徒たちの探究活動独り立ちパートになっていく。ここでは、地域の誰かの問題を解決することをテーマにした探究活動を実施していく。文理探究科の生徒が2年生に進級すると、アカデミックリサーチと称した活動に取り組んでいく。これは、自身の興味関心に沿って、研究のテーマやアプローチについて探究活動を実施していく予定である。」

伊藤委員

「アカデミックリサーチでは、生徒が自身の興味関心に沿って研究テーマやアプローチを選択することになるということは、文理の両側面を押した学際的なテーマ設定を促すということはないのか。」

橋本教諭

「はい。生徒の個人個人の興味関心に沿った探究活動を行なっていくことになる。」

伊藤委員

「御影高校の取り組みで得られた知見等は、普通科改革支援事業のモデルケースとして、今後、県内に広く周知していくという認識か。」

森崎主事

「はい。」

伊藤委員

「どのような周知を計画しているのか。何か研修会や研究会などの構築や実施の予定は現時点で存在するのか。」

森崎主事

「御影高校には、普通科新学科の設置をされている高校との横のつながりの展開などに期待している。」

伊藤委員

「普通科改革支援事業のモデルケースとなる御影高校は、良い成果につながった取り組みもあまり成果につながらなかった取り組みも、国や県、周囲の高校にとっては有益な情報となるため、細かく記録に残しつつ、発信した方が良い。発信方法や活用方法に関しては、県教委も巻き込みつつ、検討するべきだ。」

■ グローカルコンシャスデイについて

伊藤委員

「グローバルコンシャスデイの運営に関する質問だが、講座毎の受講者数のコントロールや調整は、実施しない方針か。」

橋本教諭

「生徒の興味ある講座を受講してもらうことが、一番重要であると考えている。そのため、昨年度の実施の際には、人数調整などのコントロールは実施しなかった。」

谷口委員

「昨年度実施の際に、生徒に人気のあった講座は、どのような講座か？」

竹中 CN

「日本赤十字社の方が講師をされた講座は、非常に人気があった。近年、日本赤十字社の社名をメディアなどを通じて多方面で耳にする。そのような事柄も、グローバルコンシャスデイの受講希望には影響していたと考えられる。」

伊藤委員

「御影高校の生徒は、国際的な事象に興味のある生徒が多いのか。」

橋本教諭

「国際的な事象に目を向けさせたいという気持ちは、教員の中に、おそらく存在する。しかし、必ずしも国際的なテーマに沿った講義をお願いするということではない。」

谷口委員

「グローバルコンシャスデイで提供する内容についてだが、我々は、グローバルの視点から講座を展開することは難しい。今年度のグローバルコンシャスデイで展開する講座についても、どのようなテーマの講座にするべきか悩んでいる。」

橋本教諭

「グローバルな視点での講座展開が難しい場合、身の回りや目の前に存在する問題をローカルな視点で捉えるような講座を展開していただきたい。」

谷口委員

「空き家問題やスイーツなど、東灘区にも様々な話題がある。ただ、グローバルコンシャスデイでは、プラス面をより良くしていくための提言を考えさせるような内容の講座が良いか、マイナス面に焦点を当て、問題を解決するような内容で展開する方が良いのかについて、特に悩んでいる。」

橋本教諭

「東灘区に居住している生徒以外もたくさんいることを考えると、全国的に問題になっている空き家問題などを取り利上げた方が馴染み深く捉える可能性はあるかと思う。」

竹中 CN

「探究活動や特別授業などで得られる気づきも問題解決の経験も、高校生にとっては、重要な刺激になります。探究活動の目標は、課題が完全に解決できるといったことではない。活動の結果、オープンエンドで終了しても、問題解決の後にまた別の問題が残るということに気づくことも探究活動では重要である。探究活動は、次々に新しい課題を探していくことができる状態になることが目標だと思う。」

石田委員

「昨年度のグローバルコンシャスデイに関する具体的な成果があれば、ご教示いただきたい。今年度も実施されるということは、おそらく、何か良い効果があったということだと思う。昨年度の実施の際に、実施前後の生徒の行動やモチベーションへの変化など、何か具体的なものはあったのか。」

橋本教諭

「これまで、文理探究科や総合人文コースの生徒たちは、外部講師を招聘し、講義してもらうといったことは、割と頻繁にあった。しかし、本校の普通科の生徒に対して、外部講師を招聘し、講座を展開するといった取り組みなどは、今まで実施して来なかった。そのような経緯もあり、昨年度のグローバルコンシャスデイは、普通科の生徒にとって非常に新鮮で刺激になった様子だった。普通科の生徒の刺激になるということを利点に捉え、今年度も開催しようと考えた。普通科の生徒にとって、このような数少ない機会は、進路に直接的に影響してくるものだと思う。実際に、昨年度のグローバルコンシャスデイに参加した生徒たちが、ちょうど現在進路について考えている期間に差し掛かっている。進路を決定した生徒の中には、グローバルコンシャスデイでの学びが、直接進路選択に活かした生徒もいると思われる。」

竹中 CN

「生徒からは様々な意見を集約することができたが、グローバルコンシャスデイに参加した生徒自身で気づきを得られたという意見が多かったことが非常に良かったと思う。」

石田委員

「新たな企画を実施した際には、振り返りを持ってもう一度考え直す機会が重要になると思う。何が良かったのか、どうすれば良かったのかを考えなければ、次年度開催やより良いアップデートに繋げることは難しい。そのため、是非、御影高校で新たな取り組みをはじめた際には、振り返りを重視するべきだと思う。」

■文理探究科に向けての要望・意見

伊藤委員

「学びの環境において、学際性は非常に重要視されている。しかし、自身の所属する学部に限った

話の可能性はあるが、現在の大学では、取得しやすい単位のみを取得し、卒業してしまう生徒が多い現状がある。大学の教員としては、幅広く学ぶことで、個人の幅広い知識を研鑽していくことも需要だと思う。そのため、御影高校で学際性を意識した学びを展開していることは、次世代育成の観点からも非常に良い取り組みだと思う。1年生の社会課題に取り組む活動などについては、学際的な取り組みとしての成果を楽しみにしている。また、学際的な学びの提供を行う際には、教員の指導の難しさという問題も顕在化すると思われる。そのため、私は、今後も協力しつつ学際的な学びの展開を行っていきたいと思う。

■その他

伊藤委員

「今年度のグローバルコンシャスデイでは、AIに関する講座を提供できればと考えているが、選択 STEAM 講座にも AI の講座があるので気になる。選択 STEAM 講座で取り扱う AI の講座は、どのような構想なのか。」

橋本教諭

「選択 STEAM 講座は、文理探究科1年生に向けて実施され、グローバルコンシャスデイは、総合人文コースと普通科を合わせた2年生全員が対象となる。そのため、選択 STEAM 講座とグローバルコンシャスデイは、対象学年に違いがあり、万が一、講座内容が同様であっても特に問題はない。選択 STEAM 講座の AI 講座は、1日目にマイクロソフト社に訪問する。1日目の訪問は、世界に6つしかないマイクロソフト社の AI に特化した施設に赴く。2日目の午後には、神戸大学から講師を派遣していただき、生成 AI をどのようにして探究活動に活用していくかというテーマで講座を展開する。2日目の講座は、1日目の帰り道に生徒自らで課題を探索し、探索してきた課題が本当に課題なのかという点からグループで考えるような活動を構想している。」

伊藤委員

「グローバルコンシャスデイと選択 STEAM 講座は、対象学年が違うことについて、承知した。」

石田委員

「私も同様の質問をしたい。選択 STEAM 講座の生物多様性という講座は、どのような講座か。」

橋本教諭

「こちらは、合宿形式の講座形式になる。2泊3日の間、日本海側に宿泊し、実際にウニを自らの手で捕獲し、生殖の活動などを自身で実験的な活動として行うような構想をしている。この講座は、座学によるレクチャーと体験的なワークショップを往還するような講座として展開すると聞いている。」

石田委員

「おもしろそうですね。あと1点、聞きたいことがある。アカデミックリサーチは、学際的な学びの集大成的な役割となることから非常に重要な活動であると思う。それと同時に、教員の先生方にとっては、すごく労力のかかることだと思う。現在の教員の多忙さを考慮すると、アカデミックリサーチは、実現可能なのか。」

橋本教諭

「アカデミックリサーチは、40名の生徒に対して、6名の教員で対応する。現在、総合人文コースの生徒は、2学期から週2時間ずつの先行実施をする算段である。地域環境ゼミなどのそれぞれの教員の専門分野に関わるゼミを開講し、生徒が個人の興味関心に沿ったゼミで個人で考えたテーマを設定し、探究活動に取り組む。時間がまとまって取れることと、人数的に小規模ゼミになることから、ゼミで纏まりながら外に出て探究活動につながるような活動を行うことは容易い。」

吉川委員

「全般的な話になる。Try プロジェクトだけに関わらず、兵庫県立御影高等学校の生徒は、積極的であると Colorbath のスタッフや交流に参加したネパール人も評価している。この場で話したいことは、3 つある。1 つ目は、学際性は非常に重要であるということ。生徒たちは、自分の興味や関心に沿った探究活動が基盤になると思う。しかし、探究活動を進めていくことで、生徒たちが自分のアルゴリズムに陥る感覚もある。本来は、自身で興味がないと考えていたことも探究することで、新たな興味を開いていくことにつながると思う。そのため、ポスターセッションなどのアウトプットをさせた方が良いと思う。2 つ目は、是非とも、今までの御影高校の取り組みをオープンに見せつつ、発信するべきだと思う。県内の他校の先生から御影高校に問い合わせがあった際には、生徒が探究活動について話をする場面などがあっても良いかと思う。生徒の視点から、何が魅力的に映るのか、文理探究科に入学してみてもどのような生活かなど、生徒の生の声を届けることが重要かと思う。また、文理探究科と生徒のキャリアとの結びつきなどもストックしていけると良いと思う。3 つ目は、私も仕事をしていると感じることだが、社会に存在する問題を解決しようとする流れは、一般化しつつあるように感じる。その流れから、日本の教育機関でも探究活動などに注力し、今ある問題を発見し、その問題を解決するような策を探求する活動に取り組んでいると思われる。しかし、海外の学生が何をしているのかということ、ビジネスチャンスを狙うことを考えている。詳しく言うと、ビジネスで成功するためのチャンスを伺い、新しいビジネスについて思考をめぐらせている。その結果、課題解決につながることはある。しかし、今後の社会を生き抜いていくためには、課題とチャンスを狙うといった 2 つの行為のバランスを取るように指導しても良いかと思う。」

第 2 回 コンソーシアム会議

日 時：令和 6 年 11 月 22 日（金）14:00-16:00

場 所：兵庫県立御影高等学校 リサーチルーム

出席者：菊地委員、伊藤委員、石田委員、谷口委員、吉川委員、藤田委員、飛田委員、尾花委員、森崎主事、沖校長、石井教頭、橋本教諭、大西教諭、山口教諭

内 容：校長挨拶、管理機関挨拶、出席者紹介、資料説明（本事業説明）、協議

協議題：①普通科改革支援事業の進捗状況

②グローバルコンシヤスデイについて

③新学科の学びについての意見・要望

■普通科改革支援事業の進捗状況

菊地委員

「地域探究プロジェクトで長い付き合いをさせていただいている。文理探究科 1 年生の 1 学期に地域探究プロジェクトとして関わりを持っているからこそ言えることがある。来年度以降では、今実施している御影のええとこプロジェクトで調査や発表をしている内容をその次に実施するビルドアップレクチャーやテーマ探究につながるような内容にアップデートしていきたいと考えている。テーマ探究の竹活用プロジェクトでは、非常に短い時間で生徒たちも頑張ったことが伝わるが、それと同時に探究活動の要素をかなり盛り込んでいるなという印象を受ける。今後は、カリキュラムを一連のパッケージ化することで、このプロジェクトではここまでの要素について伝える、という線引きをした方が生徒にとっては良いかもしれない。」

竹中 CN

「今後は、カリキュラムとしてつながっている一連の流れや線引きが必要ということを理解しました。貴重なご意見に感謝するとともに、来年度のカリキュラムも考えていきたい。」

伊藤委員「竹活用プロジェクトでは、1 クラスで複数の班に分かれてやるのか。また、プロジェクトの成果として、どのようなアイデアが出てきたのかも伺いたい。」

橋本教諭

「今回も竹活用プロジェクトは、神戸市とタイアップして実施している。神戸市から文理探究科の1年生に与えられた課題は、放置竹林への対処策として1年間で500本から600本消費できるようなアイデアを考案するという内容だった。今年度の文理探究科1年生の中からは、竹をパウダー状にしたものを防災用品などに使用するというアイデアを提案した班もいたが、竹をパンに入れて作る班や衣類の消臭スプレーとして商品化する案を提案する班、バッククローガーに竹を使用するといった活用方法を提言する班もいた。」

伊藤委員

「竹活用プロジェクトで生徒たちは、実験や検証まで行ったのか。」

橋本教諭

「実際に、実験や検証を行った班もあった。パンを作った班は、試作品を学年主任が食べて、『これ美味しい』と感想をいただくこともあった。バッククローガーの班は、実験や検証は行わずに提言のみを行った。」

伊藤委員

「あと、もう1つ質問がある。3年生で実施する探究のゼミは、大きなテーマにたいして内容は生徒が自分たちで決定するのか。」

橋本教諭

「生徒たちは、自身の興味関心のあるテーマを設定することができる。医療・環境・身体表現のゼミに集まった生徒たちは、睡眠に関する探究を行なっている生徒が多い。先行研究の論文からヒントを得ながらアンケートを取ろうとしている生徒もいるが、苦勞している生徒も多く見受けられる。」

伊藤委員

「学びのハンドルを生徒に渡すと言うことで、生徒がやっているのか」

竹中 CN

「現在は、例えば医療に関心のある生徒でも、社会に対する医療貢献に関するテーマ設定よりも、身近な自分の身の回りの生活に貢献するテーマ設定を行い、探究に取り組む生徒が多い。」

石田委員

「本日、ご説明いただいた内容を聞いていると順調そうで良いと感じた。想定外なことなどはなかったのか。」

橋本教諭

「新学科として今年から設立した文理探究科の1年生は、順調にいつている。今の時期から実験室に居残る生徒が多いということは、想定外のことと言える。一方で、一般クラス2年生の探究活動については、昨年度まで地域や世界の誰かの困りごとを解決する、もしくは是正することをテーマとして探究をしていたが、今年度は、2年生の間からゼミに所属して、自分の興味関心の強いところに分かれて探究活動を実施している。現在の2年生は、興味関心が強いからこそ、自分のことに目がいきすぎて社会や地域に目がいかない状態になっている。」

伊藤委員

「自然科学や工学に関することでも、自分に対して興味関心を持っているのか。」

橋本教諭

「自分というよりは身近な疑問になるが、飛距離の長い紙飛行機を飛ばすにはどうしたら良いかと

言うような内容で探究している生徒たちは、19 時以降に体育館で実験したいと言うような班もある。」

伊藤委員

「今日は間に合わないのですが、探究活動のテーマ一覧があると想像しやすいので、また機会があれば拝見したい。」

竹中 CN

「探究活動のテーマ一覧は、本日の報告資料として配布していないが、3 月に最終発表がある。こちらへのご出席可能である。」

伊藤委員

「その発表会は、探究活動に関する成果の発表、もしくはテーマの発表のどちらか。」

竹中 CN

「成果の発表を行う。」

石田委員

「生徒の情報探索は、インターネットや図書館の本といったものの利用になるかと思うが、それだけでは収集できない情報もある。そういう収集できない情報のために、プロフェッショナルな方々からの助言が必要になると思う。そう言ったプロフェッショナルの方々から講演をしてもらったイベントは実施されているか。」

橋本教諭

「文理探究科の生徒に対しては、積極的に外部調査へ赴き、たくさんの人から得られる情報を取り入れるように伝えている。自然科学分野についても、外部調査は年々増えてきている。ただし、全員が必ず専門家の方との対話が必要と伝えているわけではない。」

竹中 CN「文理融合型探究だが、班内で必ず文理融合になっているということではない。2 年生の探究活動の班を見ると、やや文系よりの班とやや理系よりの班もいる。」

伊藤委員

「AI の発達等により、竹の活用方法などを生成 AI に尋ねると詳細に教えてくれるようになった。文理探究科では、ビルドアップレクチャーなどで AI の授業を設定しているが、そこで得られた学びを実際に探究活動で使用している生徒はいるか。」

橋本教諭

「AI の授業や生成 AI の授業を実施した。現在行なっているテーマ探究のネパールのコーヒーやチャイを拡散するにはどのように活用できるか、という課題を NPO 法人 Colorbath より提供いただき、現在取り組んでいる。授業内では、生成 AI の Copilot を使用している生徒もいる。探究活動の班の中でも、生成 AI が生成した情報を鵜呑みするのではなく、もう 1 人の班員として生成 AI と付き合っている生徒も多い。一方で、生成 AI を初めて触るという生徒もまだまだ多く見られる。」

伊藤委員

「学校の探究活動の中で、生成 AI の利用の制限などはされていないのか。」

橋本教諭

「はい。生成 AI を探究活動で使用することに関して、完全に制限なしというわけではないが、使用している生徒もいる。」

竹中 CN

「マイクロソフトラボの内容は、どうだったか。」

橋本教諭

「施設内見学やワークショップの実施があった。地域課題のテーマをもらい、生徒の感じる違和感

を用いて生成 AI を利用して解決策を調べようとする、そういった内容であった。」

伊藤委員

「これからも生成 AI を利用することでさらに探究活動が活性化されていく可能性もある。」

■グローバルコンシャスデイについて

飛田委員

「グローバルコンシャスデイに参加する生徒は、一般クラスの 2 年か。」

橋本教諭

「一般クラスと文理探究科の生徒の両方が出席する。」

飛田委員

「去年と同じことを言わないようにしたいと思い伺った。」

橋本教諭

「昨年度からの続きなどでももちろん良い。」

■新学科の学びについての意見・要望

飛田委員

「私は、兵庫県立御影高等学校の 50 期生で、そのつながりから 10 年ほど前より授業へ関わりを持っている。その関わりの中で思うことは、現在の探究活動がアイデア出しをやるというパッケージになっている可能性を感じるということである。学校教育の分野でも大人の世界でもそうだが、現在のようなパッケージ化されたものの 1 歩先に行かない場合が多いと思う。地域の人にインタビューしてみることや、食べ物を収穫するのであれば、感謝祭を地域の人々を招くなどしても良い。アイデア出しだけで終わると勿体無い気がする。地域に出て、失礼があったとしても、高校生の間は良いと思う。それに加えて、失礼があった場合に、生徒が地域住民より怒られるということも 1 つの経験だと思う。だから、恐れずに地域に出るのも良いのかと思う。」

藤田委員

「私の所属する JTB では、コーディネーションをプログラム開発として、有償で実施しています。自分自身最近よく考えるのは、連携先に地域を活性化したいという強い思いがあれば受けてくれる、連携することで儲かるということであれば受けてくれる、そういった受ける側のメリットをよく考えます。御影高校と連携することで、地域の企業にとって、就職活動に有利な影響を与えるのか、商品開発のアンケートで中高生の意見をマーケティングに使えるのかといったことが、連携先の本音だと思う。Win-Win な状態の形成については、連携先の本音の部分をつんで、負担感を感じさせないということは、こう言ったところが大事かと思う。」

谷口委員

「御影高校には、神戸市としても竹活用プロジェクトでも様々なアイデアを出してもらっている。今後もこのような活動をされていくということで、神戸市も教育の場を提供することや地域の人も良い影響を受けている。今後も継続するのであれば、地域の人々にも Win-Win になるような関係の構築を主眼に捉えてもらえると良いかと思う。」

尾花委員

「私も御影高校 44 期生で、当時の御影高校はザ・普通の学校だった。この普通科改革支援事業により、御影高校は数年でとても変化したなと感じている。私は、現在中学校でアントレプレナーシップの授業を担当していますが、今後は、アントレプレナーシップを学んだ生徒が入学してくることも考えないといけない。今後は、人口減少に戦う上で、地域価値を上げていくことを求められてい

る。アントレプレナーシップは、社長になるのではなく、自分の得意なこと、エリア価値を高めるということで、中小企業との連携やNPOとの連携をどのようにするのかを考える必要がある。今までやってきたことが、エリアで線状に繋がっていくことでエリア価値を高めていくことが大事。近年では、探究学習が、ブレストしているようでしていないみたいな感じを感じる。実験して実証するような体験学習を取り入れないとテクニックと枠組みだけが発展するのではないか、と感じている。その点を今後の探究学習では、改革的に動く必要がある。」

吉川委員

「これまでの兵庫県立御影高等学校のやりとりは、非常に素晴らしいものだった。我々も現在、企業と協賛し、学生のコンペティションを開催することもある。その中で、表彰されたチームが膝から崩れ落ちるぐらい泣いて喜んでいるシーンがあった。これほどの喜びや思い入れが、御影高校のみならず、現在の日本にないような気がしている。今後、グローバルな環境にどんどん発展していくことを考えると、日本の生徒とグローバルな彼らは状況の違いがあるから、出発地点が違う。これに対応するためには、学校内だけや先生たちだけではなく、地域の人々と枠を作ること必要だが、むしろ枠にはめすぎないことも必要だと思う。カリキュラムが違うので、1年生と3年生で差がついていくと思う。この差を埋めるために底上げすることも大事だが、差を容認することも必要かと思う。今後、やりたいことがある生徒がいれば、海外の学生や企業に提案するような機会をコーディネートすることもできればと思う。」

石田委員

「CrossⅢで探究活動の論文化は、非常に素晴らしいと思う。論文化することで、文章力や分析力をはじめとした生徒の様々な能力が伸びる。論文化のところを重視して、時間を取ることが重要になる。また、探究活動をチームで実施し個々で論文を執筆するのか、チームで探究活動に取り組みチームで論文を執筆するのか、どちらになるのか。」

橋本教諭

「チームで取り組んだ探究活動を個人で論文化している。」

石田委員

「その方が良いと思う。」

飛田委員

「今回の御影高校の現状を聞いていて良いと思ったことが、生徒同士の探究メンター制度である。探究活動で得られた知識をアウトプットするという点で、メンターになることは良い。生徒がどんどん繰り上がっていく中で、メンターになるという枠組みを作り、軸を持つことは非常に良いと思う。」

伊藤委員

「コーディネーター配置の来年度以降の動きとDX推進事業の概要を伺いたい。」

橋本教諭

「コーディネーターの動きは、管理機関から伺いたい。」

森崎委員

「3年間の普通科改革支援事業が終了すれば、コーディネーターの配置はせず、教員の加配で対応する。魅力化推進を行う高校は、教員の加配を行うことができる。コーディネーター業務については、今後は特色教育推進部の教員の方々に実施してもらうことになると思う。」

伊藤委員

「DXハイスクールの支援事業は、単年度の助成制度か。」

森崎主事

「DX ハイスクールの支援事業は、単年度である。」

沖校長

「今後の意向については、森崎主事からの話にある通りだが、現場を預かる校長としては、その対応では困ると言ったことを県教委に対して協議している。コーディネーターは、非常に有効であるという流れではあるので、せっかく普通科改革支援事業でやってきたことを教員が引き継ぐということは、1年間や2年間の間はできる可能性もあるが、それ以降の期間は、縮小する一方であるということは伝えている。コーディネーター配置を教員で代替したとしても、拡大することはない。県教委側からは言えることがこれ以上ないと思い、校長である私より代理でお伝えした。」

竹中 CN

「教員の方がコーディネーター業務を担っていくということは、生徒への対応と外部の大人への対応で頭が混乱する。なので、良い方法はないかなと考えているところである。」

橋本教諭

「DX ハイスクール事業の採択校として、様々な機器を導入するということを目下取り組んできた。生徒が探究の成果を発表するために必要な、プロジェクターの設置が全ての教室でできるわけではないので、その部屋の増設や実験のための器具の購入に利用する予定の目処がついている。購入する器具としては、熱性のレーザー加工で切削できるようなものなどを考えている。」

竹中 CN

「来年度以降のコンソーシアム会議は来年度以降、コンソーシアムの「会議」は終了という運びになる。グローバルコンシャスデイについては予算支出できると思う。その方向で調整させていただきたい。本日のご出席もありがとうございました。」

第3回 コンソーシアム会議

日 時：令和6年12月20日（金）11:00-12:00

場 所：兵庫県立御影高等学校 リサーチルーム

出席者：菊地委員、伊藤委員、石田委員、谷口委員、吉川委員、藤田委員、飛田委員、尾花委員、柳本委員、鳥澤委員、渋谷委員、椎木委員、堅田委員、松下委員、千草委員
森崎主事、沖校長、石井教頭、橋本教諭、大西教諭、山口教諭
竹中コーディネーター、東コーディネーター、林コーディネーター

内 容：校長挨拶、協議

協議題：グローバルコンシャスデイの振り返り

・受講生のばらつきから、生徒の興味関心のばらつきがあることがわかり、興味深かったです。御影高校がグローバルコンシャスデイを実施する目的として、最大〇〇人だとかいう学びが達成できる、といったことを決めて、講師陣に共有してもらいたいです。実際の人数のすり合わせをした方が講師もやりやすいのではないかと思います。

・クラスをまたいで構成されたグループは盛り上がりには欠けていたような印象を受けました。アイスブレイクや自己紹介を盛り込んだほうが良いのか悩ましいところです。また、生徒たちの振り返りシートも見せていただきたいと思います。講座中のリアクションが薄かったので、どのように感じていたのかを講座改善のために知りたいと思います。

・今年度実施のグローバルコンシャスデイは、人数規模的にもやりやすかったです。生徒たちも活

動に対し、真剣に取り組んでいる姿勢が見えて、よかったと思います。

・改善点が思いつかないぐらい楽しく講座の実施をすることができました。生徒さんたちも飲み込みが早く、ワークショップもスムーズに実施することができました。ただ、知識と経験を一気に獲得する内容になっていたかと思うので、知識と経験を段階的に分けて獲得するほうが良いのではないかと思います。この取り組みに私たちは、ソーシャルビジネスや国際協力という文脈で参加しました。生徒たちは、ソーシャルビジネスや国際協力という名前は知っているけど、知識は知らない。このタイミングで事前に知識を知っていると大学での学びも変わってくると思います。知識をベースに話すことが重要なことではないかと感じました。講座の中で、生徒たちのピュアな興味は感じました。このような特別プログラムとカリキュラムを接続させ、生徒の興味関心を接続させることを考えていきたい。

・生徒たちが「良い子」の状態で待機されていたので、緊張しました。ワークに取り組んでいく中で、彼らの本音が出てくるのを見て、感じて、楽しかったです。

・生徒同士の空気を温めてあげることで、ワークショップやディスカッションがしやすくなると思いました。今後、このグローバルコンシャスデイ以外にも、他クラスとの協働を増やしていくと学びの選択の幅も増えるのではないかと考えていました。協働を盛り込むことが難しい場合、その授業の目的をブラッシュアップし、講師陣にも共有いただけると嬉しいです。

・今年度は、人数の事前告知があったことで、グローバルコンシャスデイの講座の想像が容易で、授業設計もしやすかったです。人数によっては、準備物を変更しないといけなかったのですが、今年度も昨年度実施と同程度の人数規模だったので、追加の準備物等の用意は必要なく実施できました。

・今年度は、参加者の人数が5名と少なかったこともあり、アットホームな学びの場で生徒たちに考えてもらうことができたかと思う。御影高校以外の生徒たちも含めての意味ですが、最近の高校生は、課題解決ワークショップに慣れ過ぎている傾向があるように感じています。パッケージ化されたワークショップから抜け出すために、今回は生徒たちが当事者の立場に成り切り、相手の視点を深く理解できるようにリアリティを持ってもらえるように設計しました。また、昨年度指摘させていただいた女性の人数比率も今年は大幅に向上しました。ありがとうございます。

・今年度は、持参したドローンが墜落しなくて良かったです。受講生は、理系の生徒が大半かと思っていたのですが、文系の生徒も半数ほどを占めていました。私としては、文理の垣根を超えて学ぶことができてよかったと思っています。ただ、興味関心に基づいて社会インフラの講座を受講しているのに、事前知識がない生徒が多かったように感じた。この点は、来年度の授業設計に活かしていきたいと思っています。

・ドローンを飛ばすという体験が、生徒たちのアイスブレイク的な体験になっていて良かったです。

・2時間の話の後、クラスでグループに分かれて学んだことを伝えて振り返りを実施するという内容だったと思います。2時間の講座は、講師プロデュースで、その後は同コースの生徒同士で振り返りをすることで、深い学びを得ることに繋がりそうだと感じています。昨年度実施の際に振り返

りの現場を見学させていただいたが、もうちょっと深めて欲しいという気持ちがありました。可能であれば、先ほどの同コースの生徒同士の振り返りに取り組んで欲しいと思います。

・今回、初参加となりましたが、やって楽しかったです。現代は、探究によるワークショップ慣れ等で形骸化する社会にあると思います。生徒たちには、こちらから具体的に内容を提供することで、興味と授業内容のミスマッチが防げるのではないかと思います。また、講師陣に御影高校からの授業設計に対するリクエストが欲しいです。私の教室に要配慮の生徒がいたのですが、そのような生徒に対して、プログラムを強制する必要があるかどうか、少人数での実施ではどうかなども含めて検討する必要があると感じています。

・2 時間設計の中で、途中でワークショップを導入する必要があるということで、試されていると思って頑張りました。生徒たちの雰囲気を持てなかったのが、ざっくりとした全体的な内容を伝えました。ワークショップに対して、アクティブな提案がなく、良い子の生徒ばかりになってしまっていて、ここは自分がうまく引き出せなかったなと感じております。フリーの質問時間を設けたのですが、そこでは高校生らしい質問が出ました。アイスブレイクや講義内容も高校生に向けて、噛み砕いた内容にする必要があると思いました。

・グローバルコンシャスデイの講座内容を見て、すごく充実していると感じました。私の実施した講座は、インプットの時間の方が多かったかな、と思います。生徒たちと話す中では、だんだんと生徒たちの笑顔が増えていったので、そこは安心しました。距離を詰めると、活発的に話しかけてくれる生徒たちだったので、楽しく交流することができました。講座に対する興味を事前に知れると、講義内容をよりブラッシュアップすることができるのではないかと考えています。今年度、初めて参加させていただきましたが、講座内容の充実度が高く、自分が高校生なら何の講座を選択するだろうと、そういったことを考えてワクワクしていました。

②コーディネーター業務について

教育コーディネーターは、生徒の学びの質を向上させるとともに、教員の指導力強化を支援する目的で配置された。ここでは、御影高校における教育コーディネーターの3年間の配置状況を振り返り、業務の内容と成果、課題、そして今後の展望について考察する。

■御影高校での勤務形態

教育コーディネーターは、平均週1日6時間勤務し、教員および生徒の学びに対するサポートを行ってきた。特にリモート勤務を柔軟に取り入れたことにより、多様な人材との連携を実施できた点が大きな特徴である。当校に所属する3人のコーディネーターは、教員経験者、民間企業代表、大学院生という異なるバックグラウンドを持ち、それぞれの経験や技術を発揮できる環境が整えられた。情報共有は、Slackや月1回の対面会議をコアタイムとして実施した。コーディネーター間と特色教育推進部で情報共有をこまめに行うことで、目標設定を共通認識することにつながった。

一方で、学生伴走の役割を持ったコーディネーター以外は学生との接点が少ないのも事実としてあげられる。実施した業務へのリアクションを直接的に得られる機会が限られ、フルタイム勤務でしか補完できない側面も見えた。多様な人材がコーディネーターとして関わり易いのは、非常勤であるが、フルタイム勤務で学校現場にいる専門職としてのコーディネーターが1名いるだけでも学外者の多彩な人脈や経験を学校に反映できるはずである。そのために県や国がコーディネーターを専門職としてキャリアステップが描ける雇用体制に変えていく必要がある。

■業務分担と連携体制

教育コーディネーターの業務は、外部連携のもと展開される講座設定、広報活動、コンソーシアムメンバーや運営指導委員に向けた会議の設定と運営という三つの柱を中心に展開された。ここでは、各講座設定と最終年度に新しく取り組むことができた広報活動について報告を行う。

1. STEAM 講座

STEAM 教育を軸とした外部団体連携講座では、地域のグローバル企業から個人事業主までテーマと事業規模を幅広く設定し、自然と産業とクリエイティブが近接している神戸市内の特徴を活かした協働が生まれた。

一方で、コーディネーターと教員は別の役割を担うが、連携先によっては「コーディネーターは外部の支援者」という認識の企業もあり、高校が前に出ずに外注しているとの認識が一部の連携先で発生していた。これはコーディネーターも高校職員であるという認識がまだ社会にないためである。また担当授業や統括業務のある担当教諭と企業との対面ミーティングの設定は困難であった。

2. 大学模擬講義体験

大学教員を招聘し、本校で模擬講義を行う高大連携講座では、多様な学域を設定し、講師を招聘した。本講座の実施により、本校の生徒は最先端の学びを体験することで自身のキャリアについて考える機会を設けることができた。

今後は、実施前に生徒に対して「講師に何を聞きたいか」という事前アンケートを実施し、希望する講師に情報として共有することが好ましいと考える。これにより、講師が講義内容をよりの確に準備できるような仕組みを整えることができる。このような事前準備を以降取り入れることで、より生徒の興味関心により適した内容の提供につながると考える。

3. グローカルコンシャスデイ

年1回2年生全員にグローバルコンシャスデイと名付けて、コンソーシアム会議メンバーを中心とした外部講師による講座を選択受講させた。この講座のコーディネーションを行ったが、生徒の満足はもちろん、連携機関から「学外講師による探究活動の充実」の取組を大いに評価していただいた。

4. 広報活動

「note」にて御影高校文理探究科の記事投稿ページをつくる、生徒による授業レポートや学校生活レポートを掲載することで、学外にも御影高校の魅力や取り組みを等身大で伝えた。部活と学業の合間での記事制作であるが、今後は生徒が生徒を指導していく形式で継続できるとよい。

5. 運営指導委員会・コンソーシアム会議の運営

評価を行っていただく有識者の会議、及び協力者の会議でファシリテーターを勤めたが、最初はこれが円滑に進むことが事業全体に影響があると予想してなかった。3年間やってみて、それぞれ年3回ずつの会議には過ぎないが事業の方向を肯定していただき、エールを送っていただくことや協力を得ることは事業推進に大きな力となった。

■教育コーディネーターが参加する研修内容の提案

県単位での研修を行う場合、以下の内容が有効であると考ええる。

1. 教育機関の慣習を理解する研修

コーディネーターが必ずしも教員経験者であるとは限らない。教育機関でどのような取り組みをどの時期に行なっているのかを理解することで、学内の教員とのやりとりが円滑になることが予測できる。

2. 交渉スキル研修

コーディネーターは、地域社会や企業と連携した教育を展開するが、その際に連携先との交渉が必要になる。コーディネーターは、地域や企業との連携において、長期で継続できるWin-Winな関係の構築が求められる。そこで、交渉に関する実践事例を共有する研修を行うことで、関係構築の能力を身につける。また、そのためにまず必要なのは学校が目指す教育活動の特色を正確に表現できる認識と能力と考える。

3. 探究活動活性化にフォーカスした研修

全国コーディネーター研修では研修内容を広げておられた印象があるが、生徒の探究活動を活性化させる方向を追及すべきであると考ええる。連携先の情報提供を企業・大学・海外機関を取りまとめる機構などから受けたり、受講者間で情報共有を行ったりしながら事例を共有し、探究的な学習活動の向上にフォーカスした研修を継続的に実施することが学校の教育活動の支援になるものと考ええる。

■今後の展望

御影高校における教育コーディネーターの配置は、生徒へ提供する学習環境の幅の拡張や教員の負担軽減に大きく寄与した。しかし、いくつかの課題も残されている。以下は、今後の展望である。

1. 県単位の研修を通して地域の連携強化をはかる

今後上項のような県内の教育コーディネーターに向けた研修が設置されることで、研修を通して教育コーディネーターが地域ごとに連携し、成功事例の共有や課題解決策の模索を行う場を設けることで、定義がまだ曖昧なコーディネーターの効果的な活動が期待できる。特に、他校との連携や外部連携の拡充につながり、生徒の探究活動も活性化されると考えられる。

2. 勤務制度の見直しによる専任コーディネーターの配置

多様な人材が非常勤でコーディネーターとして関わるメリットはあるが、フルタイムもしくは少なくとも週4日勤務の専任コーディネーターを1名配置することで、学外者の多彩な人脈や経験を学校現場に反映しやすくなり、生徒の活動がより活性化される。このような体制の整備には、県や国が雇用体制の見直しを進める必要がある。

3. 連携先への報酬の検討

連携先への報酬は、従来の金銭的な報酬だけが報酬でないことがわかった。人的・経験的な報酬も含めた多角的な視点で、何を報酬とするのかを連携先へのヒアリングなどを通して明らかにする必要がある。

4. 非常勤コーディネーター用のデバイスの導入

外部連携機関とのコミュニケーションツールは、現在はメールである。もし、コーディネーターが非常勤でしか設置できないならば、安全性も担保されているLTE端末が必要と考える。兵庫県は特定の管理職用にLTE端末を貸与しているが、コーディネーターの特殊な業務を考慮すればこのようなデバイスが望ましい。

③ブログメディア「note」を活用した生徒による文理探究科紹介記事の作成と広報

■目的

令和6年度より開設した文理探究科の「学び」を学校の内外に周知するとともに、生徒自身が執筆する授業レポート記事を作成することで、生徒にとって「メディアリテラシー」「ライティング技術」「情報発信力」を高め、今後の探究学習に役立てる機会をつくる。

■運営体制

・生徒メンバー

希望者を募り文理探究科1年生から12名、前身となる総合人文コース2年生より4名が編集部として記事制作を担当した。

・運営メンバー

コーディネーター 東 善仁（編集・執筆指導）

特色教育推進部教員 大西伸弥、橋本淳史（運営、投稿管理、執筆指導）

・発信プラットフォーム

<https://mikage-hs.note.jp/>

■実施概要

1. 支援プログラムの活用

note 株式会社が教育機関向けに提供している「学校支援プログラム」に申請し、採択を受けてnote 上に御影高校文理探究科の情報発信プラットフォームを整えた。

9月11日にはnote 株式会社による「表現力向上講座」をオンラインで受講。

2. 隔週での放課後講座の実施

コーディネーターの東が本業とするライティング・編集のノウハウを隔週水曜日15:30より30分～1時間程度、本校リサーチルームにて実施し、生徒の表現技術の向上を図った。

3. Slack によるコミュニケーション

Slack を開設し、生徒の記事作成を支援するコミュニケーションツールとして、記事の校正、資料の配付、相談受付等を集約した。

■生徒発信による主な記事

・地域探究プロジェクト発表会

<https://mikage-hs.note.jp/n/n058db9a1abff>

・選択 STEAM 講座（6 記事）

<https://mikage-hs.note.jp/m/m63a9c13942f7>

・ビルドアップレクチャー

<https://mikage-hs.note.jp/n/n05f6a46d5133>

・Creative Presentation

<https://mikage-hs.note.jp/n/n38bd96224f75>

・ことばの力シンポジウム

<https://mikage-hs.note.jp/n/n9e5cf55572fc>

■成果

1. 生徒自身が、自分の授業を振り返る記事を執筆することにより、学んだ過程をメタ的に捉え直し、学びを定着させることにも一役買っているといえる。また、単なる授業内容の紹介にとどまらず、必ず筆者である生徒自身の気づきや気持ちの変化を加筆することより、学校外の読者（中学生やその保護者等）にとっても等身大の学びの過程を伝えることができた。
2. このメディアのコンセプトから共有し、生徒が提出した初稿にコーディネーター、または教員が編集視点での校正や修正指示を入れ、加筆修正作業を経てから掲載する流れを踏まえたことにより、プロの現場でメディアに記事が掲載されるプロセスを擬似的に体験する機会を得た。

■今後の課題・展望

生徒による記事発信を継続するためには、生徒自身が企画したアイデアでの記事発信も増やしていく必要がある。（今期は企画アイデア出しのワークショップまでは実施し数案が挙がった）そのことにより、さらに主体的な「生徒によるメディア編集部」に成長できるだろう。文理探究科2期生の入学後は、1期生の生徒が教える立場にもなれる、よい学びの循環が生まれるための環境づくりが課題である。また、記事とともに投稿する写真にも工夫の余地がある。

■公開中の記事（2025年1月末現在）

百人一首で記憶力・瞬発力・集中力が上がる！？	ビルドアップレクチャー（1年生）
高校生がネパール産のコーヒー豆やスパイスの新商品を提案！？果たして結果は？	御影探究サークル
【終了しました】文理探究科オンライン発表会を実施します！	地域探究プロジェクト発表会@神戸大学
神戸市の広報誌×竹紙で放置竹林問題は解決できる！？	文化祭、盛り上がりました
嵐山の魅力を再発見！歩いて感じる歴史とインバウンドニーズ	授業の紹介「御影のエエとこプロジェクト」（Cross I）
AI マスターになる方法を教えます ～生成AI の多種多様な活用法～	授業の紹介「ビルドアップレクチャー」（Creation I）
みんなの思い、支えが詰まった異例の体育祭	授業の紹介（Creative Presentation）
生成系 AI を使ってみよう！	授業の紹介（クリティカルシンキング A）
建築って意外と身近？建物に隠されたいろんな工夫	授業の紹介「TRY プロジェクト」（Creation II）
神戸の未来は、どんな街？	授業の紹介「地域探究プロジェクト」（Cross II）
経営って何？様々な経営の“形”	【新聞掲載】探究プロジェクト成果が行政施策に反映されました！
ウニと日本海とわたし	モデルになりました
パツと見じゃわからない！自分たちが過ごす建物を防災の観点から見る	文理探究科 note プロジェクトの「いま」
文理探究科説明会 参加申込受付中！（終了しました）	2024.4.25_Creative Presentation
ことばのカシンポジウム	御影高校文理探究科の note はじめます

④目標の達成状況、成果、評価（速報値より）

三菱 UFJ リサーチ&コンサルティングが作成した「高校魅力化評価システム」のアンケート項目より

・「将来国や地域の担い手として、積極的に政策決定に関わりたい」に当てはまると答える割合

	2024（目標値）	2023（目標値）	2022（目標値）	2021 ※事業前
全校生徒	39.3%（50%）	42.0%（48%）	42.8%（45%）	44%
クリエイション講座参加生徒*	85.0%（60%）	90.1%（55%）	90.6%（50%）	

・「国際社会の課題解決に貢献したい」に当てはまると答える割合

	2024（目標値）	2023（目標値）	2022（目標値）	2021 ※事業前
全校生徒	57.0%（65%）	56.4%（63%）	58.9%（60%）	68%
クリエイション講座参加生徒*	92.5%（80%）	98.4%（75%）	92.9%（70%）	

・「客観的な証拠に基づき、判断する科学的視点から課題解決にあたることができる」に当てはまると答える割合

	2024（目標値）	2023（目標値）	2022（目標値）	2021 ※事業前
全校生徒	50.5%（55%）	47.7%（53%）	49.4%（50%）	50%
クリエイション講座参加生徒*	92.5%（65%）	93.4%（60%）	91.8%（55%）	

*2024年度は、3項目とも「文理探究科生徒」を対象としている。

■本事業での目標指標、および、上記の結果に関する評価

計画書にも示したように、本事業については、様式が生徒の変容に関する評価となっているため、上記のような、生徒の変容の視点に関する成果目標を設定しており、「高校魅力化評価システム」のアンケートの中で、評価が低く、本校の課題であると認識できる3項目について、特色ある学びの先行実施を通じて、3年間の事業の実施によっていかに成果を上げることができるかを検証することとしている。

上記結果については、2023年度までは「クリエイション講座に参加した生徒」と、「全校生徒」へのアンケート結果とを比較したものとし、2024年度については、文理探究科を設置した年度となるため、「文理探究科1年生徒40名」と、「全校生徒」との比較となっている。なお、「クリエイション講座に参加した生徒」は、2022年度は172名、2023年度は61名である。「全校生徒」に関しては、2022年度は1学期末に実施し、2023年度・2024年度は2学期当初に実施したアンケート結果である。また、2022年度・2023年度「クリエイション講座参加生徒」には、講座直後にアンケートを実施し、2024年度の「文理探究科生徒」には、2学期末に実施した。

今年度の結果を見てみると、例年通り、「全校生徒」の結果と比して、「文理探究科生徒」は、3項目とも積極性が高いことが認められる。一方、昨年度までの「クリエイション講座参加生徒」にアンケートを行った数値よりも低い。これは、アンケートを実施した時期が講座実施直後としばらく経ってからの差が反映されたと考えている。しかし、「文理探究科生徒」のモチベーションの高さを見て取れる。やはり、Cross IやCreation Iの学びにおける講義やワークショップ等を通じて、得られた成果の結果が数値となって表れているものと考えられる。やはり、普段から開講されている「学校の中だけで展開される学び」ではなく、「学校外で開かれた学び」が、子どもたちの資質・能力の向上につながっているということであることが言える。事業としては、成功しているものとするが、「グローバルコンシャスデイ」等、学科以外の生徒を対象とした学びを実践しているものの、全校生徒に学科の成果をどのように波及させられるかは、引き続き本校の課題であると言える。



兵庫県立御影高等学校
Hyogo Prefectural Mikage Senior High School



最新情報はWEBで公開中